

後山無常堂古墳・後山明神3号墳

発掘調査報告書

1989年3月

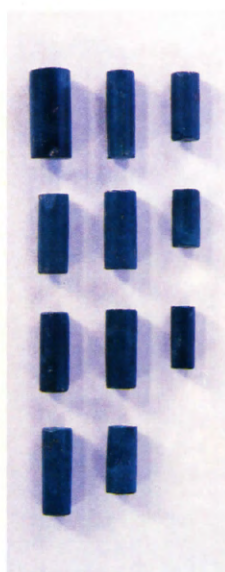
石川県小松市教育委員会



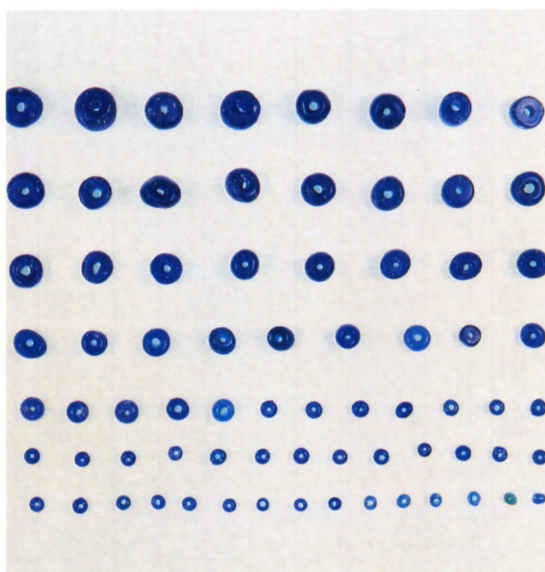
後山無常堂古墳 銅製四獣鏡



同上勾玉



後山明神3号墳 管玉・ガラス製小玉



序 文

梯川によって形成された沖積平野の縁辺に連なる丘陵には、今日までたくさんの古墳が確認されています。とりわけ、昭和61年より発掘調査が進められた河田山古墳群は、全国的に観ても有数の古墳群であり、なかでも凝灰岩製切石積横穴式石室の発見は、北陸のみならず我が国の古代史研究に大きな波紋を投げ掛けています。

この河田山古墳群の南向に位置する埴田町後山において古墳が発見されたのは、昭和29年の夏、畑の耕作中に青銅製環鈴、直刀や土師器が出土したのが初見であります。その後、この古墳群は埴田後山明神古墳群と命名されましたが、その時の出土品は既に失われてしまい、後山明神古墳群の性格も不明のまま今日にいたっております。

ここに報告する埴田無常堂古墳及び後山明神3号墳は、土採取及び畑開墾によってそれぞれ偶然に発見されたものです。とくに、埴田後山明神3号墳は地主の迅速な発見の第一報によって、遺物が散逸することなく学術調査されたことは、埋蔵文化財の保護にとって大きな成果であります。

先人が嘗々として築いた文化財は、現代を生きぬく私達に数多くの指針を与えてくれます。したがって、これらを保護活用し、教育と文化の発展に寄与するとともに、未来に生きる人達に伝えることは、私達に課せられた責務と考えます。

最後に、この発掘調査及び報告書の刊行にあたり格別のご指導、ご協力を賜りました埋蔵文化財諸関係機関、地主その他関係者に心から厚くお礼申し上げます。

平成元年3月

小松市教育委員会

教育長 木 下 健 次

例 言

1. 本書は、石川県小松市埴田町に所在する、後山無常堂古墳と後山明神3号墳の発掘調査報告書である。

2. 後山無常堂古墳は、昭和57年7月1日から7月29日にかけて、土採取中の発見に伴い緊急に発掘調査を実施したもの。後山明神3号墳は、昭和62年10月2日から11月15日にかけて、畑地耕作中の発見に伴い緊急に発掘調査を実施したものである。共に、市単独事業として、教育委員会が調査主体となって実施した。

尚、後山無常堂古墳出土の鉄製品の保存処理については、昭和58年度国庫補助事業として、元興寺文化財研究所に委託して行った。また、出土品の整理及び報告書の作成は、昭和63年度市単独事業として実施した。

3. 発掘調査担当及び調査補助員

後山無常堂古墳……担当者：小村 茂、宮下幸夫、 補助員：久生秀樹、五十嵐正登

後山明神3号墳……担当者：宮下幸夫、樫田 誠、望月精司、石田和彦

4. 出土品整理及び報告書作成

後山無常堂古墳は宮下が、後山明神3号墳は樫田が担当し、下記各氏の協力を得た。

〈遺物の洗浄・記名・復元〉 打田外喜代、宮田佐和子、江野直子

〈遺物の実測・トレース〉 宮田佐和子、江野直子、宮下智子

〈遺構のトレース〉 石田和彦、宮田佐和子、江野直子

〈写 真 撮 影〉 宮下幸夫

5. 報告書の編集及び執筆

本書の編集は、小村茂の指導のもと、宮下・樫田が担当した。

執筆は、第I章・第III章第5節1を石田が、第II章を宮下が、第III章第4節4を宮田が、付編の土器観察表を江野が担当し、その他を樫田が担当した。

6. 本書で示す方位はすべて磁北である。尚、第1図の周辺の遺跡には、国土地理院発行25,000分の1地形図（昭和59年11月30日発行「小松」「別宮」）を使用し、第2図の後山古墳群地形図には、小松市発行2,500分の1国土基本図（昭和59年度修正「小野」「里川」）を引用した。

7. 調査の実施及び報告書の作成にあたっては、以下の方々、機関、団体から御協力と御指導を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略 50音順）

上野与一、荻中正和、加納他家男、河合秀樹、北野勝次、北野博司、久保智康、小坂清俊、小嶋芳孝、桜井甚一、高堀勝喜、田嶋明人、土屋宣雄、橋本澄夫、浜岡賢太郎、浜崎悟司、久田正弘、藤井明夫、谷内尾晋司、湯尻修平、〈地主〉中村外喜雄、小山忠明・策次
石川県立埋蔵文化財センター、石川考古学研究会、金沢大学考古学研究会、(財)元興寺文化財研究所、寺井町歴史民俗資料館、奈良県立橿原考古学研究所、奈良国立文化財研究所

目 次

第I章 遺跡の位置と環境	1		
第II章 後山無常堂古墳の調査	6		
第1節 調査に至る経緯と調査概要	6		
1. 調査に至る経緯	6		
2. 調査概要	6		
第2節 墳丘の調査	10		
第3節 主体部の調査	13		
1. 第一主体部	13		
2. 第二主体部	13		
第4節 出土遺物	19		
1. 土 器	19		
2. 鉄 器	20		
① 眉庇付 冑	② 短 甲	③ 鉄 剣	④ 鉄 鍬
⑤ 刀 子	⑥ 蓋状鉄製品		
3. そ の 他	31		
① 四 獣 鏡	② 勾 玉	③ 縦 櫛	
第5節 小 結	34		
第III章 後山明神3号墳の調査	37		
第1節 調査に至る経緯と調査概要	37		
1. 調査に至る経緯	37		
2. 調査概要	37		
第2節 墳丘・周溝の調査	39		
1. 立地および周辺の状況	39		
2. 墳 丘	39		
3. 周 溝	39		
第3節 主体部の調査	42		
1. 主体部の構造	42		
2. 遺物出土状態	48		
第4節 主体部出土遺物	50		
1. 須 恵 器	50		
2. 土 師 器	52		
3. 鉄 製 品	56		
4. 玉 類	58		
第5節 その他の遺構と遺物	62		
1. 1 号 溝	62		
2. 2 号 溝	63		
3. 1 号 土 坑	65		
4. 2 号 土 坑	66		
5. その他の遺物	66		
第6節 小 結	71		
第IV章 考 察	73		
付 編 小松市内粘土室墳出土土器	94		
写真図版	1～15		

表 目 次

第 1 表	周辺の遺跡	3	付第 1 表	後山明神 1 号墳出土土器	106
第 2 表	鉄製品観察表	58	付第 2 表	念仏林古墳出土土器	106
第 3 表	管玉観察表	61	付第 3 表	養輪塚古墳出土土器	107
第 4 表	ガラス製小玉観察表	61	付第 4 表	矢田借屋 8 号墳出土土器	107
第 5 表	2 号土坑ほか出土土器観察表	66	付第 5 表	矢田借屋 7 号墳出土土器	108
第 6 表	箱形粘土柳埴一覧表	74	付第 6 表	矢田借屋 4 号墳出土土器	108

挿 図 目 次

第 1 図	周辺の遺跡	2	第 28 図	主体部遺物出土状況図	49
第 2 図	埴田後山古墳群地形図	5	第 29 図	主体部出土須恵器実測図	53
第 3 図	墳丘現況図	7	第 30 図	主体部出土須恵器実測図	54
第 4 図	墳丘実測図	9	第 31 図	主体部出土土師器実測図	55
第 5 図	墳丘土層断面図	11	第 32 図	主体部出土鉄製品実測図	57
第 6 図	第一主体部平面図	14	第 33 図	ガラス製小玉法量分布図	59
第 7 図	第一主体部土層断面図	15	第 34 図	主体部出土玉類実測図	60
第 8 図	第二主体部平面図	16	第 35 図	挿図区分図	62
第 9 図	第二主体部礎床平面図	17	第 36 図	1 号溝平面図	62
第 10 図	第二主体部断面図	18	第 37 図	主体部下位遺構全体図	64
第 11 図	出土土器実測図	19	第 38 図	1 号土坑平面・断面図	67
第 12 図	眉庇付青・復元短甲実測図	21	第 39 図	その他の遺構出土遺物実測図	69
第 13 図	短甲部品実測図(1)	24	第 40 図	その他の遺構出土遺物実測図	70
第 14 図	短甲部品実測図(2)	25	第 41 図	念仏林古墳主体部内遺物分布図	77
第 15 図	短甲模式図	26	第 42 図	粘土柳(室)断面略図	78
第 16 図	鉄剣実測図	27	第 43 図	南加賀型木芯粘土室諸例	79
第 17 図	鉄器実測図(1)	29	第 44 図	横穴式木室諸例	80
第 18 図	鉄器実測図(2)	30	付第 1 図	埴田後山明神 1 号墳出土土器実測図	96
第 19 図	四獣鏡実測図	32	付第 2 図	念仏林古墳出土土器実測図	97
第 20 図	勾玉実測図	33	付第 3 図	念仏林古墳出土土器実測図	98
第 21 図	縦櫛実測図	33	付第 4 図	養輪塚古墳出土土器実測図	99
第 22 図	後山明神 3 号墳の立地と周辺の古墳分布	38	付第 5 図	養輪塚古墳出土土器実測図	100
第 23 図	墳丘実測図	40	付第 6 図	養輪塚古墳出土土器実測図	101
第 24 図	周溝土層断面図	41	付第 7 図	矢田借屋 8 号墳出土土器実測図	102
第 25 図	主体部平面図	43	付第 8 図	矢田借屋 7 号墳出土土器実測図	103
第 26 図	主体部土層断面図	45	付第 9 図	矢田借屋 4 号墳出土土器実測図	104
第 27 図	2 層土除去前に把握した西側粘土壁	47	付第 10 図	矢田借屋 4 号墳出土土器実測図	105

写真図版目次

図版 1	後山古墳群(航空写真)	図版 7~11	後山明神 3 号墳(調査と検出遺構)
図版 2~3	後山無常堂古墳(調査と検出遺構)	図版 12~14	後山明神 3 号墳(出土遺物)
図版 4~6	後山無常堂古墳(出土遺物)	図版 15	後山明神 3 号墳(その他の遺構出土遺物)

第 I 章 遺跡の位置と環境

小松市は、石川県西南部に位置し、県内第 2 の人口を擁する。市内は、地形的に東南部の丘陵・山岳地帯と西北部の沖積平野部に二分される。前者は能美江沼丘陵の一部をなす小松東部丘陵、能美山地・大日火山地などよりなり、後者は加賀平野の一部をなす小松江沼平野よりなる。後者はさらに北部の梯川流域、南部の加賀三湖と称される今江潟(全面干拓)、柴山潟(約 6 割干拓)、木場潟周辺の低湿地に概ね二分でき、日本海に面して小松砂丘が発達している。

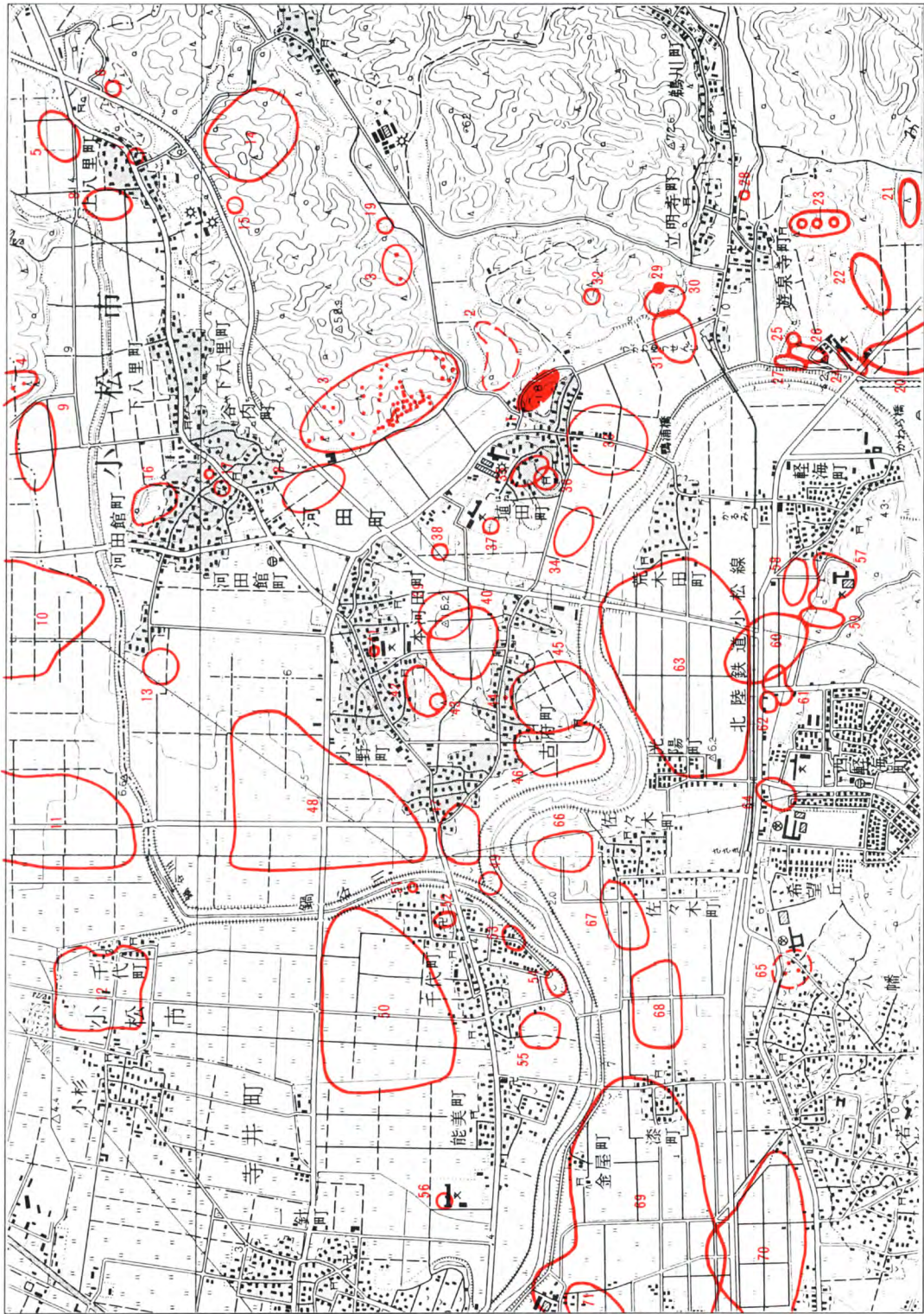
中でも、白山連峰の大日山系に源を発する梯川が山間部を抜け、沖積平野へ出ようとする小松東部丘陵縁辺部には、本遺跡をはじめ複数の古墳群が存在している。また、中・下流域には灌がいや河川交通の便を背景に大規模の集落跡が高密度に見られる。一方、南部の加賀三湖周辺では、湖畔台地上に縄文時代の集落跡及び数多くの古墳が分布している。その南東側の丘陵裾部には、県下最大規模の南加賀古窯跡群が存在している。

遺跡の所在する埴田町は、梯川中流域の沖積平地と丘陵地にまたがって形成される集落で、丘陵部を山林と畑地として利用するほか、大部分を水田で占めている。埴田町の南側には、南東部の山岳地帯から大杉谷川・郷谷川、東部の丘陵地帯から湊上川と、3つの支流を集めた梯川が西へ向きを変えながら流れている。一方、西側には小松東部丘陵から派生している洪積台地が、梯川と鍋谷川が合流する地点まで続いている(古府台地)。後山無常堂古墳と後山明神 3 号墳は、この台地と丘陵部との分岐部付近に見られる、標高約 20m の残丘上に展開された 8 基以上からなる埴田後山古墳群の東端並びに北端に各々立地している。従来埴田町地内の低丘陵部に分布する古墳については、一括して『埴田古墳群』と呼称していたが、今回、本報告書において、通称「後山」に立地するものについては、その地形的条件に拠り独自の古墳群として把握することとし、『埴田後山古墳群』と呼称することとした。それに伴い、『埴田無常堂古墳』という名称も『後山無常堂古墳』に変更した。また、御菩提所古墳や埴田山 1・2 号墳など、東側丘陵裾部に立地するものについては『埴田山古墳群』と呼称することとした。

埴田後山古墳群は、梯川流域を望む古墳群の中で唯一の後期群集墳で、本遺跡の発掘調査のほか、昭和 27 年には後山明神 1 号墳から提瓶、直刀、高坏、壺が、昭和 29 年には同 2 号墳から環鈴、直刀、甲冑などが出土している。昭和 63 年実施の詳細分布調査では、古墳群北西部の後山明神地区から新たに 3 基の古墳を確認した。以下、縄文時代からの順に周辺の遺跡を概観する。

本遺跡周辺に存在する縄文時代の遺跡には、湊上川右岸の河岸段丘上に中期後半から始まる複合集落遺跡の中海遺跡がある。本遺跡とは梯川を隔てて約 1 km 南側の丘陵斜面に立地する軽海西芳寺遺跡は、中期中葉から後葉にかけての集落遺跡である。その他、確認されているものには、宮谷寺屋敷遺跡、南野台遺跡、遊泉寺遺跡、上八里 A 遺跡、河田向山下遺跡などがある。

弥生時代の遺跡は、本遺跡より西の梯川中下流域左岸の沖積平野に見られる。中期は、「小松



第1図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代	備考	No.	遺跡名	種別	時代	備考	No.	遺跡名	種別	時代	備考	No.	遺跡名	種別	時代	備考
1	埴田後山古墳群	古墳	古墳	S57・62市教委調査	24	ブッシュウォンジヤマ古墳群	古墳	古墳	1～3号墳	48	古府のまちな遺跡	包含地	古墳～中世	S48県教委、S63市教委調査 白銅鏡出土					
2	埴田山古墳群	古墳	古墳	御菩提所古墳、埴田山1・2号	25	仏生寺塚	経塚	中世		49	フントド遺跡	集落跡・経塚	平安						
3	河田山古墳群	古墳	古墳	S61・62市教委調査、62基礎確認7基礎確認	26	遊泉寺遺跡	包含地	縄文		50	千代オオキタ遺跡	包含地	古墳～平安						
4	河田向山古墳群	古墳	古墳		27	浦泉寺遺跡	寺院跡	平安初期		51	小野町遺跡	包含地	古墳						
5	上八里中世墓	墳墓	室町		28	伝隆明寺跡	寺院跡	平安初期		52	千代城跡	城跡	室町						
6	上八里B遺跡	包含地	奈良		29	遊泉寺クボクタB遺跡	包含地	平安～中世		53	横地遺跡	包含地	縄文						
7	上八里2号窯跡	窯跡	不詳		30	遊泉寺クボクタA遺跡	包含地	平安～中世		54	本村遺跡	包含地	古墳						
8	上八里A遺跡	包含地	縄文		31	遊泉寺クボクタA遺跡	包含地	平安～中世		55	千代マエタ遺跡	寺院跡	古墳～中世						
9	河田向山下遺跡	包含地	縄文		32	埴田塚	塚	中世?		56	定地坊跡	寺院跡	室町						
10	佐野八反田遺跡	包含地	奈良・平安		33	埴田遺跡	包含地	奈良～平安		57	軽海庵寺跡	寺院跡	平安後期	S54県教委調査					
11	牛島ウハン遺跡	包含地	古墳前期・平安		34	埴田ウラムキ遺跡	包含地	平安～中世		58	西芳寺遺跡	寺院跡	平安～近世	S46市教委調査					
12	千代遺跡	集落跡	縄文～中世	S59・60県教委調査	35	宮谷寺屋敷遺跡	包含地	縄文・室町		59	軽海中世墓跡群	墳墓	鎌倉末期～室町初期						
13	下出地類遺跡	包含地	不詳	調査	36	埴田フルカワ遺跡	包含地	古墳		60	軽海西芳寺遺跡	包含地	縄文～中世	S58・59県教委調査					
14	上八里遺跡群	古墳	古墳	S63市教委調査	37	埴田ミヤタンタン遺跡	包含地	不詳		61	龜山玉造遺跡	集落跡	古墳前期	S46市教委調査					
15	穴場横穴	古墳	古墳		38	埴田ミヤケノ遺跡	包含地	不詳		62	軽海遺跡	包含地	弥生～中世	S60県教委調査					
16	河田館遺跡	古墳	古墳		39	小野スギノキ遺跡	包含地	平安～中世		63	荒木田遺跡	包含地	古墳～中世						
17	谷内横穴	古墳	古墳		40	小野遺跡	包含地	平安		64	大谷口遺跡	包含地	弥生後期						
18	河田C遺跡	包含地	不詳		41	小野窯跡	窯跡	江戸		65	八幡古墳群	古墳	古墳	大塚・中塚・行者塚					
19	河田山窯跡	窯跡	不詳		42	十九堂山遺跡	寺院跡	平安初期		66	佐々木アサハタケ遺跡	集落跡	弥生～中世	S59・60県教委調査					
20	中海遺跡	集落跡	縄文～中世	S56・57県教委調査	43	十九堂山中世墓跡群	墳墓	中世		67	佐々木ノノウラ遺跡	集落跡	弥生～中世	S59県教委調査					
21	長寛寺中世墳墓	墳墓	室町		44	古府横穴	古墳	古墳		68	佐々木遺跡	集落跡	平安						
22	中海C遺跡	包含地	平安～中世		45	南野台・南野台B遺跡	包含地	縄文中期・古墳	一部耕地整理の際破壊	69	漆町遺跡	集落跡	弥生～中世	S54～56・59・60県教委、S60・61市教委調査					
23	宮の奥3号経塚	経塚	平安～鎌倉		46	古府シマ遺跡	包含地	平安～中世		70	打越遺跡	集落跡	古墳～中世						
					47	古府遺跡	包含地	弥生～中世	S59県教委調査	71	念仏寺塔遺跡	集落跡	弥生～中世						

式土器」の標式遺跡である八日市地方遺跡が下流に見られるが数は多くない。後期後半になると中流域で遺跡数が増加しだしてくる。主なものでは漆町遺跡、白江梯川遺跡、白江念仏寺塔遺跡、吉竹遺跡、佐々木ノテウラ遺跡、佐々木アサバタケ遺跡などがある。これらの遺跡のほとんどは弥生時代から中・近世に至る複合集落遺跡である。

上述の集落遺跡は、古墳時代前期には他地域の土器群の流入とともに飛躍的な発展を遂げている。ほかにも、荒木田遺跡、亀山玉造遺跡、小野町遺跡、本村遺跡、千代マエダ遺跡が存在するようになる。同時期、梯川をやや遡り、流域の集落を見渡すことの出来る丘陵縁辺部には河田山古墳群、それより150m南で、本遺跡群と隣接する地に埴田山古墳群が存在する。また、梯川と滓上川の合流地点付近にはブッシュウジヤマ古墳群、梯川をやや下った南側丘陵裾には八幡古墳群が周知されている。さらに河田山古墳群と鍋谷川を狭んで向側山裾には河田向山古墳群が存在し、7基が確認されている。河田山古墳群は、産業振興団地造成工事に伴う発掘調査を昭和61・62年に渡り実施し、前中期の古墳及び切石積横穴式石室を主体部にもつ終末期古墳の計62基を確認している。この河田山古墳群に加え、後期群集墳の埴田後山古墳群が存在することで、丘陵縁辺部での古墳の築造が古墳時代各期にわたりほぼ継起的になされていると見なすことが出来る。にも関わらず、6世紀代（古墳時代後期）に入ると流域の各遺跡からは遺物、遺構とも急激な減少を見せる。この状況は、7・8世紀にも大きな変化はなく、現在のところ漆町遺跡の一部と佐々木ノテウラ遺跡、中海遺跡、白江梯川遺跡、古府遺跡から遺物等がごく僅かに確認されるにとどまる。

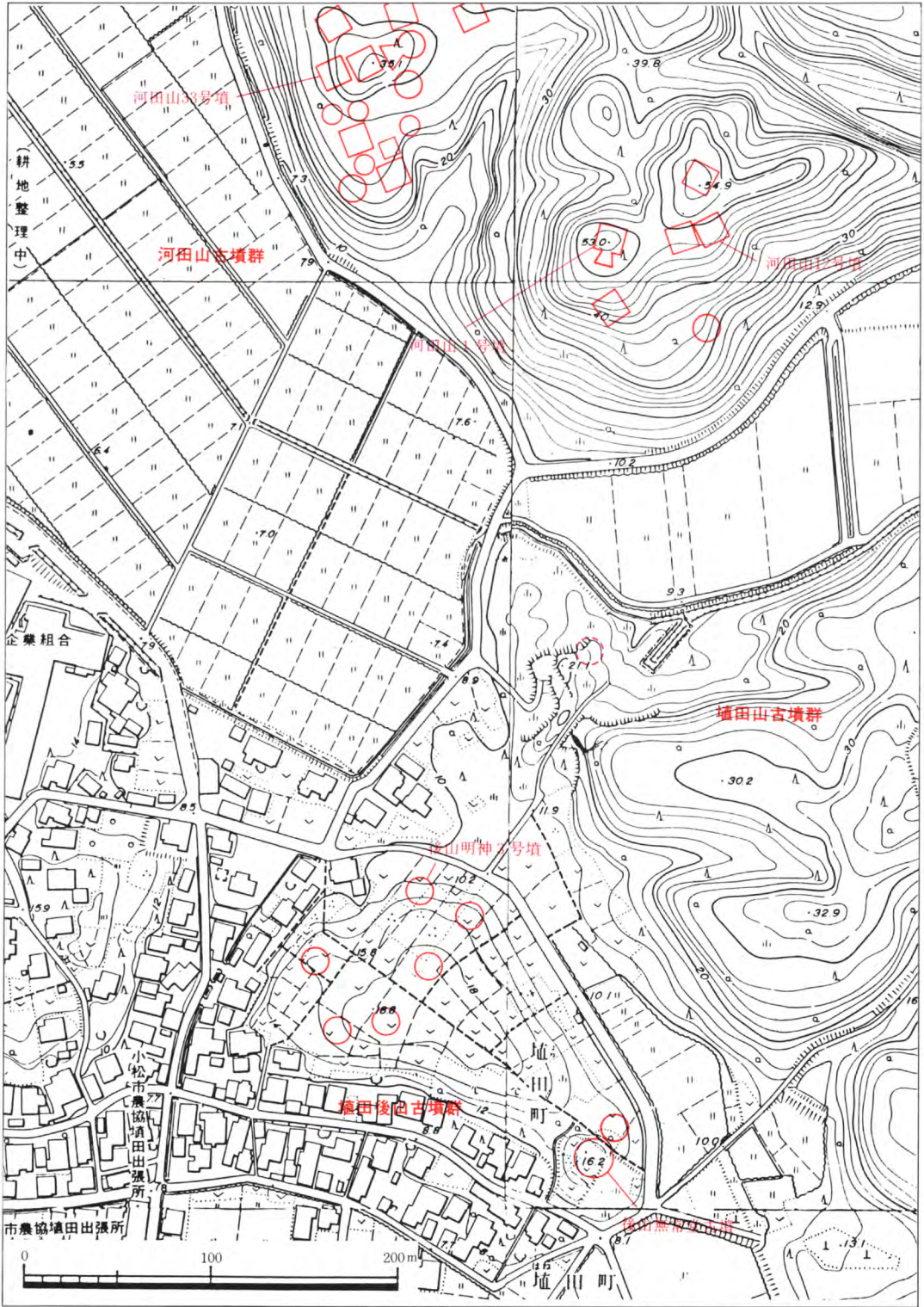
奈良時代には、埴田遺跡、上八里B遺跡などが新たに出現するが、遺跡の数・規模は減少・縮小したままであり、周辺が再び活況を取りもどすのは平安時代も中頃になってからである。平安時代には、本遺跡周辺から埴田ウラムキ遺跡、遊泉寺クボタ遺跡が確認でき、先述の中流域複合集落跡においても掘立柱建物をはじめ、遺構や遺物が急増してくる。また、西側の古府台地上では十九堂山遺跡から布目瓦が、古府遺跡から10世紀中葉の軒平瓦がそれぞれ出土しており、当地が加賀国府の所在地として有力視されているが、周辺一帯における調査面積が少なく、確証は発見されていない。

中世においては、前出の複合集落から多数の井戸跡や中世陶磁器などが検出されるとともに、本遺跡周辺の丘陵部では、仏生寺跡、軽海中世墓跡群、西芳寺跡、十九堂山中世墓跡群、長寛寺中世墓跡などが確認されている。

近世における考古資料としては、小野窯跡が周知されている。

参 考 文 献

- 浅香年木・田川捷一他 『角川日本地名大辞典』 17 石川県 角川書店 1981年
国府村史編纂委員会 『国府村史』 国府村役場 1956年
石川県教育委員会 『石川県遺跡地図』 1980年
石川県埋蔵文化財センター 『県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』 1984年



第2図 植田後山古墳群地形図 (S=1/3,500)

第II章 後山無常堂古墳の調査

第1節 調査に至る経緯と調査概要

1. 調査に至る経緯

金沢大学考古学研究会はかねてから梯川流域で遺跡分布調査を実施していたところ、昭和57年4月29日埴田町の丘陵突端の土砂採取現場で古墳が半壊され、その排土中より銅製四獣鏡・鉄剣等を発見した。ただちに石川県立埋蔵文化財センターと小松市教育委員会にその旨を連絡した。市教育委員会では施工者の地主に工事の中止を申し入れ、協議を行った結果、市教育委員会で発掘調査を行うこととし、調査が終了するまで工事を中止することで合意した。



発見状況（人物の所が主体部）

遺跡は、以前に環鈴などが出土した埴田後山明神1・2号墳などが存在している丘陵の突端に位置していて、土採取された崖断面に墳丘の盛土や主体部と思われる落ち込みが認められた。

遺跡名称については、同じ丘陵に立地しているが、後山明神1・2号墳の確実な位置及び本墳との関係が不明なため「無常堂」という古字名をとり『後山無常堂古墳』の名称を付した。広義には新たに呼称する『埴田後山古墳群』の中に含まれる。この無常堂とは、以前ここに「さんまい（墓場・火葬場）」があったためであり、現に、地表や耕作土中に火葬骨片や骨壺片などが認められた。

2. 調査概要

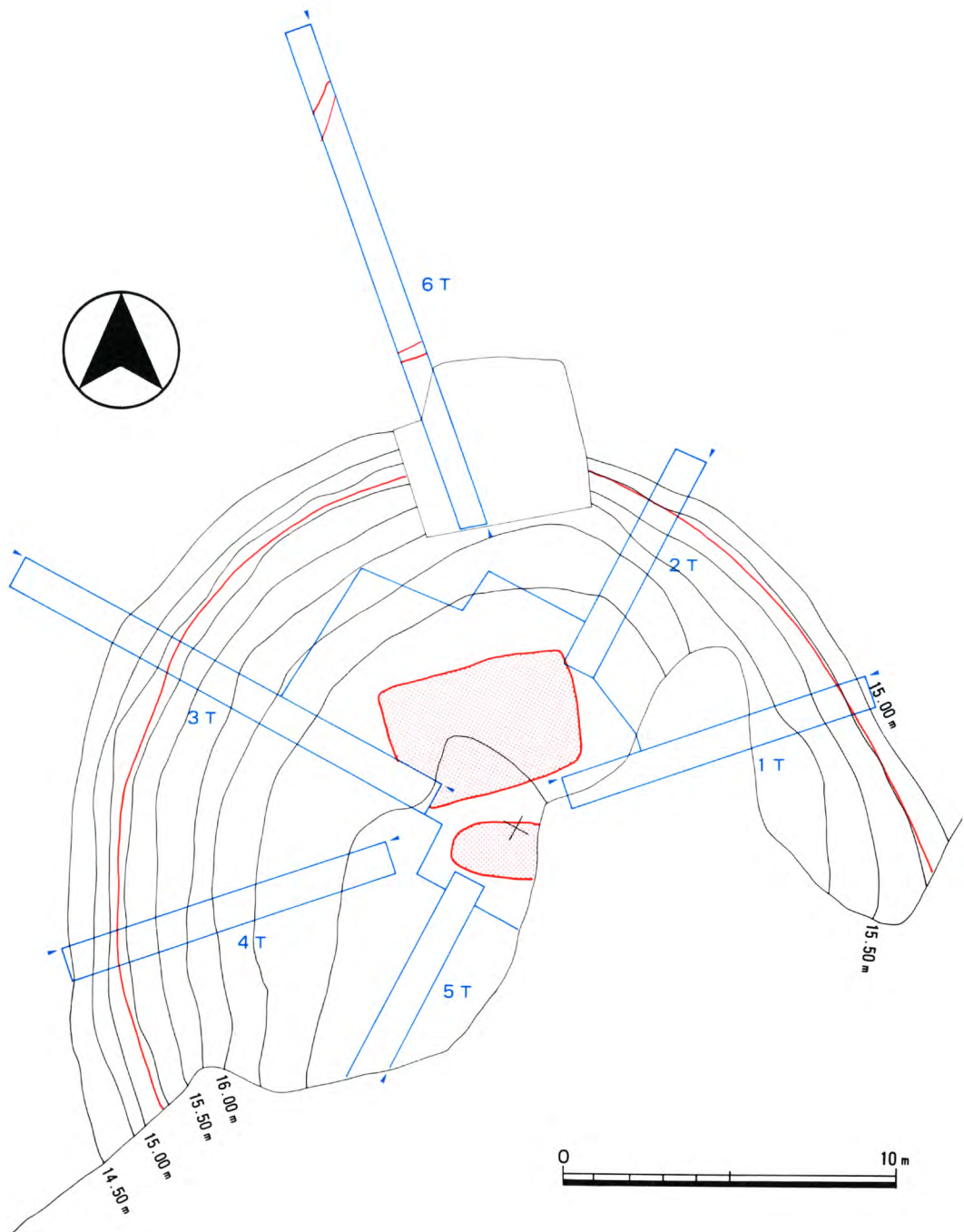
調査は、昭和57年7月1日より開始した。まず、古墳の現況図作成に並行して、半壊された主体部のものと思われ、前述の銅製四獣鏡や鉄剣が発見された排土のフルイがけを行った。その結果、新たにメノウ製の勾玉2個や鉄製品が検出された。

墳丘は、土取工事で半壊されていたため、現況図及び崖断面の墳丘の状況より判断し、主体部と考えられる落ち込み近くの一点を中心として、墳丘上に5本のトレンチ（1～5 T）を設定した。また、丘陵の上方に向かって1本のトレンチ（6 T）を設定した。

7月9日より主体部のプラン確認作業を開始する。12日までにほぼ確認し終え、掘下げを開始する。また、その北で3 Tの断面で一部確認されていた大きな掘り形を検出し、15日より掘下げ



第3図 墳丘現況図 (S=1/300)



第4図 墳丘実測図 (S=1/300)

を開始する。主体部では、16日までに眉庇付冑及び短甲の三角板などを検出した。掘り形では、黄白色粘土が確認され、粘土礫の可能性が大きく、前者を第一主体部、後者を第二主体部と呼称した。17日に第一主体部の掘下げを終了した。後、写真撮影、図取り、遺物取り上げ及びバチワリを行い、第一主体部の調査を21日に終了した。第2主体部は、掘り形及び粘土礫の掘下げを同じく21日に終了し、写真撮影、図取り及び下の調査のための粘土取りはらいを25日までに終え、底面の礫等の調査及び墳丘等の補足調査を行い、本古墳の調査は7月29日に終了した。



調査風景



保育園児の見学

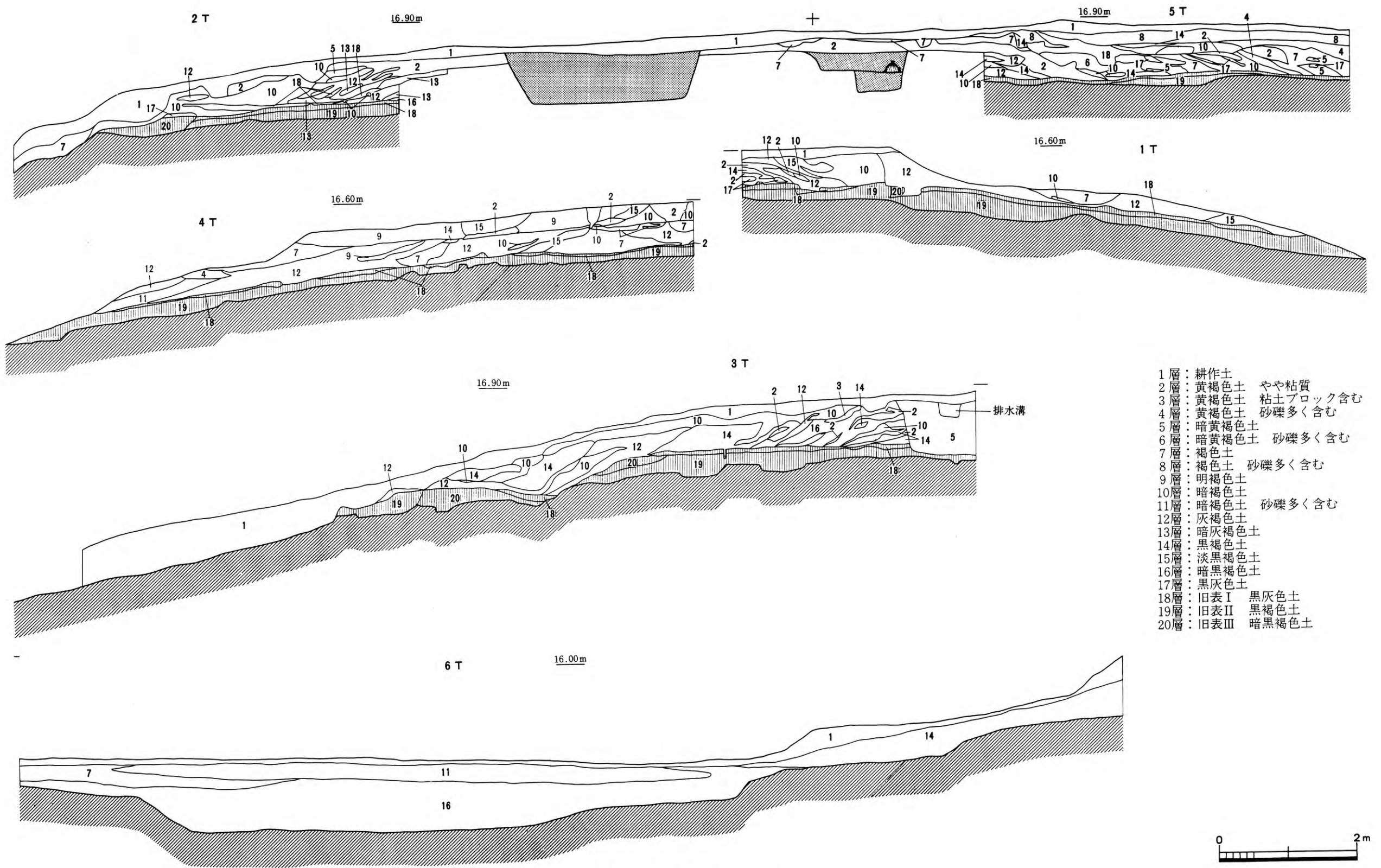
第2節 墳丘の調査

古墳は、埴田町の集落の東側にある低丘陵の突端（南東端）に立地している。墳丘は、以前の土取りで約1/4が失われていたが、その当時の都市計画図（1/2,500）には古墳状の盛り上がりか認められる。

以前と今回の土取りで全体の半分近くの墳丘が失われ、更に、茶栽培等のたび重なる耕作と自然流出で墳丘頂部は平坦となり、当初から盛土の遺存度は悪いと考えられた。

墳丘裾部まで設定した4本のトレンチより、旧表の黒灰色土の上に墳頂付近で60～70cmの墳丘盛土が認められた。裾部では旧表をカットして盛土を行っている部分も認められた。この部分から墳丘盛土の上面までの高さは1.5mであった。周溝は認められず、古墳の大きさは、復元すると径約23.5mの整円形をした円墳と認められた。

また、丘陵の上方向かって入れた6Tで下底の幅8m、深さ60cmの落ち込みが検出された。これは、丘陵を切断或は丘陵との境を意識して造った溝の可能性があると考えられるが、調査区域外であり、更に、幅1mのトレンチの調査しか出来なかったので断定はさけ、今後の調査を待ちたい。



第5図 填丘土層断面図 (S = 1/60)

第3節 主体部の調査

1. 第一主体部（第6・7図）

前述のように半壊されていて、調査開始時にはその落ち込みが崖断面に認められた。

本主体部は、ほぼ古墳の中心に、主軸を東西にもって検出された。東半は削平されていて、現存の長さ295cm、幅の最大165cm、深さは約30cmであった。いわゆる木棺直葬であり、残存部のほぼ中央の南壁付近に庇の部分の一部を欠くがほとんど完形の眉庇付冑、鉄鏃が出土した。また、東側の残存部端より短甲の三角板や裾板が出土した。その他、約20cm浮いた状態で冑の近くより三角板等の鉄片が出土した。

また、この冑の下に65×50cmの不整形をした深さ30cmの土坑が検出された。性格は不明であるが、この埋土より短甲の三角板が2片出土している。

表土下約30cmでプランが認められ、その埋土より後世に盗掘をうけた痕跡は見いだせなかった。しかし、三角板やその他短甲の部品の一部は、浮いた状態あるいは眉庇付冑の下に検出された土坑の埋土中と離れて出土した。この両者を合わせて考えれば、これら短甲・眉庇付冑等は棺外遺物であった可能性が大きく、棺が朽ちていく段階で中に落ちたり、壊れたものと考えられた。また、この冑周辺の内外に自然石が数個認められた。主体部内のものは三角板と同じく浮いた状態であった。

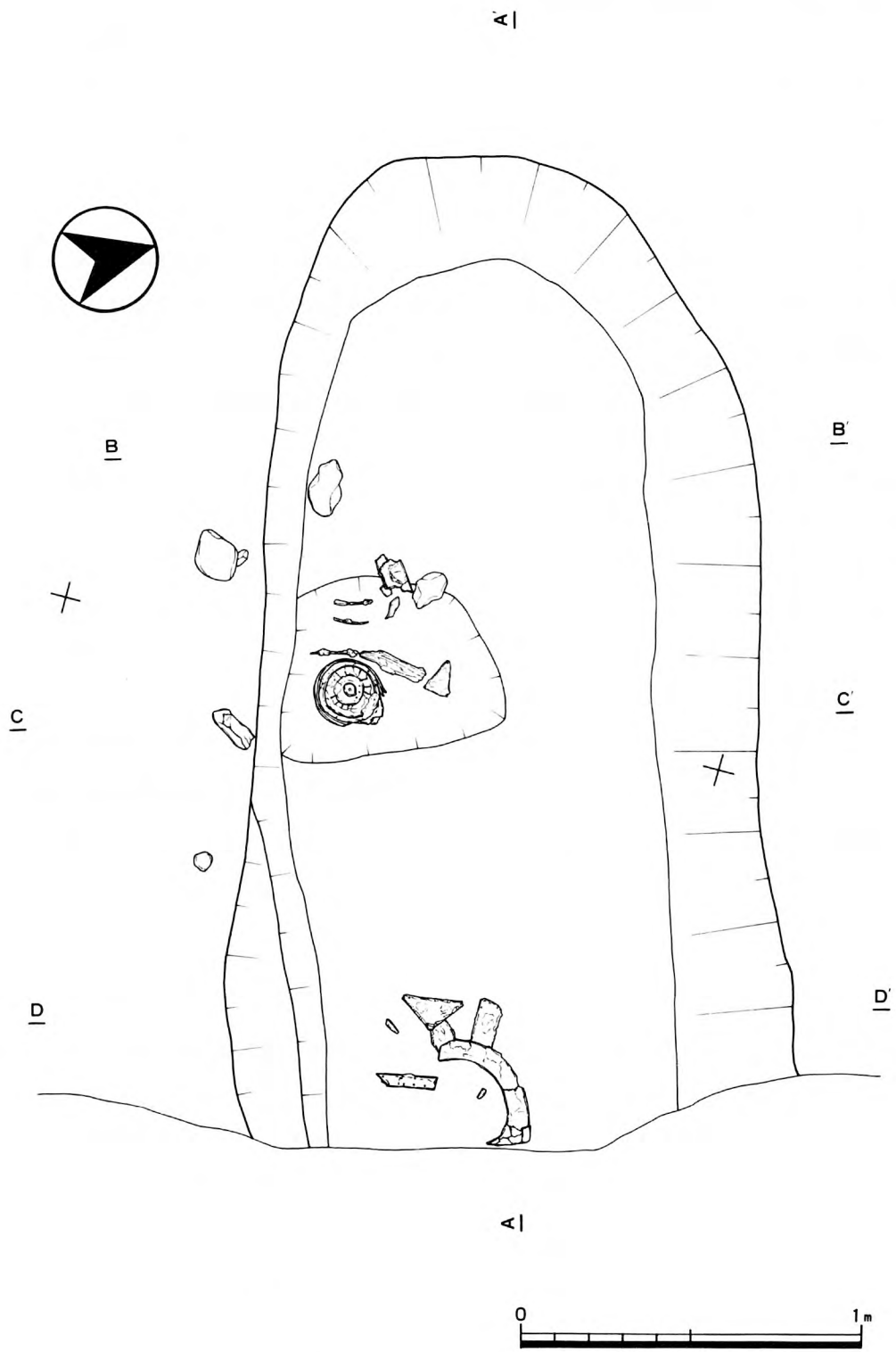
主体部は第7図D-D'ラインの断ち割りで判明したところによると、他の墳丘盛土と同じ状態はこの部分では確認されず、盛土を北側で止め、南側より半分位まで土をかき入れ、北側は淡黄褐色粘土を入れて固め、これを主体部の底面としている。しかし、このことはB-B'、C-C'ラインでは確認できなかった。後者の方は、盛土を行った後に掘り窪めている。このD-D'ラインはトレンチで確認された墳丘のほぼ中心である。

2. 第二主体部（第8～10図）

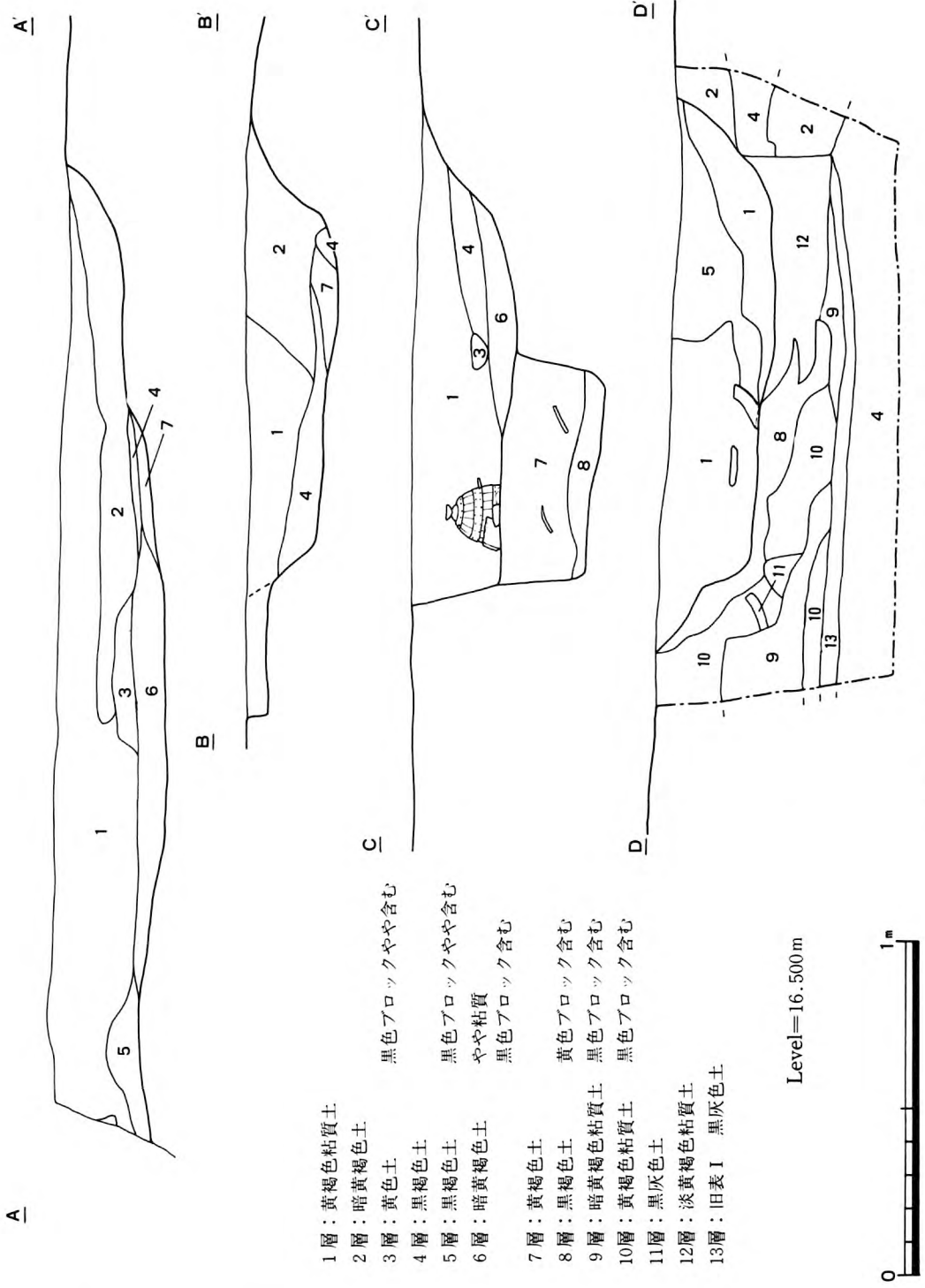
本主体部は、第一主体部の北側に検出された。いわゆる礫敷の箱形粘土槨と呼称される部類のものであった。掘り形は上端で幅約380cm、長さ約570cm、下端で幅約350cm、長さ約530cmの大きさで略方形を呈し、深さは約70cmを計った。このプランは、耕作土のすぐ下で検出された。掘り形埋土は灰褐色土を主体としていた。底面は旧表を掘り込んでいたが、地山面までは達していなかった。

粘土槨は、この掘り形の中心よりやや北東寄りに構築されていた。主軸は東西よりやや北に振る（東北東-西南西）。

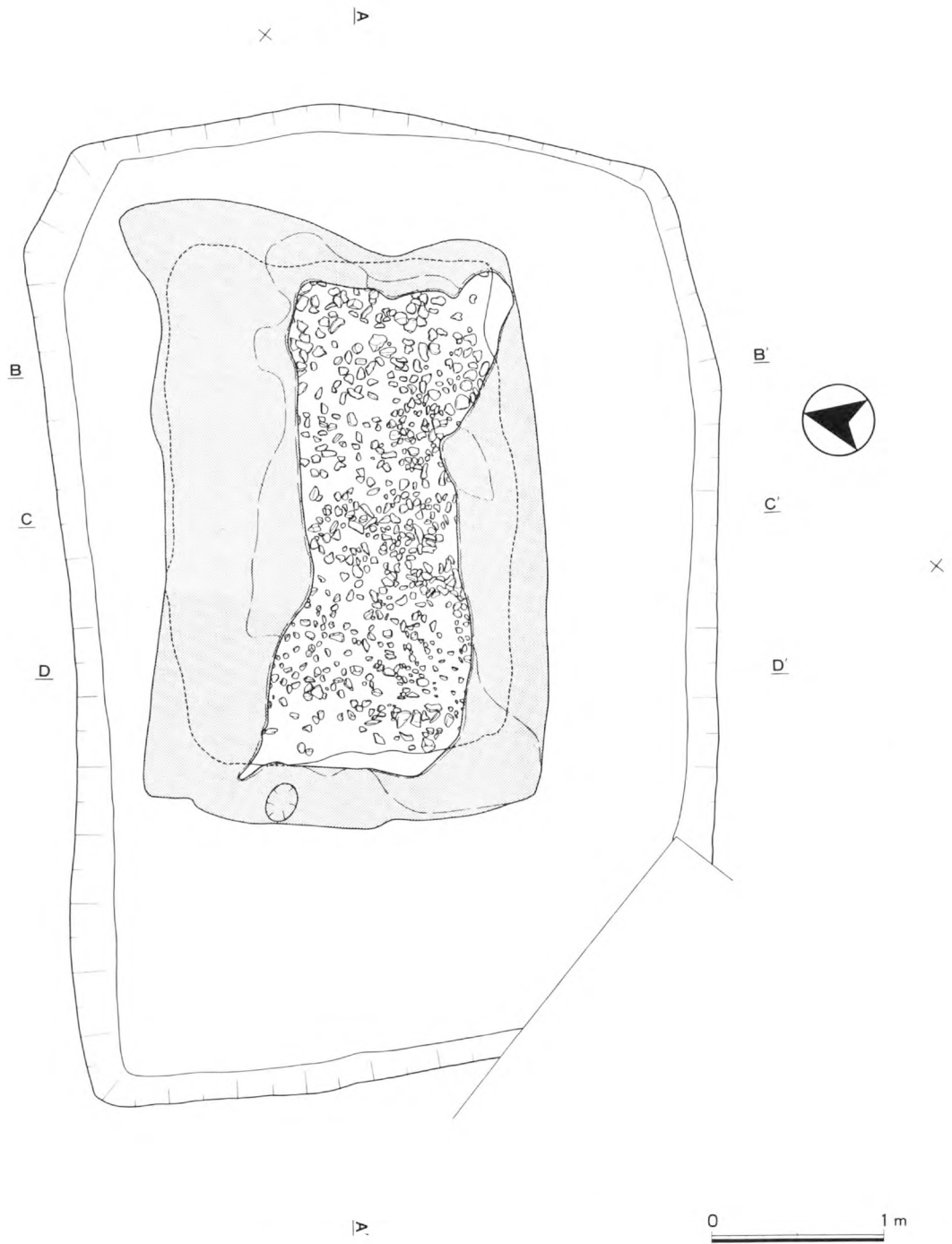
粘土壁は、第10図の断面図でみるように東壁・西壁（A-A'）は掘り形底面より立ち上がっているが、北壁と中央部を除く南壁は掘り形底面にくいこむかたちで検出されている。つまり、



第6図 第一主体部平面図 (S = 1/20)



第7図 第一主体部土層断面図 (S=1/20)

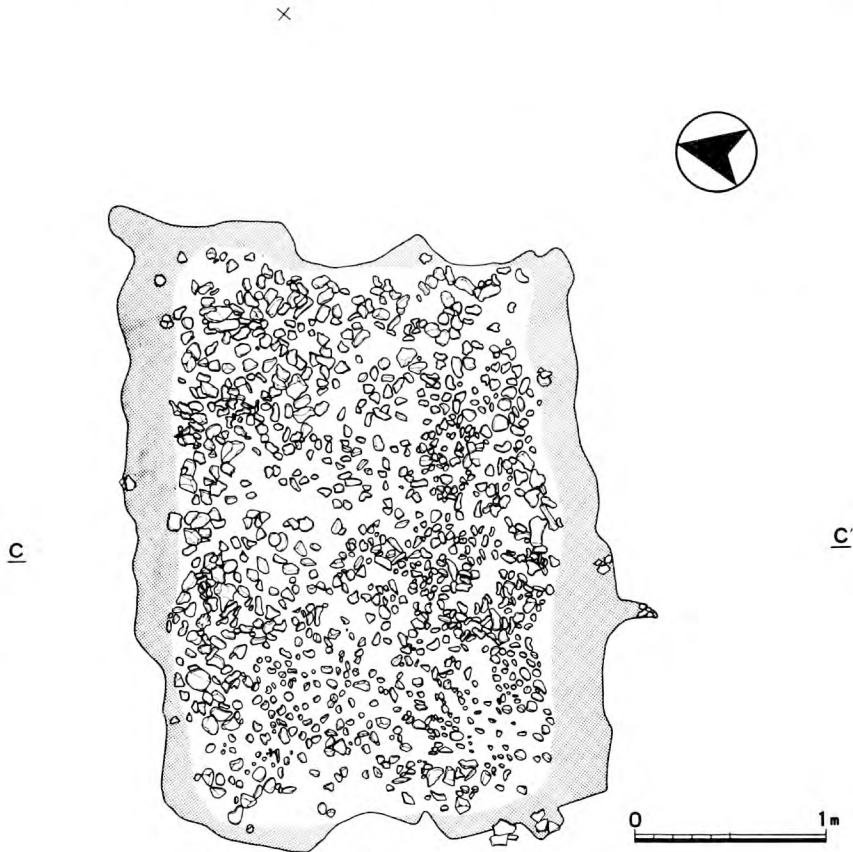


第8図 第二主体部平面図 (S = 1/40)

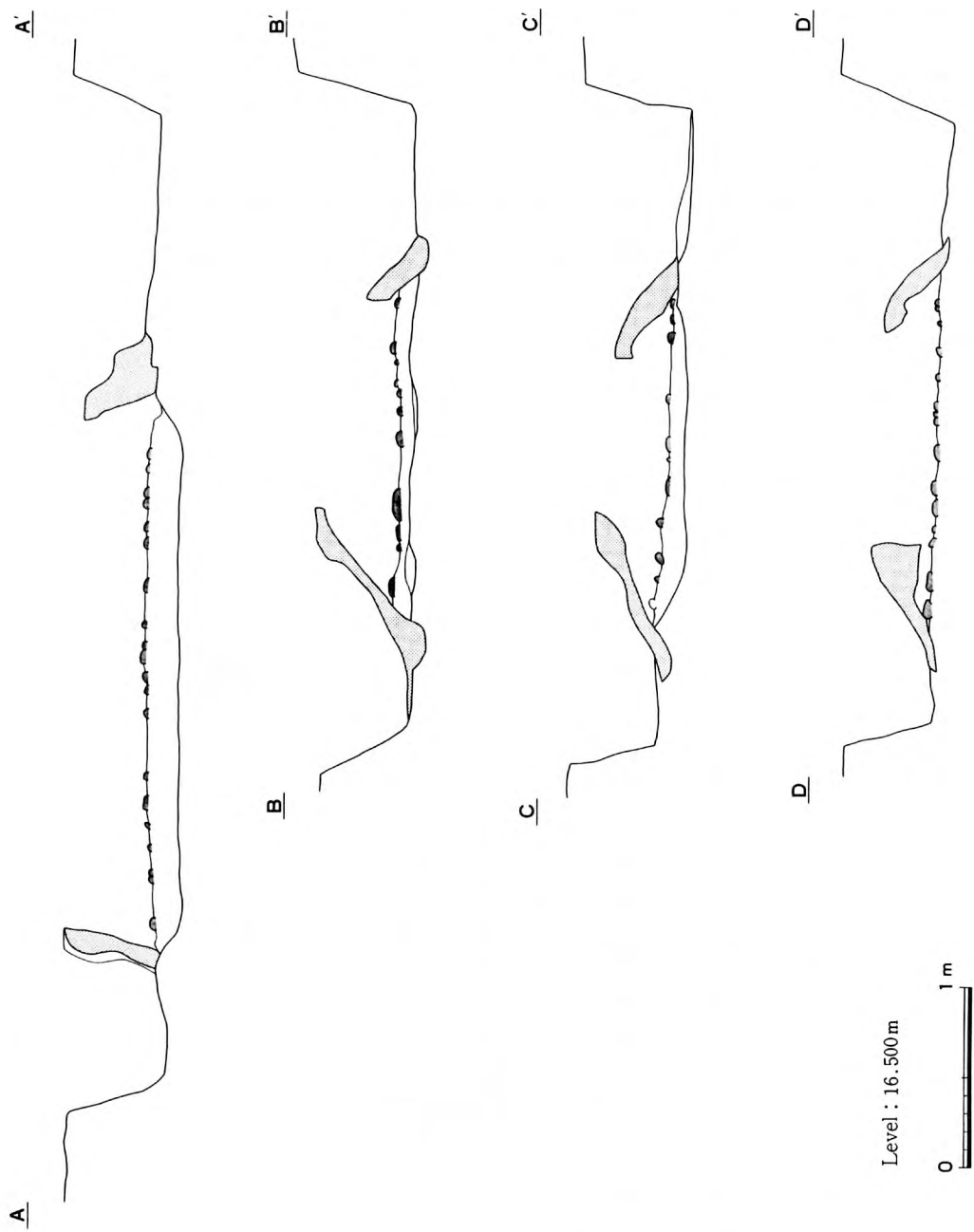
掘り形底面を掘り込んだり粘土を差し込むかたちをとっている。粘土柳内の底面はやや掘り窪めていて、粘土ブロックが混じる褐色土を詰め、礫床との間層としている。しかし、D-D'ラインでは確認できず、検討余地が残っている。礫床のレベルは柳外の掘り形底面とほぼ同じである。

粘土壁は、南壁で約40度の傾斜を持っている。北壁は東側（断面図のB）で約40度であるが、その他では約30度となっている。中心部に向けてやや下方に下がることが断面図で認められ、土圧による変形と考えられた。比較的残りのよい北壁の東側で判断すれば、約40度の傾斜で直線的に中心まで延びていた場合（合掌形態）は礫床から約70～80cmの高さであったと考えられた。東西の壁はほぼ直立していた。しかし、壁の残りがよくないので不明確である。基底部粘土は、北壁及び南壁に比べ幅が狭く、東壁の南半及び西壁の中央部付近は基底部粘土が確認されなかった。尚、平面図では、残りがよくないが壁が立ち上がっている範囲を網かけて図示してある。また、西壁の北寄り部分に丸太状の柱穴が1個検出されている。

礫床は、粘土柳の内法全面の東西2.9m、南北1.9mの範囲で検出された。しかし、西辺の中央部付近では疎になったり、基底部粘土と同様確認されなかった部分があった。使用礫は、詳細な検討を行わなかったのやや正確さにかけるが、扁平な小礫を主体としている。しかし、北辺及び東辺部より1/3位の範囲は、大きめで丸みもち、ややふぞろいの礫が検出されている。



第9図 第二主体部礫床平面図（ $S = \frac{1}{40}$ ）



第10図 第二主体部断面図 ($S = \frac{1}{40}$)

第4節 出土遺物

出土遺物のうち土器は、墳丘トレンチの盛土及び第二主体部の粘土壁・槨内より土師器片が若干出土している。鉄器は、第一主体部より眉庇付冑、短甲の部品、鉄鏃が出土している。また、この主体部の土と考えられる排土より、銅製四獣鏡、鉄剣、鉄鏃、鉄製刀子やその他鉄器片、メノウ製勾玉等が出土している。これらは、前述のように金沢大学考古学研究会が採集し、本墳発見の契機になったもの及びフルイがけによって検出されたものである。厳密に言えば、第一主体部に伴うものであるかどうかは不明であるが、主体部の遺物との比較やその他の状況等により、この第一主体部に伴う遺物であると考えられた。

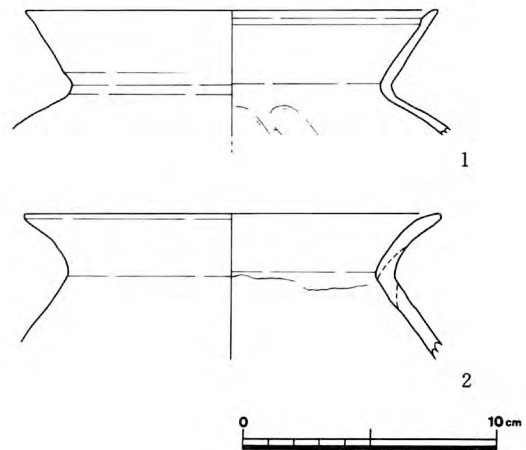
1. 土器（第11図1・2）

出土した土器はいずれも土師器で、総数でも十数点しか出土していない。その内、形態が判明した2点を図示した。

1は、4Tの盛土より出土したものである。約1/5の大きさしかなく、復元した口径は16.2cmを測る球胴タイプの甕形土器である。磨耗が激しいが内面の肩部に指頭圧痕がみられ、頸部内外ともナデ調整が施されている。また、頸部外面にススと思われるものが付着している。

2は、第二主体部内より出土したものである。この土器も小さくて約1/8の大きさで、復元した口径は16.4cmを測る長胴タイプの甕形土器である。磨耗が激しく、調整等は不明である。口縁部は頸部で強くくびれ、外反している。胎土には0.5～4mmの砂粒が多く含まれていて、色調は橙灰褐色を呈している。

さて、この土器の時期について考えてみると、1は口唇部を内側にやや肥厚させていて、いわゆる「布留系」土器の範疇にはいるものと考えられ、漆町遺跡の第10群土器の中に含まれる時期であろう⁽¹⁾。2は口縁部がはっきりと外へのびているので、同じく漆町遺跡の第15群土器よりやや後出するものと考えたい⁽²⁾。



第11図 出土土器実測図（ $S = \frac{1}{3}$ ）

2. 鉄器

① 眉庇付冑（第12図）

この冑は、前述のように第一主体部の残存部のほぼ中央南壁付近より出土した。庇を大部分欠失する以外は、鉢・伏鉢・管・受鉢など遺存状態がよい。また、鋳は2枚（段）認められる。地板第一段と第二段を一枚の板で通した堅矧細板鉸留式である。鋳を除いて総高18.1cmを測り、鉢の左右径19.1cm、前後径20.5cmである。

地板は、18枚の細板からなっていて、その大きさは前面中央（正面）の細板で上辺2.0cm、下辺5.2cm、長さ14.0cm、後面中央の細板で上辺1.8cm、下辺5.2cm、長さ13.3cmを測る長大なものである。この地板は、まず後正面の細板を置き、それに一部重ね合わせて細板を左右に置き、順に上へ重ねていき（左右8枚ずつ）、最後に正面の細板を重ねている。

伏板は、直径約10.1～10.2cmを測る略円形である。伏板と地板は鉸留されている。この鉸は、地板の重なった部分に見られ、もともと18個あったと思われるが現在11個が残っている。

胴巻板は、幅2.5～2.7cm、長さ57.6cmを測る。これも地板とは鉸留されている。この鉸は、伏板の場合と同じく、原則的には地板の重なった部分に上下2段に見られる。しかし、ややずれて留められている部分も見られる。また、地板のほぼ中央にも認められる部分もあり、しかもこの場合、上に1段しか認められない部分もある。

腰巻板は、幅3.0～3.2cm、長さ64.1cmを測る。腰巻板の下端は、地板より1.3～1.6cm下がっている。地板とは鉸留されているが、鋳が融着していたり、錆等のため詳細は不明である。この腰巻板の左側やや後よりに、鋳を垂れ下げたためと考えられる2個の孔（径2.2mm、2.3mm）が穿たれている。他の側面及び後面には鋳が融着しているため不明である。

眉庇は、一部（左側つけね部分）しか残存していなかった。この部分では先端が鋸歯状となっている。また、透かしが認められないが一部のみであるので、断定は避けたい。復元では、無文で先端を鋸歯状としている。また、鉢への取り付けは、庇の根元を折り曲げ、腰巻板にやはり鉸留している。

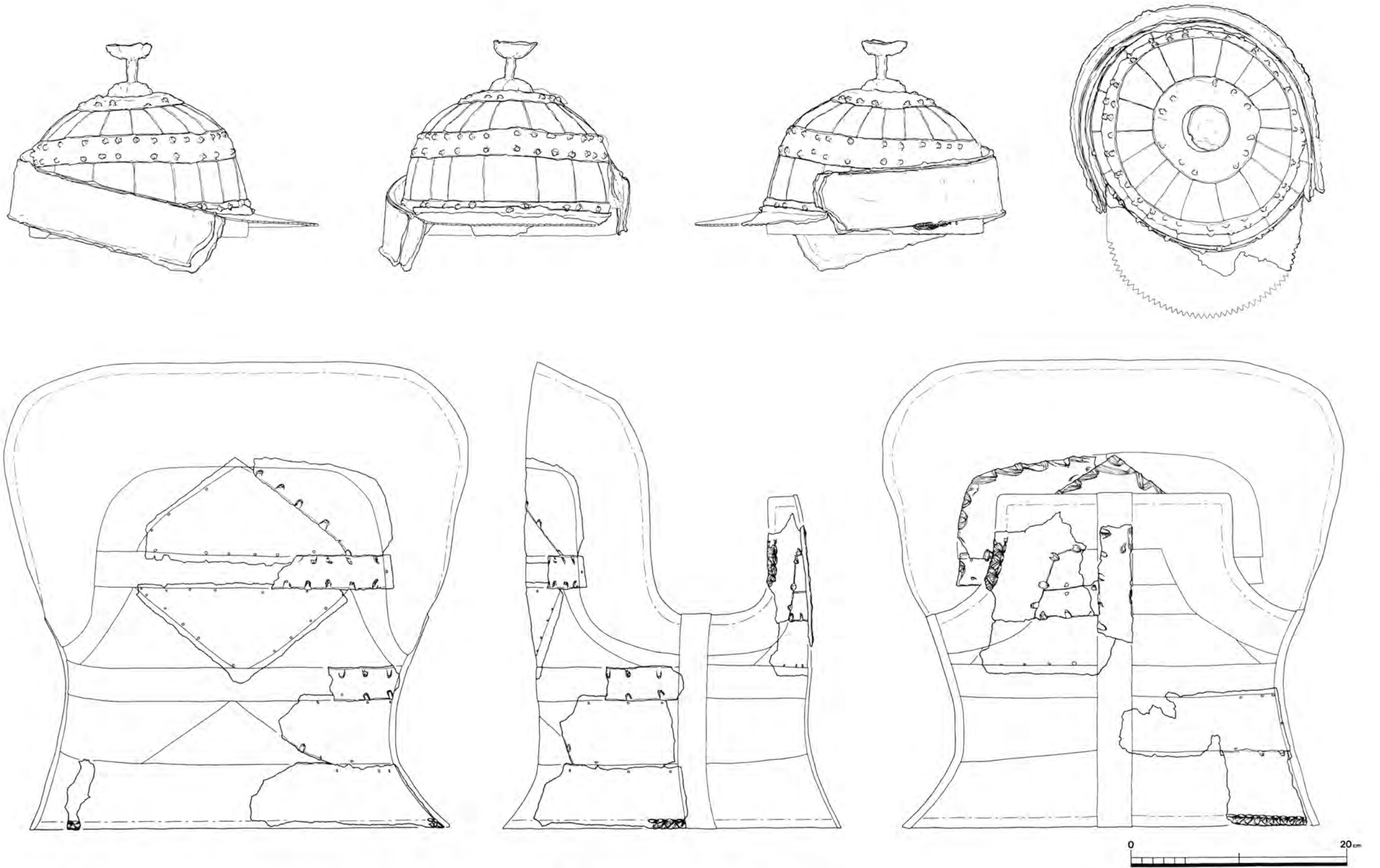
伏鉢は、径約4.3cm、高さ1.45cmを測り、半球状を呈している。

受鉢は、径4.1cm、高さ1.45cmを測り、やはり半球状を呈している。

管は、径約0.9cm、長さ（伏鉢、受鉢間）1.9cmを測る。

なお、受鉢は、出土時点では管が付きぬけ、伏鉢の上に乗った状態であった。また、この時点で、管は径約1.5mm～2.0mmの中空であったことが判明した。

鋳は、腰巻板からはずれた状態で2枚が鉢に融着していた。外側の鋳は、幅5.3cmを測り、長さは、上辺で46.5cm、最大で47.1cm、下辺で45.8cmを測る。両端は、上端より一度ふくらみそれから斜めにカーブを描くように切っている。また、両端及び下辺を外側に曲げている。内側の鋳は、幅5.9cm、長さは上辺で49.8cm、下辺で45.5cmを測る。両端は、ゆるやかなカーブを描くように切っている。更に、上辺及び両端を外側に曲げている。この2枚の鋳は、内側のものと外側



第12図 眉庇付冑・復元短甲実測図 (S=1/4)

ものの曲げていない辺（内側の下辺と外側の上辺）を合わせてつないでいたと考えられ、内側が第一段、外側が第二段となる。また、つないだ場合の端は、全て外側に曲がっていることとなり、鍛はもともと2段しかなかったと考えられる。

なお、この鍛と腰巻板の下部に縦櫛の結縛部一個体が付着していて、これをはがせば壊れてしまうおそれがあり、鍛ごと保存処理を行い固定したため、鍛はややいびつになっている。

② 短甲（第12～15図）

前述のように主に第一主体部内よりバラバラになって出土した。第13・14図は部品の実測図であり、第12図はそれをもとに（財）元興寺文化財研究所において復元した短甲の実測図である。第15図は復元短甲の実測図に、第13・14図の残存部品をあてはめた模式図である。以下、復元されたものを中心に記述してゆきたい。

復元された短甲の大きさは、高さは前胴31.0cm、後胴43.5cm、肩幅43.0cm、胴部最小幅30.5cmを測り、裾板幅は39.0cmである。

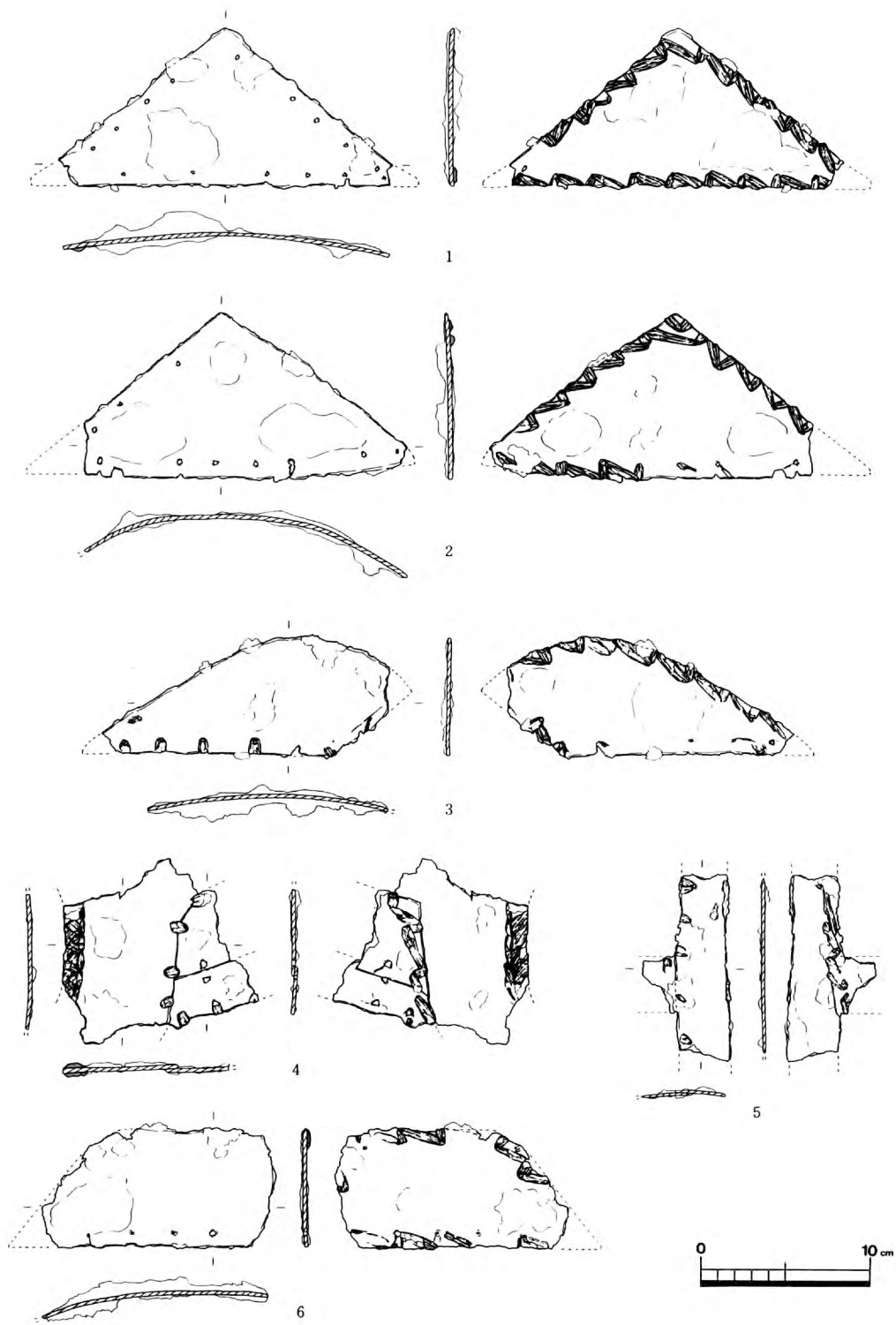
この短甲は、出土した部品の形状及び綴じ方より三角板革綴式短甲である。前胴・後胴ともに豎上3段・長側4段の7段構成、また、後胴及び左右の前胴に分かれる三枚胴式と考えられて復元された。使用板の数は、前胴は豎上3段・長側4段とも1枚ずつと引合板1・脇縦板1、後胴は押付板1・豎上第二段3・第三段1、長側第一段5・第二段1・第三段3・裾板1・脇縦板2の合計35枚（9+9+17）の鉄板からなっていたと推定される。内訳は、前胴は豎上第一段2・裾板2・地板6・帯金4・引合板2・脇縦板2で、後胴は押付板1・裾板1・地板11・帯金2・脇縦板2と考えられる。以下は、部品をもとに気づいた点を記述してゆきたい。

明確に三角板と判るものは1と2であり、いずれも後胴のものである。前者は長側第一段で、後者は豎上第二段の中央地板である。いずれも角や辺がシャープにカットされ、整った二等辺三角形形状を呈し、大きさは底辺約19～20cm、幅（高さ）は9.5と9.8cmを測る。他の2辺は約14cmの長さである。いずれも端をやや欠失する。

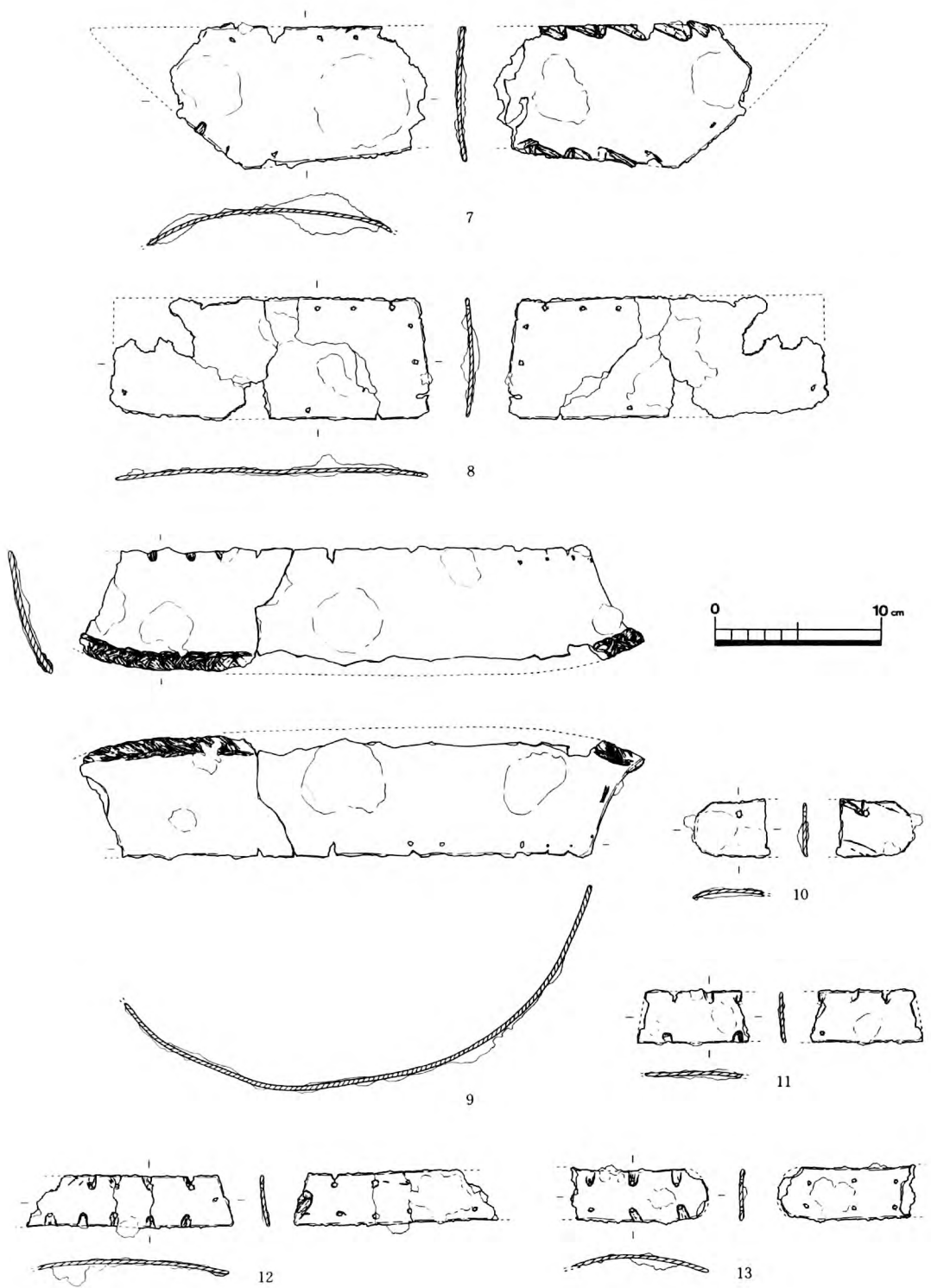
3は、2と接合するもので、この部分はシャープになっていて、先を一部欠失する。カーブする辺は押付板と接している部分であろう。また、12の帯金と接合する。2と接合する辺の長さは復元すれば15cmであり、12との辺のそれは5.7cmである。

4は、残存部品の中で唯一接合状況の判明するものである。前胴の豎上部分のもので、第一段と第二段・第三段の一部である。また、第一段に革組の覆輪が認められ、脇から中央に向けて施されている。覆輪の幅は0.5～0.8cmで、孔の心々は約1cmである。また、革綴は第一段と第二段の場合は、中央（上）から脇（下）に向けて綴じられている。その方法は、通有の綴じかたを行っていて、表面では紐が二重になっている。このことは他の部品でも同じである。また、綴じる孔の径は約0.3cmで、心々間約2.0cmである。板の重なりは約0.6～1.0cmである。他の部品の綴じる孔の心々間は2.0～2.4cmである。

9は、裾板であり、革組の覆輪が認められる。この覆輪の幅は約1.2cmであり、脇から中央に



第13図 短甲部品実測図(1) (S = 1/4)



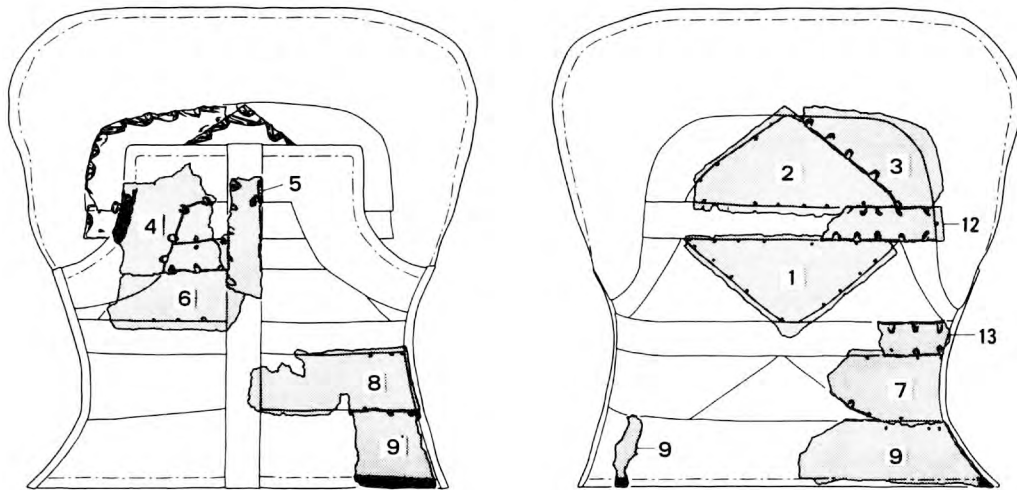
第14図 短甲部品実測図(2) (S = 1/4)

向かって施されている。この裾板の幅は約7.8cmを測る。なお、この裾板は出土時点ではつながっていたが、復元は分かれてされている。

5は、引合板であり、右前胴の豎上第三段の帯金が一部接合している。幅は約3cm、長さ残存約11cmを測る。

12・13はいずれも後胴の帯金である。12は、豎上第三段で端を斜めにカットしており、この部分を押付板と重ねる。13は、長側第二段で端は半円形にカットしている。

10と11は復元はされなかったが、帯金あるいは引合板等の一部であると考えられる。10は、13と同じく端を半円形にカットしている。



第15図 短甲模式図

③ 鉄剣（第16図1～4）

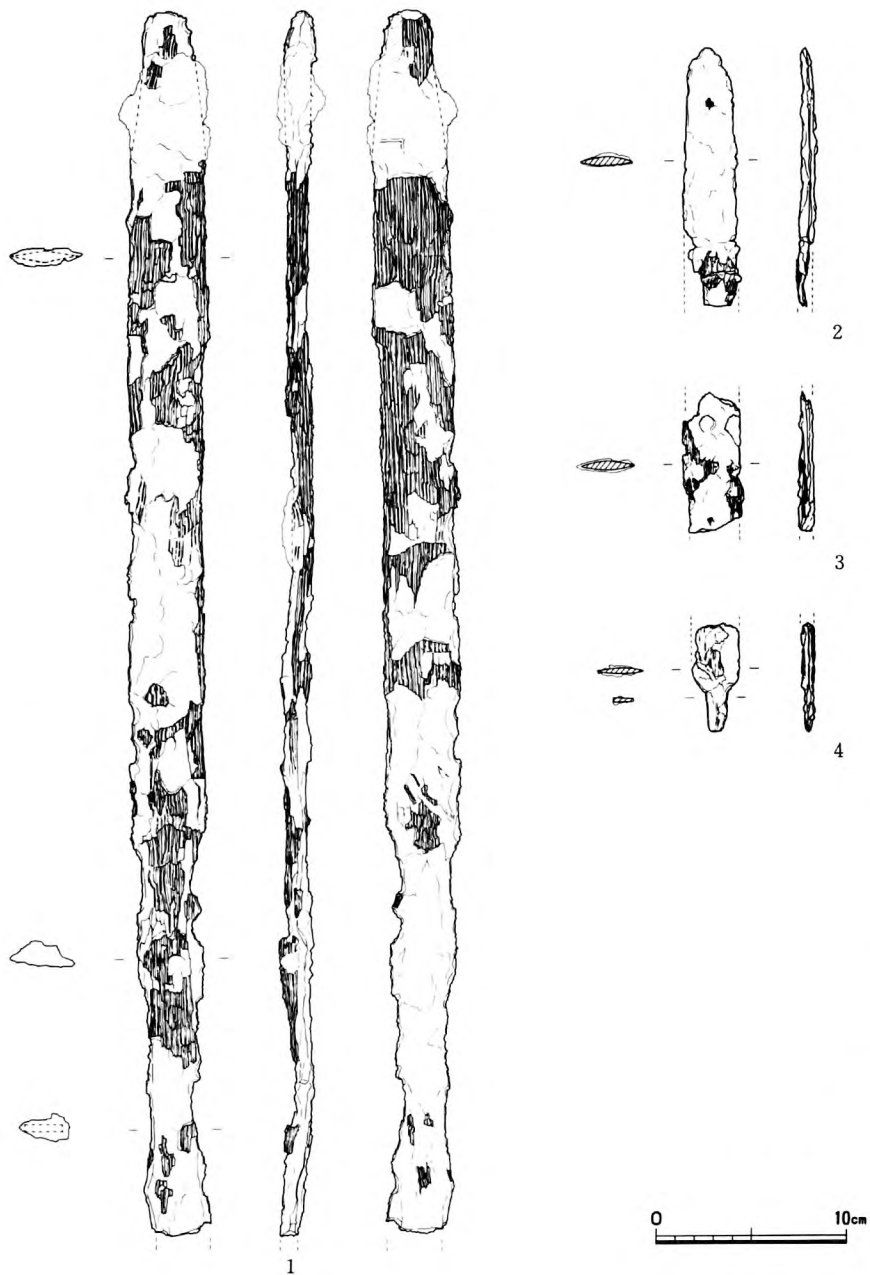
1は、現存長64.6cmを測る。全体に木質が付着していることから、鞘や把を装着していたことをうかがえる。しかし、そのため全体の形状は不明である。剣先から剣身は残存していて、茎は一部欠失していると考えられるが、その境は不明である。また、剣身の断面を菱形、茎の断面を長方形と考えるが断定は避けたい。

2～4は、同一個体と考えられる破片である。

2は、剣先の部分であり、残存長13.57cm、剣先より6.0cmの位置で剣身の幅2.64cm、剣身の厚さ0.50cmを測る。

3は、長さ7.12cm、剣身の幅2.75cm、剣身の厚さ0.45cmを測る。

4は、剣身の一部から関、茎の部分である。残存長5.67cmを測り、剣身の長さ2.8cm、剣身の幅2.41cm、剣身の厚さ0.38cmを測る。関は両関であり、ゆるやかに茎に至る。茎の長さ2.1cmで



第16図 鉄剣実測図 (S = ¼)

あり、関近くで幅1.09cm、厚さは両端で若干違い0.25cmと0.21cmを測る。茎の先端はやや丸く、目釘孔はもたない。剣身の断面形はレンズ状を呈し、茎の断面形は長方形を呈する。

三片とも木質が付着しているので、鞘や把を装着していたことがうかがえる。剣身の幅、茎の長さや幅等より、この剣は小振りであると考えられる。

④ 鉄鏃（第17・18図1～14）

1～9は、第一主体部の床面より出土したものであり、10～14はフルイがけにより検出したものである。

1～6は出土時点から融着していた。1の他は完形であるが、全体に錆等がひどく、細部は不確定なものが多い。全て長頸鏃である。

1は、頸の下半と茎を欠失していて、残存長11.19cmを測る。鏃身の両側に刃をもつもの（両刃と呼称）である。鏃身の断面形は片側が丸く、片側が平ら（片丸と呼称）である。関はなく鏃身からなだらかに頸部に至る。頸部の断面形は長方形を呈する。

2は、茎の先端がわずかに欠失していて、残存長18.61cmを測る。鏃身の片側に刃をもつもの（片刃と呼称）であるが、錆等のため細部は判らない。鏃身の断面形は、二等辺三角形を呈するものと考えられるが、検討の余地はある。頸部の断面形は長方形を呈する。茎には樹皮と思われるものが付着している。茎の先端部の欠失している部分の断面形は略正方形を呈している。

3は、全長18.3cmを測るが、錆等がひどく細部は判らない。鏃身の先端部の形状より片刃と考える。また、鏃身の断面形は二等辺三角形、頸部のそれは長方形、茎は長方形或は略正方形を呈するものと考えられる。

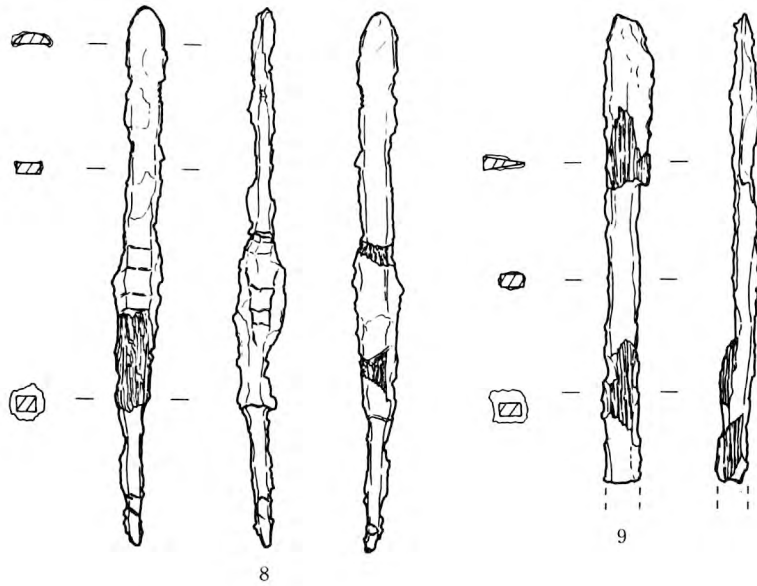
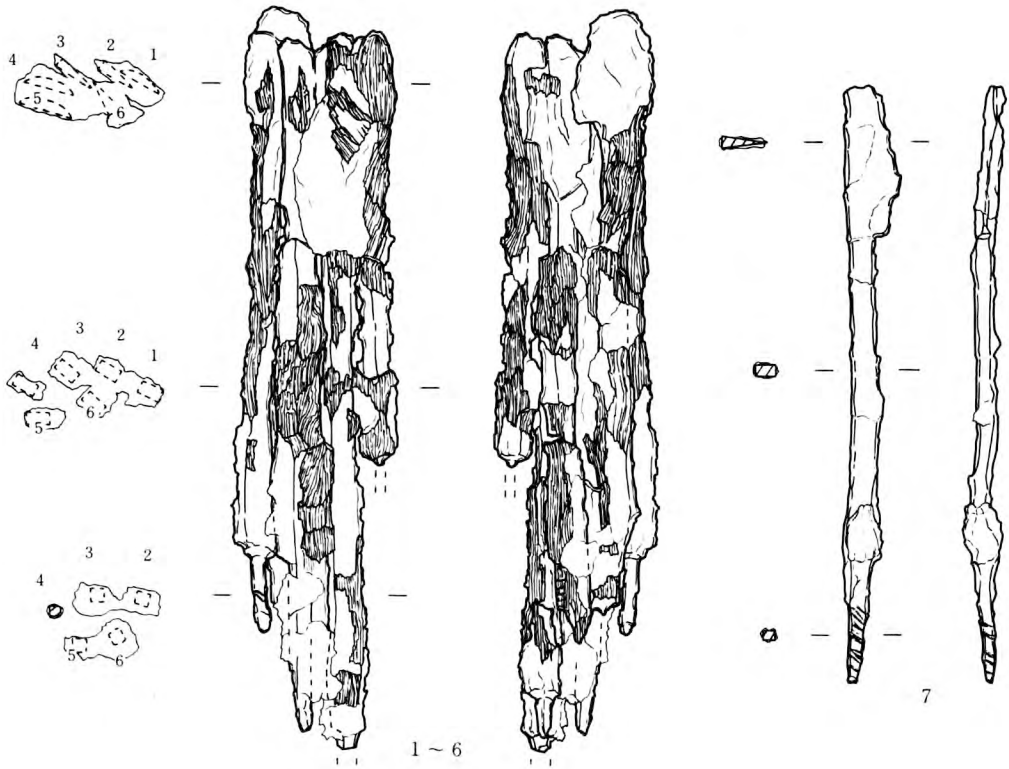
4は、全長15.9cmを測るが、これも同じく錆等のため細部は判らない。鏃身は両刃で、断面形は片丸と考えられ、頸部、茎の断面形は3と同じと考える。

5は、茎の一部を欠失していて、残存長15.98cmを測る。鏃身は両刃で、断面形は片丸である。頸部の断面形は長方形である。

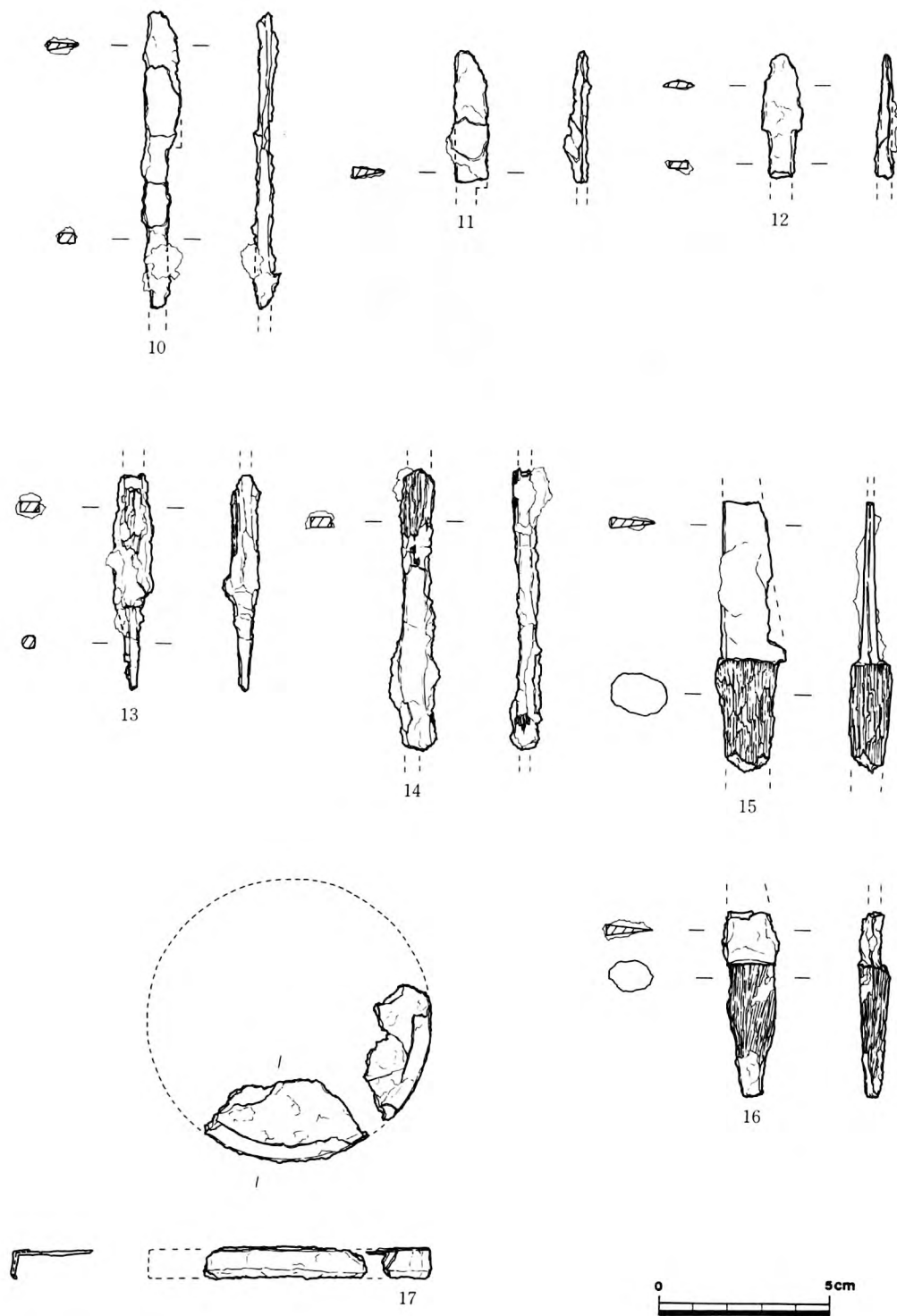
6は、全長18.72cmを測るが、やはり錆等のため細部は不明である。鏃身は片刃で、断面形は二等辺三角形と考えられる。頸部及び茎の断面形は他と同じである。

7は、切先の一部を欠失していて、錆が認められるが遺存状態は良好である。残存長15.77cmを測り、鏃身は片刃で、断面形は二等辺三角形を呈する。関は刃の側のみで、直角にもつものである。頸の幅0.62cm、厚さ0.33cmを測り、断面形は長方形である。頸と茎の境は錆のため不明である。茎の部分には、繊維状のものを巻いた痕跡が認められる。茎の断面形は長方形を呈している。

8は、完形であるが、ほぼ中央部の錆がひどい。全長14.25cmを測り、鏃身の長さ2.12cm、幅は0.95cmを測る。両刃で、断面形は片丸である。関は片側のみ3段の鋸歯状と確認できたが、両関と考えられる。頸の幅0.81cm、厚さ0.32cmを測り、断面形は長方形である。茎は長さ3.58cmを測り、断面形はやや長方形である。この部分には繊維状のものを巻いた痕跡が一部見られる。ま



第17図 鉄器実測図(1) (S = 1/2)



第18図 鉄器実測図(2) (S = 1/2)

た、茎端より約8cmの位置より茎との境までの頸の部分に樹皮状のものが見られ、その上に糸状のものを巻いた痕跡が認められる。

9は、頸の下半から茎にかけてを欠失する。残存長12.33cmを測る。鍔身の長さ4.37cm、幅は1.19cmを測る。7と同じく、片刃で、断面形は二等辺三角形を呈し、関は刃の側のみで、直角にもつものである。頸の幅0.71cm、厚さ0.33cmを測り、断面形は長方形である。

10は、やはり頸の下半から茎にかけてを欠失する。残存長8.70cmを測る。鍔身の長さ3.84cm、幅は0.91cmを測る。片刃で、断面形は二等辺三角形を呈している。関は判らないが、同じく刃の側にあり、直角にもつていたと考えられる。頸の幅0.59cm、厚さ0.34cmを測り、断面形は長方形である。

11は、鍔身の部分で残存長3.82cmを測る。幅は0.93cm、片刃で、断面形は二等辺三角形。

12は、鍔身と頸の一部のみである。残存長2.62cmをはかる。鍔身の長さ2.13cm、中央部での幅は1.01cmを測る。両刃で、断面形は片丸であり、ほぼ直角にもつている。

⑤ 刀子（第18図15・16）

刀子は、2点出土している。15は、刃部の半分位と茎の約1/3が欠失している。現存長7.87cmを測り、そのうち刃部は4.65cmである。茎との境より4.0cmの所で幅1.28cm、厚さ0.3cmを測る。さらに、その茎との境部分が最も幅が広く1.78cmを測る。茎には木質が付着しており、長さ3.22cmを測り、刃部との境付近で残存木質の幅1.77cm、厚さ1.14cmである。16は、刃部の大部分が欠失しているが、茎はほとんど残っていて、現存長5.39cmを測る。刃部は、1.58cmの長さが残っていて、茎との境より1.0cmの部分で幅1.41cm、厚さ0.3cmを測る。茎にはやはり木質が付着しており、長さ3.81cmを測る。刃部との境付近で残存木質の幅1.51cm、厚さ0.87cmである。両者とも欠失部分が多いが、もとはほぼ同じ大きさの刀子であったと思われる。

⑥ 蓋状鉄製品（第18図17）

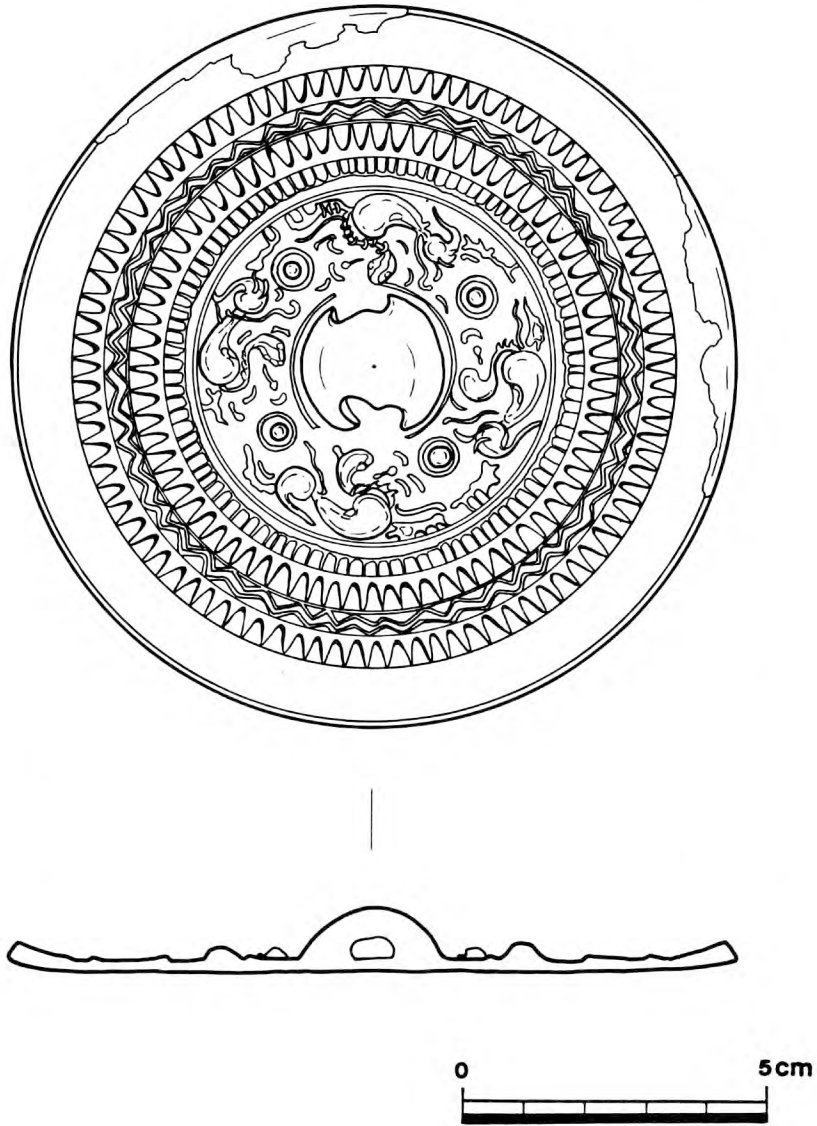
本遺物は、大半が欠失しているが、同一個体と思われる2片が出土している。復元径約8.4cmを測る。鍔がありよく判らないが、厚さ約0.8mmの鉄板で天井を作り、それを下に折り曲げ、それを外側に折り返して二重の口縁部を作る。さらに、それを天井側に5.3mm折りかえしている口縁部の幅は8.0mmを測る。口縁端部はやや内側に曲げている。その形状から蓋状鉄製品としたが用途は不明である。

3. その他

① 四獣鏡（第19図）

この鏡は、銅製であり獣形鏡（倣製鏡）に含まれるものである。鏡面、背面とも縁部分がやや腐食しているが、暗緑色を呈した比較的良好な遺存状態である。直径12.02cm、縁の厚さ3.7mmを測り、縁部分がやや背面に反っている。重さは147.29gを測る。以下、背面の文様を略述する。

中心に鈕があり、径23.3mm、高さは鏡面より10.2mmを測る。円座鈕で片寄って孔が穿たれてい



第19図 四獣鏡実測図 (S = $\frac{4}{5}$)

る。この円座は径26.7mmで低く、また、孔の部分には円座がない。

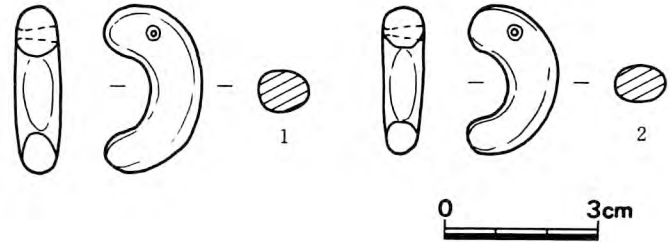
内区には四個の乳があるが、これらも円座をもっていて、径6mmであった。また、これら四個の乳の配置は、対称ではなくややゆがんが位置関係にある。その間に同一と思われるが、簡便化してしまって形をうかがわせない獣が半肉彫りで配されている。また、乳や獣の間に細線文様が施されている。幅は16.7mmである。内区外周に低く不鮮明な部分もあるが圈線と思われる細線がめぐっている。また、この外に2.8mmの間をおいて幅3.8mmの櫛歯文帯がみられる。

外区には鋸歯文帯が二重にあり、間に複線波文帯が凹帯として配されている。内側の鋸歯文帯と複線波文帯の間には一条の細線がめぐっている。内側の鋸歯文帯は、内区や楯歯文帯より一段盛り上がって施されている。幅は、内側の鋸歯文帯が4.9mm、複線波文帯が5.0mm、外側の鋸歯文帯が4.5mmであり、縁は10.1mmである。

背面の文様部分全体に薄く赤色が認められるが、それが何によるものかは不明である。

② 勾玉（第20図）

この2個の勾玉は、材質は共に瑪瑙製であり、側面形がC字形をなす。1は、長さ32.7mm、幅は中央部で10.4mm、厚みは最大で8.5mmである。片面穿孔で開孔口径2.8mm、終孔口径1.3mm

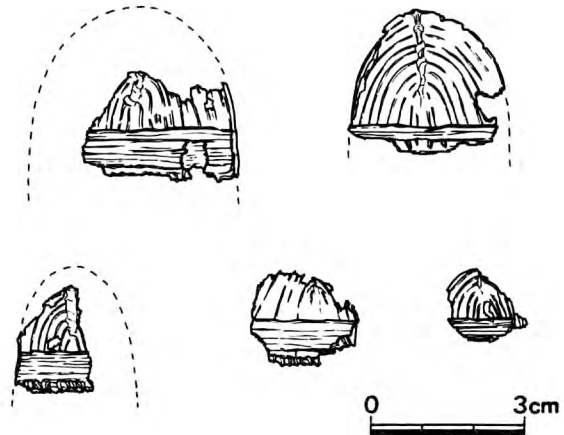


第20図 勾玉実測図（ $S = \frac{2}{3}$ ）

である。なお、終孔口部分には径3.5mm、深さ1.1mmの剥離痕が認められる。色調は、不透明の乳白色を呈し、下方に小さく赤褐色の斑紋（材質中の）が認められる。また、よく研磨されている。重さは6.76gである。2はやや小さく、長さ29.1mm、幅は中央部で9.5mm、厚みは最大で7.1mmを測る。同じく片面穿孔で開孔口径2.5mm、終孔口径1.2mmである。色調は、1より赤みがかっている乳白色を呈している。これにも、背部の中央上方に赤褐色の斑紋がやや大きく認められ、この部分の材質に不純物が混入していて、ここから亀裂がはいっている。これもよく研磨されている。重さは4.99gである。

③ 縦櫛（第21図）

これらの縦櫛は、眉庇付冑の周辺より検出された。いずれも歯部を欠いていて、結縛部だけの破片である。材質は、竹製であり、串状のものを重ね合わせ縛っていて、漆を塗ってかためている。なお、図示したもの他に前述のように、眉庇付冑の鋸部分に結縛部1個が付着している。



第21図 縦櫛実測図（ $S = \frac{2}{3}$ ）

第5節 小 結

前節までで埴田後山無常堂古墳について述べてきたが、ここではその整理と若干の考察を行ってまとめとしたい。

(1) 古墳について

本墳は、径約23.5mの周溝を持たない円墳であった。主体部は、木棺直葬の第一主体部と粘土槨の第二主体部が検出された。この第一主体部は本墳の中心に位置しているので、古墳築造当初の主体部と考えられ、第二主体部は追葬あるいはマウンドを後に利用したのものであると考えられる。しかし、この第二主体部は副葬品が検出されなかったことより、埋葬されなかった可能性も残されている。

前述のように、本墳の中心に位置している第一主体部は、その断ち割りで判明したことより、古墳構築の段階で、主体部の位置を計画あるいは決定して築造したと考えられた。

本古墳の時期は、第一主体部の出土品より考えれば、古墳時代中期（5世紀中頃）に築造されたと考えられる。また、第二主体部は、若干の土器片が出土しているのみであるが、それによって古墳時代後期（6世紀前半代）に造られたものと考えられる。

第一主体部と第二主体部の造られた時期に約1世紀弱の間を想定しているが、第二主体部は大きな掘り形を有しているにもかかわらず、第一主体部とは重なっていないので、造る段階ではそこが古墳の中心で、前代の埋葬施設があるという認識があったのではなかろうか。

(2) 眉庇付冑と短甲について

眉庇付冑は、甲冑の革綴手法が鉾留手法に変わると共に、新しい様式の冑として出現したものである。その出現時期は5世紀の前半代であり、その消滅は5世紀末頃とされている⁽³⁾。

無常堂古墳出土（以下「本例」と呼称）の眉庇付冑は、堅矧細板鉾留式であり、比較的出土例の少ない形式である。この形式は、眉庇付冑の出現後しばらくみられるだけで、出土例の大半は小札鉾留式によって占められる。前者より後者が、冑の鉢を製作し易いことでそうなったもの（簡略化）と考えられている。この小札鉾留式の後に、最も簡略化された形式の横矧板鉾留式が出てくるが、この出土例は少ない。

さて、本例の眉庇付冑の鉾留状況は、前述のように原則的には地板を重ねた部分に上下2段の鉾で胴巻板と留められている。地板第一段と第二段にそれぞれ小札を使った小札鉾留式の場合、腰巻板との接合の鉾は2段になるが、堅矧細板は地板第一段と第二段を通した一枚のものであるので、胴巻板との鉾留は横一列（1段）でも良いはずである。滋賀県新開1号墳より堅矧細板鉾留式と小札鉾留式の眉庇付冑が各2点出土しており、胴巻板と地板の鉾留は、前者は縦1段で後

者は縦2段であり、通常の留めかたを行っている。本例では、装飾性をもたすため、あるいは、小札鋳留式との過渡期のものであり、そのような鋳留方法をとったものであろうか。

以上によりこの眉庇付冑は、出現直後の所産ではなく、やや下るものとする。

本例の短甲は、前述のようにバラバラになって出土したため、部品をその形状よりおしはかってあてはめて復元された。

革綴短甲は、地板の形状により縦板式・方形板式・長方形板式・三角板式に分けられる⁽⁴⁾。これらの中で最も多く出土しているのが三角板式であり、この形式で地板の綴じ方が鋳留に変化する。前出の新開1号墳より出土した三角板革綴短甲は、一部に鋳留をおこなっていて、鋳留技法導入を考える上で興味深い。

本例の三角板革綴短甲は、三枚胴式として復元を行った。しかし、厳密に言えば、脇部の帯状の縦板があったかどうかは不明である。革綴短甲は、開閉装置のない胴一連が通有な形態と思われるが、大阪府堺市七観古墳より出土（東槨）の三角板革綴短甲は三枚胴式であり、右開閉である。前胴には、地板に明確な三角板はなく、後胴中央に小型のものがあるにすぎず、あとは平行四辺形板で構成されている⁽⁵⁾。本例においても、部品を検討したところ前胴には明確に三角板としようものは考えられなかったことより、七観古墳例と類似している部分がある。

本例の短甲の年代については、非常に難しい点が多いが叱責を覚悟で述べれば、三角板革綴短甲の製作された時期の終わり頃のものではなかろうか。七観古墳よりは、前出の三角板革綴短甲と三角板鋳留短甲が相伴して5世紀の第二四半期頃と考えられている。また、新開1号墳よりは胴一連の鋳留短甲が出土していて同じ年代観を認め、両者は鋳留技法導入の時期のものであるといわれている⁽⁶⁾。本例はこれらと近い頃の所産と考えている。

次に、眉庇付冑と短甲の相伴関係について若干述べてみたい。眉庇付冑と時期的に並行すると考えられている短甲の形式は、三角板鋳留式、横板鋳留式が原則といわれている⁽⁷⁾。しかし、本例のように、時期的に先行する革綴式短甲と相伴している例もある。畿内の場合、他地域に比べ、眉庇付冑と相伴している短甲に、本例と同じ三角板革綴式の占める率が高いことが指摘されている。よって、短絡的にこれら短甲が先に、次に眉庇付冑がもたらされたと考えられないこともいわれている⁽⁸⁾。本例の短甲は眉庇付冑より僅かしか先行していないと考えられるので、同時にもたらされた可能性があると考えられる⁽⁹⁾。

古墳時代の重要な武具である甲冑は、畿内において、大和政権の統制下の組織で製作され、各地へもたらされた可能性が強いという解釈がされている⁽¹⁰⁾。この考えをもとに、各地の古墳で副葬されている甲冑の検討から、大和政権と各地の首長との関係をおしはかることもできるのではなかろうか。

最後に、北陸における甲冑出土例について紹介して、この章を終えたい。

現在までのところ、北陸三県（富山・石川・福井）で甲冑を出土している古墳は、無常堂古墳

も含めて十例を数える。次に無常堂以外の九例を列記してみる。

- ① 石川県羽咋市柴垣円山1号墳より長方形板革綴短甲1。 4c末～5c初
- ② 石川県加賀市狐山古墳より横矧板鋳留衝角付胄・同短甲各1。 5c中～末
- ③ 石川県加賀市吸坂丸山5号墳より小札鋳留衝角付胄1。 5c末
- ④ 石川県能美郡寺井町和田山2号墳より短甲1（形式は不明）。 6c前半
- ⑤ 石川県和田山5号墳より小札眉庇付胄1・三角板鋳留短甲2・頸甲1。 5c後半
- ⑥ 石川県辰口町西山3号墳より小札鋳留眉庇付胄・横矧板鋳留短甲各1（これらはすべて破片で出土し全体の形状は不明である。また、あわせて頸甲・肩甲片が出土している）。
5c末
- ⑦ 福井県吉田郡二本松山古墳より小札鋳留眉庇付胄（金銅装）・三角板鋳留短甲・頸甲各1。
5c後半
- ⑧ 福井県遠敷郡西塚古墳より小札鋳留衝角付胄・眉庇付胄伏鉢・同受鉢（金銅製）・横矧板鋳留短甲・頸甲・肩甲各1（なお衝角付胄以外は破片である。眉庇付胄は同一個体の可能性もあるのではなかろうか）。 5c後半
- ⑨ 福井県敦賀市向山1号墳より小札鋳留眉庇付胄（金銅装）2・衝角付胄1（浅学なため形式は不明）・三角板鋳留短甲1・鋳留頸甲（金銅装）1・頸甲1・肩甲2・挂甲小札多数。 5c末～6c初

以上のように形式の不明の例もあるが、①の例が古い形式の短甲のみで、古墳の時代も一番古い。次が本例である。革綴短甲は、現在までのところこの2例のみである。

註

- (1)田嶋明人氏の御教示による。また、次の後山明神3号墳の報告で述べる1号溝の遺物の「布留系」土器より本遺物はやや後出すると考える。
- (2)田嶋明人氏の御教示による。
- (3)小林謙一「甲胄制作技術の変遷と工人の系統」(上)『考古学研究』第20巻第4号 1974
- (4)小林謙一 同 上
- (5)樋口隆康・岡崎 敬・宮川 渉「和泉国七観古墳調査報告」『古代学研究』27 1961
- (6)小林謙一 前掲書
- (7)小林謙一「甲胄出土古墳の研究―眉庇付胄出土古墳について―」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 1983
- (8)小林謙一 同 上
- (9)小林謙一 同 上
- (10)小林謙一「甲胄製作技術の変遷と工人の系統」(下)『考古学研究』第21巻第2号 1974

第Ⅲ章 後山明神 3号墳の調査

第1節 調査に至る経緯と調査概要

1. 調査に至る経緯

昭和62年、小松市教育委員会は、東部産業振興団地造成事業に伴う河田山古墳群発掘調査の最終年度をむかえていた。9月には、総数62基、調査対象52基からなる古墳の調査も、あとは切石積横穴式石室を有する河田山33号墳を残すのみとなっていた。この石室の解体作業が終盤をむかえた9月22日、埴田町在住の小山忠明・策次両氏が、畑の耕作中に出土したという須恵器と玉類を持って現場事務所に訪れた。畑は、後山無常堂古墳や後山明神1・2号墳の存在していた地区である。早速、両氏の案内で現地赶赴したところ、斜面下方から漸次削平整地してゆく過程で、古墳の主体部の一部が露呈した状況にあった。破壊部分には、白色粘土とともに多量の扁平礫が散乱しており、これが、近接の埴田無常堂古墳でも検出された、礫敷の箱形粘土槨であることを確認した。幸い、小山氏の通報が迅速であったことで、主体部の全面破壊はまぬがれていた。しかし、遺構が地表下20～30cmと極めて浅い位置に存在していること、小山氏が開懇継続の意向をもっていることから、現状での保存対策が困難な状況にあった。小山氏の善意ある対応に答えるためにも、早急に調査し、記録保存する必要があるという結論に達し、県文化課に状況を説明、発見届・発掘通知の緊急の提出に了解を得、10月2日より、主体部を中心とした発掘調査を開始するに至った。

遺跡名称については、位置や内容が不明確ではあるものの、同一丘上に後山明神1・2号墳の存在が知られている。これらは、昭和27・29年の発掘で、すでに主体部は失われているものであり、今回発見のものと重複は考えられないとして、後山明神3号墳の名称を付すこととした。

2. 調査概要

調査は、耕作により破壊される主体部の調査を中心とし、耕作の影響を直接的に受けない周溝については、プランの確認及びトレンチによる部分調査のみとした。

トレンチは、主体部の主軸を設定し、それにのる主体部上の一点を起点として各間45°の放射状にA～Gの7本のラインをもとに配置した。トレンチによって周溝の位置及び規模を確認した後、盛土は残存しないことが判明したため、ただちに周溝内側のほぼ全体を掘り下げ、周溝及び主体部のプラン確認を実施した。

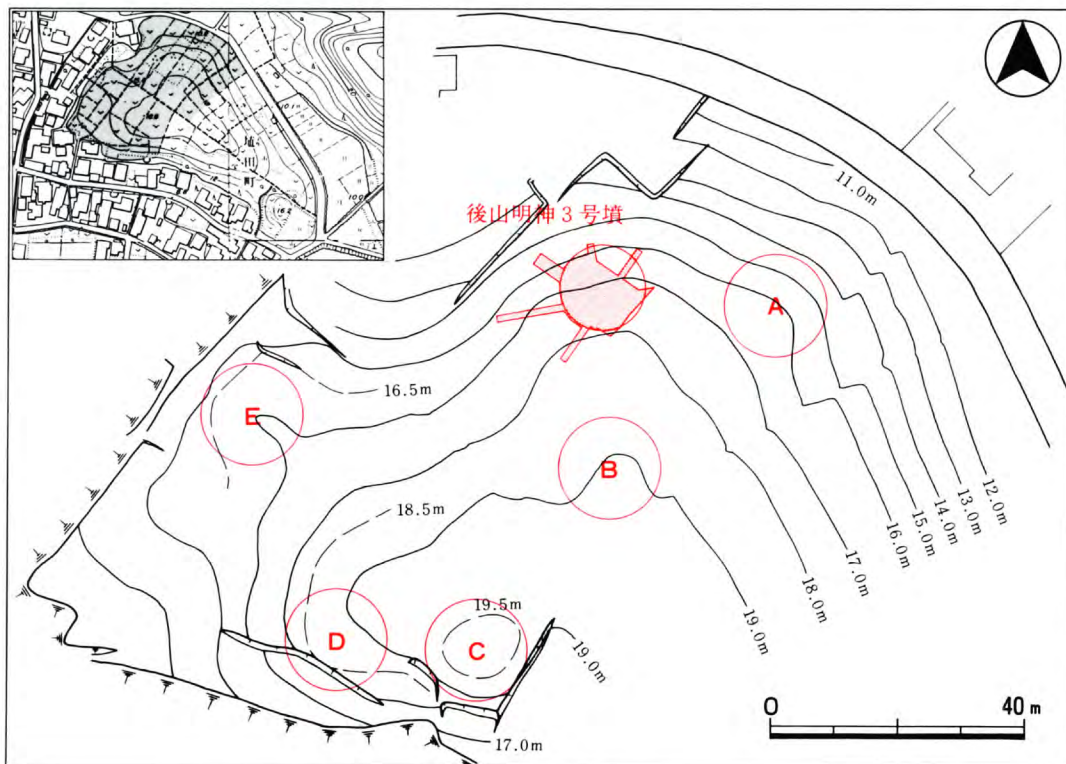
調査開始当初より、古墳時代前葉の遺物が散見されていたが、Aライントレンチの南端部に該期の溝を検出し（1号溝）、古墳が造営される以前の遺構も、丘陵上に展開していることが確認された。

10月9日より主体部の掘り方部分から掘り下げを開始。13日には、東西方向を主軸とする粘土礫部分のプランを検出したが、斜面下方側の粘土壁は、今回の耕作による破壊以前の段階ですすでに失われていることが判明した。しかし、玄室内部については、比較的良好な遺存状況を示しており、10月22日に、残存する粘土壁を残した状態で完掘した。

10月29日までに、粘土壁の除去と礫敷きの取り上げ作業を終え、主体部下位面のタチワリと面精査にはいった。その結果、主体部の斜面下方側（北側）に隣接して、白色粘土塊と多量の小円礫をもつ浅い土坑（1号土坑）と古墳時代初頭の不整形土坑（2号土坑）が検出され、また、主体部の掘り方に一部重複するかたちで半円形の溝（2号溝）も検出された。また、主体部の主軸上にのるかたちでピット2個が検出され、その配置から、粘土礫の構造上の施設、つまり木芯痕の発見ではないかと注目された。

1号土坑は、2～5cmの非常に小さい円礫数百個を持っており、その実測には11月11日までかかった。その性格については、現地で結論づけるには至らなかった。

11月15日をもって、現地での全ての調査を終了した。また、耕作で破壊された部分は、玉類の集中地点であったため、白色粘土が混在している耕作廃土を選別し、16日より30日にかけてフルイによる検索作業をおこなった。



第22図 後山明神 3号墳の立地と周辺の古墳分布（S=1/1,200）

第二節 墳丘・周溝の調査

1. 立地および周辺の状況

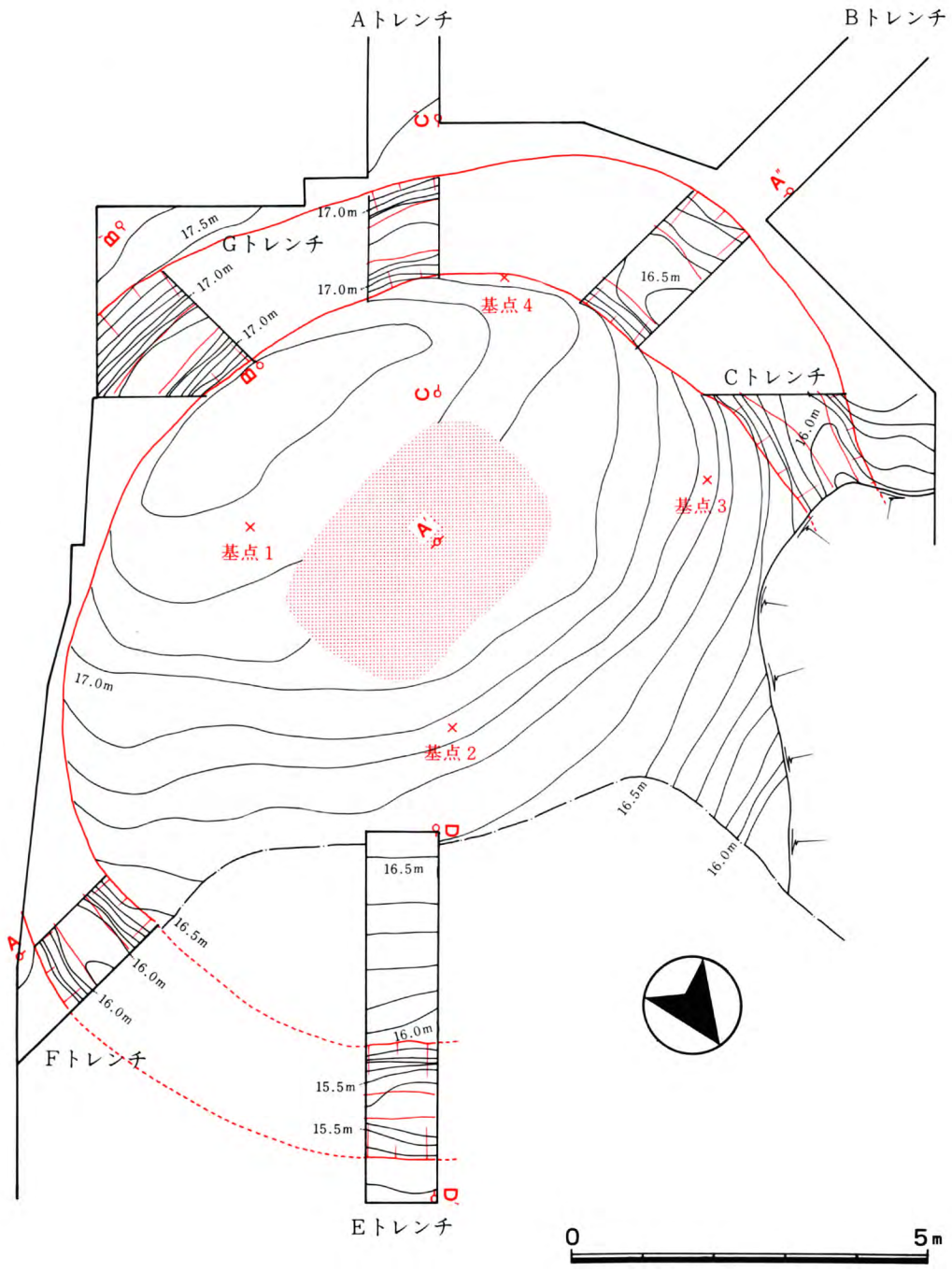
古墳は、北に向かって傾斜する緩斜面上に立地しており、耕作で、起伏の激しい畝が形成されていて、現況では殆ど古墳の存在を認定することができない状態にある。また、自然流土や、たび重なる開墾によって、墳丘盛土はすでに失われていた。本墳の状況を念頭に置いた上で、周辺を詳細に観察すると、同様の過程で墳丘の大部分が失われてしまった古墳と考えられる微高地が残存していることがわかる。第22図は、丘陵西半部を1mコンタで測量したものであるが、少なくとも本墳以外に5基の古墳が想定された。この中で、南西部の3基(C～E)のうち、いずれかが後山明神1・2号墳に該当する可能性が大きい。古墳の規模については推定困難であるが、さほどかけはなれた大きさのものは無いと思われる。また、時期的にも、採集遺物等から、ほぼ同時期に対比されるものと考えられる⁽¹⁾。立地としては、B～Dが丘陵頂部に位置し、A・Eそして本墳がそれを取りまくように、斜面上に位置している。C・D以南の宅地として削平されてしまっている区域でも、北斜面と同様の展開が予想される他、本墳西側の削平部においても、尾根地形のつながりから、1基程度は存在したであろう。

2. 墳 丘

先に述べたように、墳丘盛土はすでに失われていた。第23図で示したコンタ測量に際しては、斜面上方では地山面で、主体部北側の斜面下方では、主体部の存するレベルから不自然にならぬよう周溝に至る面を黒色土中で捉えることとした。但し、斜面下方の墳丘裾部にかけては、耕作による盛土の堆積が厚く、Eライントレンチの設定のみとした。また、墳丘北西部の一面は、段差を持つやや平坦化した畑となり、すでに削平されている。周溝下底の立ち上がり部から計測した古墳の径は約11.5m、上端からでは10.5mで、整円形をした円墳となる。

3. 周 溝

周溝は、幅120～200cm、深さ50～70cmを測って円形にめぐっている。斜面下方のEライントレンチでも比較的しっかりと掘り込みとして検出したため、自然傾斜に対応しながら、ほぼ全周しているものと考えられる。断面形は逆台形を呈し、下底から墳丘側への立ち上がりは概ね50度を超える急傾斜を示している。このことから、墳丘とは傾斜変換線をもって形成されていたものと推測される。土層の堆積は、黒褐色土を主体としており、盛土の崩壊土層として明確に区分しうるものはなかった。周溝内の出土遺物は、殆どが古墳時代初頭の土師器片で、覆土内に細片で混在する状況を呈しており、包含層からの流れ込みとして捉えられる。従って、周溝は、粘土礫主体部に伴うものと考えているが、該期の遺物と明確に判断されるものは検出されていない。



第23図 墳丘実測図 (S = 1/80)



第24図 周溝土層断面図 (S = 1/80)

第3節 主体部の調査

1. 主体部の構造

検出された主体部は1基で、いわゆる礫敷の箱形粘土槨と呼称されているものである。第1節でも述べたように、耕作によって一面を破壊された状態で検出した。

主軸はN-74°Eを指し、墳丘上の位置では、南方向つまり斜面上方に片寄っている。主体部の存する部分も、緩やかな傾斜部にあたるため、斜面上方部にかけては地山を掘り込んだ掘り方が検出されたものの、下方部は、掘り方が地山面まで達しておらず、そのプランは把握していない。従って、斜面下方に開口するコの字形の掘り方として検出している。長軸は約4.5mを測る。掘り込みの深さは最大で40cmを測り、覆土は黒褐色土を主体とする。この掘り方の内部に埋葬主体となる粘土施設が構築されているわけである。プラン確認段階では、掘り方埋土の黒褐色土は、粘土施設の上端プランに内側を輪郭付けられた、コの字形溝状プランとして表出する。

内部の粘土施設については、同様例を「箱形粘土槨」とする学史的な用語がある。この用語自体の適性については疑問視もされている⁽²⁾。今回の調査で得られた所見からも「槨」の範疇では捉えきれない点が指摘できる。この呼称等の問題については後述するとして、本節の報告段階では一応「粘土槨」という用語に従っていくこととしたい。

粘土槨（第25図・第26図）

粘土槨の壁基底部は、第26図の断面南半部（以下、南壁）でみるように、掘り方壁に接する位置から貼られており、掘り方内を充填するかたちとなっている。即ち、上弦三日月状の基底部をなして槨天井部へとスムーズに連続してゆく。基底部粘土と掘り方底面との間には、間層が存在している。さらに、その下位に棒線網掛けで図示してある土層があるが、検討余地は残されているものの、この主体部に先行する全く別の溝状遺構（2号溝）として一応把握したものである。

北側の掘り方及び粘土壁の残存していない側辺（以下、北壁）は、断面で基底部のみを把握している。その形状は南壁とは異なっており、粘土壁基部を地中に差し込むかたちをとっている。このことは、構築段階においても、北側斜面部では、掘り方壁は形成されておらず、両側の状況の違いに対応した結果生じた、手法の差異であると考えておきたい。基底部下底面は、いずれも礫床レベルよりも下位にある。

粘土壁は、南壁で約25～30°の傾斜をもち、最大で水平距離約40cmの屋根状の立ち上がりをとどめている。粘土壁厚は5～10cmで、断面では、中心部に向けてやや下方に内湾する傾向がある。これは、土圧による変形で、本来直線的に主軸に向かって立ち上がっていたものと思われる。

東西の短辺の壁は、不明確な部分が多い。東壁は攪乱を受けた部分でもあり、基底部のみが残存している。しかしながら、南壁からの立ち上がりの連続性は比較的スムーズであるように捉えられた。直立するのか、傾斜するのかは不明であるが、南北の長辺壁と連続的に構築されていた



* 網点部は、粘土範囲ではなく、側壁の立ち上がりをとどめる部分の粘土壁を示す。(粘土壁基底部範囲は第28図。)

第25図 主体部平面図 (S = 1/30)

ものと推定される。

一方、西壁はかなり複雑な状況を呈している。木根や耕作による攪乱が多いのも影響しているが、土層の堆積状況及び、粘土壁の断面にいくつかの注視すべき点が観察される。2層は、粘土壁同様、灰白色・淡黄色粘土を主体としているが、全体に暗褐色土をブロック状に少量含んでおり、やや純粋さに欠ける層である。調査段階では、この2層土の存在により、粘土壁を面的に把握する作業でかなり苦労した。断面図で見ると、2層土が檜外においても認められるのは、この西壁のみである。檜内の1～5層が壁・天井部の崩壊土層として把握可能であるものの、この檜外に堆積する粘土主体の土層は区別して捉えられるべきと思われる。また、この土の平面的分布は、西壁を被覆するかたちをとっている（第27図 2層土除去前に把握した粘土壁）。

次に、西壁自体の断面であるが、一応網点で示したかたちで認定している。しかし、その内部で破線で区切ってあるように、(2)層として表示してある部分は暗褐色土を少量含み、決して一様な粘土の連続として把握している壁ではない。従って、基底部との連続性にやや疑問がもたれる。さらに、平面では、南壁と西壁の接点において段差が形成されており、西壁の方が上位を覆うかたちが認められる。この両壁の交錯状況については、崩壊の過程に起因するのか、本来の属性を示しているのかは即断しかねる。ただ、後者の立場をとるなら、先に述べた西壁の種々の状況を含めて考えると、その形成過程に他の壁とは異なる様相を検討する必要がある。

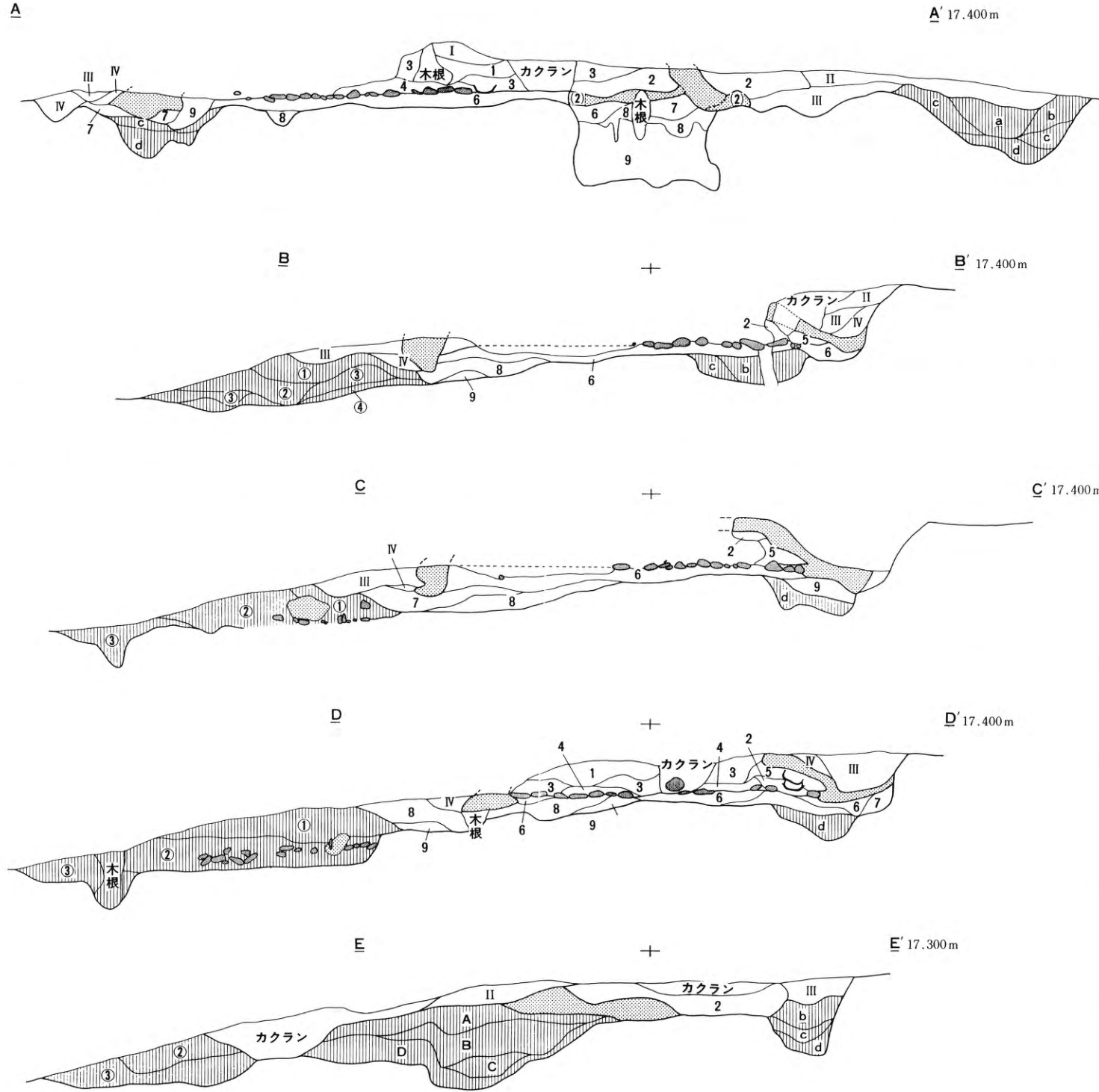
礫床（第28図）

北壁側において、幅約60cm長さ約120cmの範囲が、本墳発見の端緒となった耕作によって、礫が除去されている。また、西壁寄りでは、溝状の開墾跡があり、一部の礫が失われている。

礫床の範囲は東西1.7m、南北2.0mで、東壁方向に片寄っており、西壁側は70～90cmの空白部が形成されている。使用礫は、扁平なものがよく選択されており、大きさは3～25cmと幅をもつが、概観としては、10～15cmのものを主体として、5cm程度のもので隙間を埋める役割を果たしている。しかし、細かく見れば、構成礫の差異による平面的なブロックが区分される。西壁側では、大形のものが形状の選択によって、隙間礫を殆ど使用することなく旨く詰め込まれている。一方、東壁側では、大小礫を両者有効に利用したブロックを形成している。そして、両ブロックの接点においては、小礫を主体とした帯状のブロックが形成されている。これらのことから、中間の帯状のブロックは、その総体で、東西ブロックの隙間への緩衝材的な役割を担っているもので、礫敷き過程の最終段階に位置付けられることが推測される。

礫床下位の土層では、しまり無く柔らかい、やや赤みを帯びた褐色土（6層）が、5cm程度の厚さで広く分布している。恐らくは、礫を安置することを目的として貼られたものであろう。

西壁側の空白部は、断面でみるように、礫床上面レベルに連続するかたちで粘土を主体とする(2)層の堆積が認められる。面的にやや均質さを欠き、また、一部攪乱を受けていることもあり、天井崩落土としての可能性も否定できない。そうとすれば、礫空白部は、低く一段下がった床面を形成していたこととなる。⁽³⁾



- (主体部被覆土)
- I層：(灰)褐色土 耕作土1
 - II層：暗褐色土 耕作土2
 - III層：黒(褐)色土 炭化物片、黄褐色土粒子微量含有。やや軟質。
 - IV層：淡灰褐色土 灰白色粘土ブロック多量含有(10%)。堅緻。
- (主体部内埋土)
- 1層：黒褐色土 灰白色・灰黄色粘土ブロック中量含有(5%)。
 - 2層：灰黄褐色土 灰白色・灰黄色粘土ブロック主体(50%以上)で、暗褐色土をブロック状に含有。堅緻。
 - (2)層：灰黄(褐)色土 2層よりさらに粘土を主体とする。
 - 3層：灰黄褐色土 灰色にくすんだ暗褐色土主体。灰白色・灰黄色粘土ブロック中量(5%)含有。堅緻。
 - 4層：褐色土 暗褐色土をマトリックスとして、灰白色・灰黄色粘土ブロック極多量含有(30%)。堅緻。やや淡い。堅緻。
 - 5層：黒褐色土
- (主体部床下掘り方埋土)
- 6層：褐色土 若干赤色を帯びてくすむ。黄褐色土ブロック中量含有。しまり無く軟質。
 - 7層：暗黄褐色土 炭化物片やや多く含有。堅緻。粘性有。
 - 8層：暗褐色土 淡くくすんで濃淡有り。しまり無く軟質。
 - 9層：(明)褐色土 しまり劣るが、やや堅い。
- (1号土坑及び主体部下位斜面側堆積土)
- ①層：黒褐色土 III層との区別は微妙。切り合いとして把握。
 - ②層：暗褐色土 淡くくすむ。黄褐色土粒・小ブロックをやや多く含む。軟質。
 - ③層：淡褐色土 しまり劣り、軟質。
 - ④層：黄褐色土 地山漸移層。
- (2号土坑覆土)
- A層：黒(褐)色土 堅緻。
 - B層：黒褐色土 褐色強く、ややくすむ。
 - C層：黒褐色土 B層より若干黒く、炭化物を比較的多く含む。
 - D層：黒褐色土 B層より褐色強くやや淡い。黄褐色土粒を微量含有。堅緻。
- (2号溝覆土)
- a層：暗黄褐色土 黄褐色土粒多量含有。硬質黄褐色土小ブロック含有。しまり劣り、軟質。
 - b層：黒褐色土 やや淡くくすむ。軟質。
 - c層：黒(褐)色土 やや軟質。
 - d層：黒褐色土 b層より淡く、黄褐色土粒少量含有。

第26図 主体部土層断面図 (S = 1/30)

ピット（第28図）

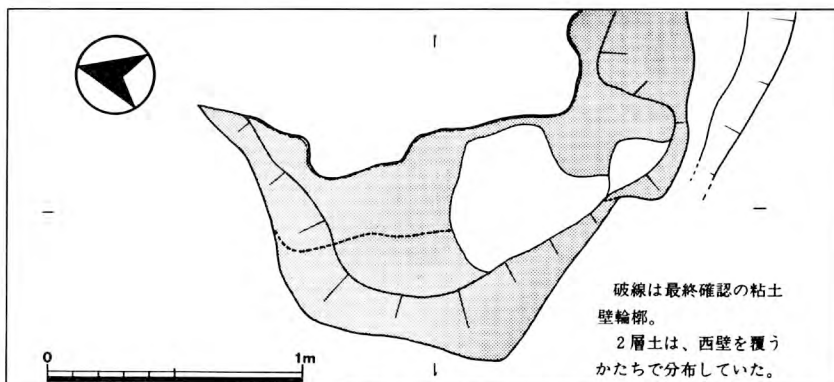
礫床を除去し、地山面の精査を実施したところ、溝・土坑とともに柱穴状のピットを2個検出した。溝及び土坑は、粘土礫に直接には関係しないものとの判断を下した。しかし、ピットは、粘土礫の主軸上に乗るとともに、それぞれが東西の壁と位置的に完全に合致していることが判った。このピットと関連付けられそうな遺構は他に検出されておらず、粘土礫の構造上の施設である可能性が極めて高いといえる。ただ、検出過程が礫床除去後ということで、図上合成で把握したものであり、礫床残存段階でもピットプランとして検出可能であったかどうかは不明である。

ピットの平面形は、西壁のP1が、87×40cmの長楕円形を呈する。下底西端に円形柱痕状の最深部を有し、その深さは約45cmを測る。東壁のP2は、40×32cmのほぼ円形を呈し、深さは約35cmを測る。

礫床との関係では、P1が完全に空白部におさまっていて重複しない。P2は、その半分が礫床範囲に入るが、プランに合致する部分は礫の空白部となっている。しかし、耕作による攪乱区域でもあり、その判断は明確にはできない。

西壁側のP1のみが長軸セクションに重なった。中心を通るものではなく、ピット覆土及び断面形状の属性を明確には示していない。掘り下げ時の所見では、覆土はやや軟弱で、しまりに欠け、色相・性状による層区分のはっきりとしないものであった。また、断面図でピット上面を被覆する粘土主体の(2)層であるが、面的にピットを閉塞してしまうひろがりを見せていたかどうかは判然としない。先の礫床の項でも述べたとおり、やや不安定な土層である⁽⁴⁾。一方P2は、土層断面図の作成はしていないが、P1とはやや異なり、比較的しまりのある暗褐色土が主体となっていた。

P2の東側に隣接して、同じく主軸上にのるかたちで小ピットが検出されている(第37図)。このピットは、2号溝内下底において確認できたもので、溝との新旧関係は判らない。本来の属性に不明な部分が多く、一応第28図の平面図から除外した。下底のレベルではP2より3cm程浅いのみであり、確認面がより上位に存していたものと推定すれば、関連づけて検討する余地は充分残されている。



第27図 2層土除去前に把握した西側粘土壁

2. 遺物出土状態（第28図）

調査によって検出された主体部内土器は、須恵器では甕2個体、高坏1個体、坏身2個体、坏蓋2個体、高坏蓋1個体、土師器では埴形土器5個体、鉢形土器3個体である。他に、発見時に採取したものとして、須恵器の高坏1個体、坏身3個体、坏蓋2個体、土師器の埴1個体がある。

その他、鉄製品として刀子3点、鏃(?)2点、玉類として管玉11点、ガラス製小玉75点を検出している。この内、刀子1点と鏃1点、管玉9点とガラス小玉34点は発見時の採取品である。

土器の分布状態は東西に二分される。まず東半部は、須恵器甕1個体が原位置を維持していた以外は、すべて発見時に採取されてしまっている。その時の所見によれば、甕の出土した付近に集中していたとのことである。組成は、須恵器甕1、坏身3、坏蓋2、高坏1、土師器埴1となっている。蓋坏は、身に蓋を被せた完全なセット状態で出土したらしい。

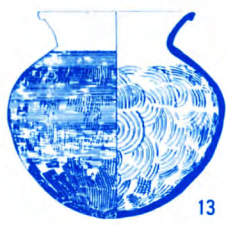
一方、西半部は、礫床西辺中央付近から北西方向榔外へ斜走する溝状の攪乱部分以外では、ほぼ原位置を留めている。土器の配置は、器種単位での分布の偏在性が認められる。まず蓋坏群が礫床南西コーナー部において粘土壁に接して配されている。身に蓋がかぶさった状態のものゝ蓋が裏返しで身に重ねられた状態のものゝ2セット、及び、それに隣接して、高坏蓋が裏返しの状態で一個体という構成である。相対する北西コーナー部には、高坏が一個体単独で存在し、また礫空白部の西壁寄りには、ピットに南接して甕が一個体置かれている。土師器は、礫床西半部の中央付近に、埴が原位置を保って出土している他は、全て、溝状攪乱中において、榔外にまで引きずられてゆく様に破片で散在して検出されている。本来、残存していた埴の周囲に集中していたものと判断される。土師器の器種構成は、埴4個体、鉢形土器2個体である。

鉄製品は、東半部では、発見時に刀子1点と鏃破片(?)が採取されている。鉄製品の発見には注意力を要し、これが全てではない可能性が高い。西半部では、中央寄りに刀子1点と鏃が1点、高坏に近接して刀子が1点出土している。

玉類は、攪乱を受けた部分である北東コーナー付近の一定範囲に集中しており、礫間の隙間に落ち込んだもののみが調査によって検出された。

他に、鉄2の付近に赤色顔料が小範囲で検出されており、また、北東部の攪乱を受けて除去された礫のなかにも、赤色顔料の付着が認められるものがある。

以上の東西の状況をまとめてみると、まず、須恵器については、全体で一つの組成とみるよりは、両極ではほぼ二対の対峙関係を示していることが看取される。組成で差をみせるのは、東群がセットとなる蓋を欠いた坏身を持ち、西群がセットとなる高坏を欠いた蓋のみを持っていることである。この差異自体も、相互の対応関係に有機的な関連性をうかがわせている。また、この両群でさらに注視すべきことは、土器胎土が全く異なっていること、及び、形態の諸属性に差異がみだせることである。両群の須恵器は、形式的には明確な時間的先後関係は指摘しえず、供給源の相違として考えるのが妥当であろう。一方、土師器では、量的に大きな違いがある。また、須恵器と同様に、東西では、胎土及び形態に違いが指摘される。



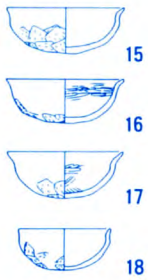
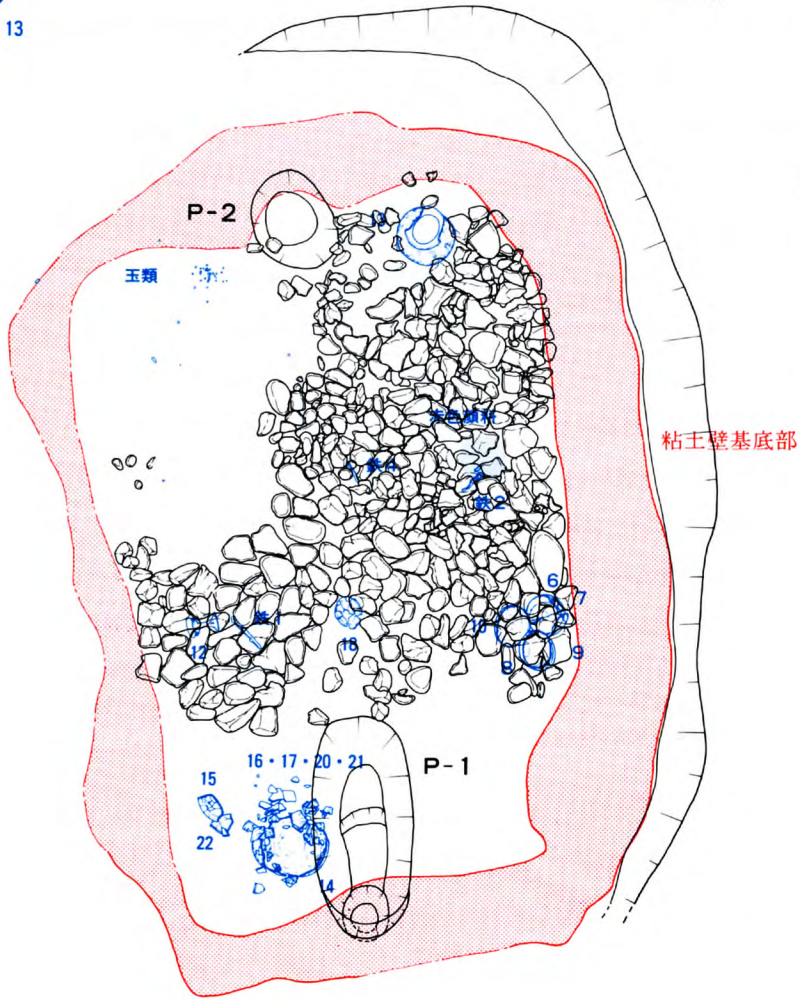
13



東群

十
基点2

十
基点1



15

16

17

18



20



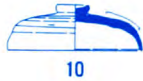
22



21



12



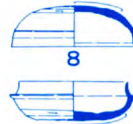
10

西群



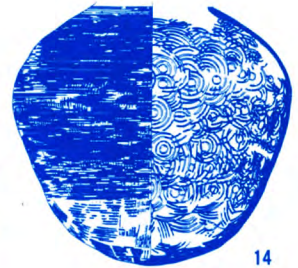
6

7



8

9



14

第28图 主体部遺物出土状況図 (S = 1/30)

第4節 主体部出土遺物

主体部内出土遺物の組成は、前節2で述べたとおりである。

1. 須恵器

蓋 坏 (第29図1～9)

1と2、3と4、6と7、8と9がセットを成し、5の坏身のみが単独である。分布は、1～5が東群に、6～9が西群に属する。

1は蓋で、口径14.2cm、器高5.3cmを測る。天井部は高く、半球形に近い丸味を帯びるが、頂部において径6cm程の範囲が平坦となっている。天井と口縁部を界する稜は形成されておらず、かろうじて回転ナデによる弱い凹凸を変換線としている。口縁端部は内傾し、弱い凹面を有する。調整は、天井部の約1/2が右方向に回転ヘラ削りされているほかは、内外面とも回転ナデ調整となる。胎土は比較的密で、0.1～1mm程度の白色砂粒を多く含む。焼成は良好・堅緻で、色調は暗青灰色を呈する。胎土・焼成・色調は以下2～5共通である。

2は1の身で、口径12.2cm、器高5.6cm、受部径14.7cm、受部たちあがり高は2.2cmを測る。蓋受部のたちあがりは、外面においては内湾ぎみにごく弱い弧を描いて内傾し、内面においては中央部でやや肥厚して弱い凸面となり、比較的薄く丸い端部に至る。受部端部は上方に延び、比較的鋭い。体部は弱い丸味を帯び、受部付近に至ってゆるい外反傾向となる。底部は径約7cm程の平坦面となっている。調整は、体部下位から底部にかけて右方向に回転ヘラ削りされている。

3は蓋で、口径13.1cm、器高4.8cmを測る。天井部は1と異なり扁平である。天井と口縁部の境は、沈線を巡らすことにより、丸く鋭さのない稜を形成している。口縁端部はやや外反し、内側の内傾度は弱く水平に近くなり、凹面も比較的明瞭さを欠く。調整は、天井部の約2/3が左方向に回転ヘラ削りされているほかは、内外面ともに回転ナデ調整となる。

4は3の身で、口径11.3cm、器高5.2cm、受部径14.0cm、受部たちあがり高1.4cmを測る。蓋受部のたちあがりは、2より短く直線的に内傾し、端部は薄く丸くおさまる。受部は、ほぼ水平に短く延び、たちあがりとの境は、浅い沈線状の凹みが巡る。体部から受部へは比較的強く屈曲して、受部がやや突出するように画される。体部は丸みをもち、底部は弱く膨らむが、ほぼ平坦といえる。内面は、たちあがり部から体部への境は明瞭ではなく、むしろ、体部と底部との境が角張る。調整は、底部のヘラ削りが2と異なり左方向の回転となっている。底部にヘラ記号を持つ。

5は単独の身で、口径12.6cm、器高5.6cm、受部径15.2cm、受部たちあがり高1.9cmを測る。受部たちあがりは、端部に向けて微妙に外反しながら内傾し、端部は丸い。受部は緩く上方に延びる。体部は、受部端部からスムーズに連続して丸みを持ち、底部は径約7cmの明確な平坦面となる。内面は、たちあがり部と体部との境は緩く凹む程度、底部にかけては丸みを持って連続する。調整は、底部がヘラ切り後軽いナデ調整を施し、体部は約1/2近くまで回転ヘラ削りされる。

以上が東群の蓋坏である。1と2、3と4の各セットは、蓋と身で焼成による歪みや、色調の変化が完全に合致し、製作段階からのセット関係を維持している。

6～9は西群で、高坏蓋とともに壁際より一括出土している。

6は蓋で、口径12.6cm、器高4.2cmを測る。天井は低く扁平である。天井と口縁部の境は、沈線を巡らせて稜を形成している。口縁は、稜からほぼ垂下し、端部近くに至ってやや外反する。端部内側の内傾度は比較的強いが、凹面は浅い。調整は、天井部全体が右方向に回転へら削りされているが、稜にかけて幅1cm程がへら削り後軽い回軽ナデ調整が施されている。胎土は、白色砂粒を非常に多く含んでザラつき、南加賀古窯のものに特徴的に認められる黒色の粒子が目立つ。焼成は良好で、色調は淡灰色を呈する。

7は6の身で、口径11.1cm、器高4.5cm、たちあがり高1.4cm、受部径13.7cmを測る。蓋受部のたちあがりは、オリコミ手法によっており、一旦内傾するものの、反りが強く、端部にかけては直立ぎみとなる。端部はやや薄く丸い。受部端部は比較的薄く上方に延びる。扁平で広い底部をもち、丸く浅い体部は、受部に至って外反する。調整は、底部から体部の4/5が右方向に回転へら削りされているほかは、内外面とも回転ナデ調整となる。胎土・焼成は6に同じ。色調は紫灰色を呈する。歪みが比較的強い。

8は蓋で、口径13.8cm、器高4.6cmを測る。天井は低いが、6と異なり丸い。天井と口縁部の境は、浅く狭い沈線を巡らせる。端部の形態は、6とほぼ同様である。回転へら削りは天井部の1/2強の範囲に施される。胎土・焼成・色調は6に同じ。

9は8の身で、口径12.0cm、器高4.3cm、たちあがり高1.5cm、受部径14.1cmを測る。形態・調整・胎土・焼成は7と同様である。色調は淡青灰色（外面一部暗灰色）を呈する。

高坏蓋（第29図10）

大型有蓋高坏の蓋で、西群の蓋坏に並んで出土し、セットを成す身は持たない。口径14.7cm、器高5.0cm、つまみ径3.6cm、つまみ高3.9cmを測る。口縁部は垂下せず、やや外に開きぎみに端部に至る。端部内側は、比較的強く内傾し、凹面は明瞭ではない。天井と口縁部の境は、痕跡程度の稜を認めることができる。つまみは扁平で、中央部はやや大きく丸く凹む。調整は、天井部の1/2近くがへら切り後の回転ナデ調整で、肩部は左方向に回転へら削りされている。口縁部と内面は丁寧な回転ナデ調整となる。胎土は西群蓋坏に同じであるが、表面は平滑な仕上がりをみせる。焼成は良好・堅緻で、色調は、外面黒青灰色、内面淡灰色を呈する。

高坏（第29図11・12）

11は東群の採取品で、口径10.0cm、器高15.1cm、脚基部径3.1cm、脚底径7.6cm、脚高11.6cmを測る。体部には沈線が2条巡らされ、その間に、右下がりの連続揃描刺突文が施される。外回りの沈線は、口縁部と体部を画す稜となっている。口縁部は、緩く外反しながら外傾し、端部にかけて薄い。脚は、棒状に細長く、裾部で急激に外反して脚底となり、その強く屈曲する部分に四方向の円形スカシ窓が穿がたれている。調整は、全て回転ナデ調整である。胎土は、東群の蓋坏

に同じ。焼成は良好・堅緻で、色調は黒青灰色を呈する。

12は西群に属し、口径9.4cm、器高12.1cm、脚基部径2.6cm、脚底径7.9cm、脚高8.7cmを測る。11に比し、脚が短く、スカシが三方向台形となる他は、ほぼ同様の属性を示している。胎土は西群蓋坯と同様で表面がザラつく。焼成は良好で、坏部・脚底部に歪みがある。色調は、黒青灰色から一部淡青灰色を呈する。

甕（第30図13・14）

13は東群出土の小型の甕で、口径17.1cm、器高22.7cm、頸径12.7cm、最大胴径24.0cmを測る。胴部は扁球形に近く、最大径は中央よりやや上部に存する。口頸部は緩く外反しながら外傾し、口縁端部は、外側に折りかえすことによって幅8mm程の肥厚する口縁帯を作っている。調整は、胴部外面にタテ方向の平行タタキ（12条1単位）を施し、その後、頸部以下体部の2/3までカキ目調整により、タタキ目を消している。胴部内面は、同心円タタキ目が頸部以下全面に残されている。胎土は東群のものに共通。焼成は良好・堅緻で、色調は青灰色を呈する。

14は西群出土の比較的大型の甕で、壁際に正置されていて口縁部が耕作により失われている。頸部径13.2cm、最大胴径30.1cm、残存高28.7cmを測る。器形は13より大型化している分だけ長胴化し、器壁が薄くなっている。調整はほぼ同様であるが、底部の平行タタキは、タテヨコ重複して一部格子目状となる。胎土は西群のものに共通。焼成はやや甘く軟質で、ところどころ摩滅が激しい。色調は、青灰色から一部淡色を呈する。

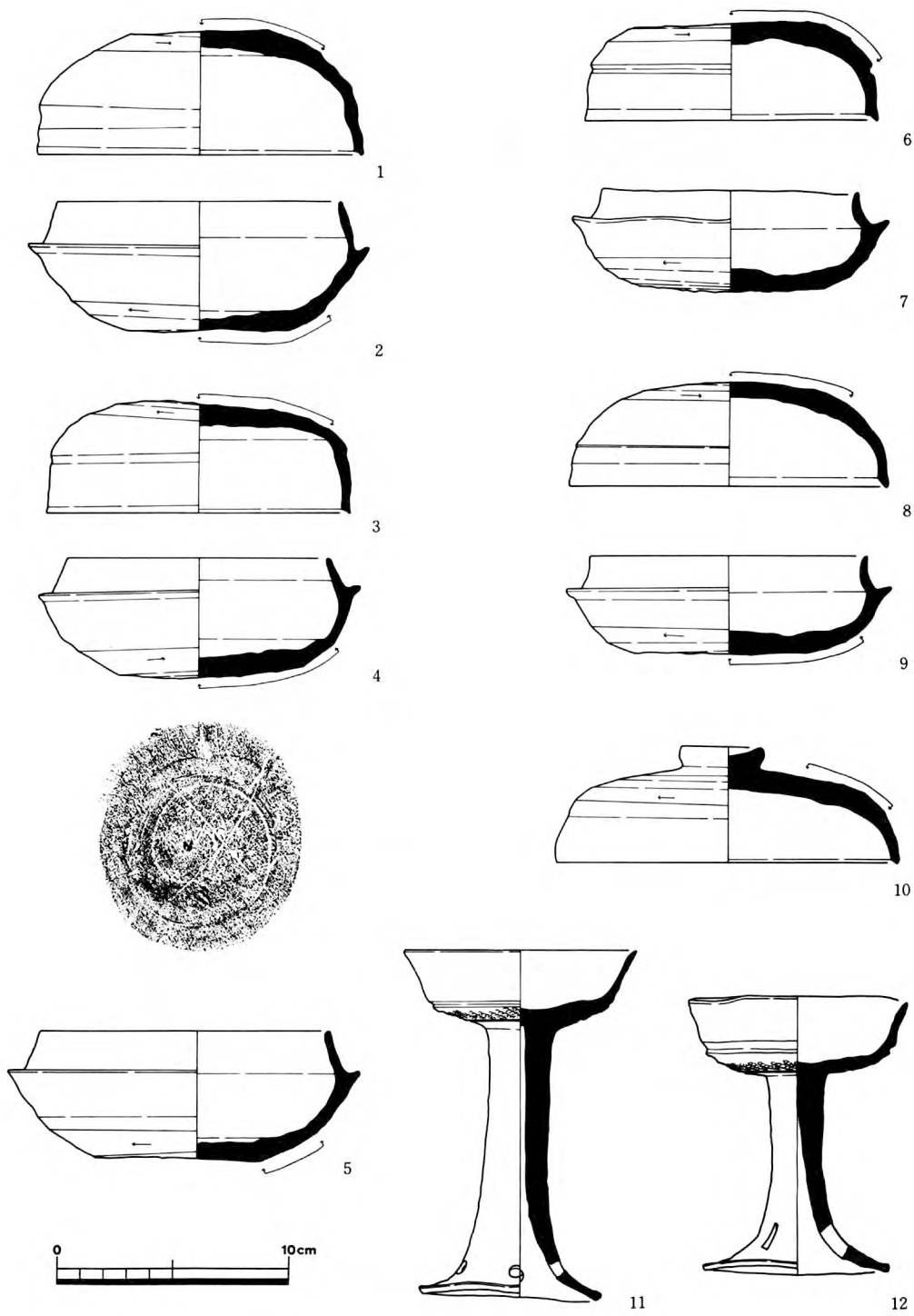
以上が主体部出土の須恵器である。分布によって東群と西群に分離され、各群内の胎土に統一性が指摘された。さらに、特に蓋坯において形態の差異も指摘される。東群のそれは、器高が高く、蓋と身を組み合わせることによって、扁球形に近く、高い容量を示し、蓋受部たちあがり直線的に内傾する特徴がある。一方、西群のそれは、組み合わせの断面が箱形に近く、低い。蓋受部のたちあがりも、やや短く、強く外反している。西群のものは、南加賀古窯の製品にみられる諸属性を備えており、産地がほぼ同定できる。したがって、東群と西群は、全く供給源を異にするものと考えられる。しかしながら、両群の須恵器には、形式的な段階差を明確には設定できず、器種組成の対比においても、意識的な関連性を想定することも可能であろう。

2. 土師器

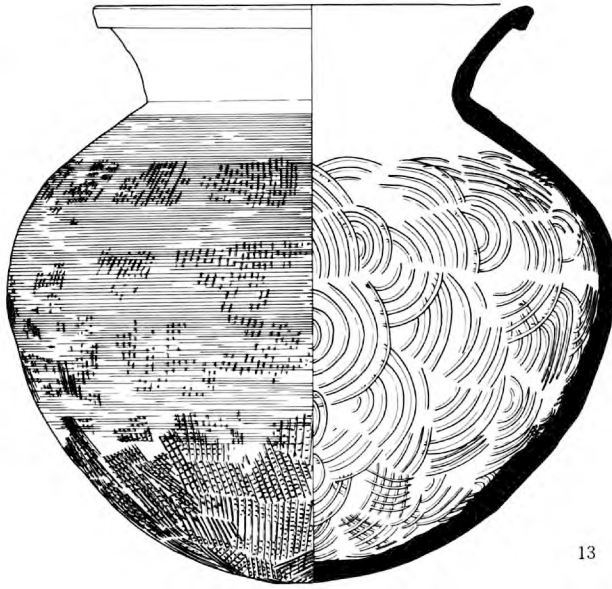
碗形土器（第31図15～19）

口縁部を外反させるもの（15～18）と口唇部を丸くおさめるもの（19）の2種に区分される。さらに、分布上前者は西群、後者は東群としても区分される。

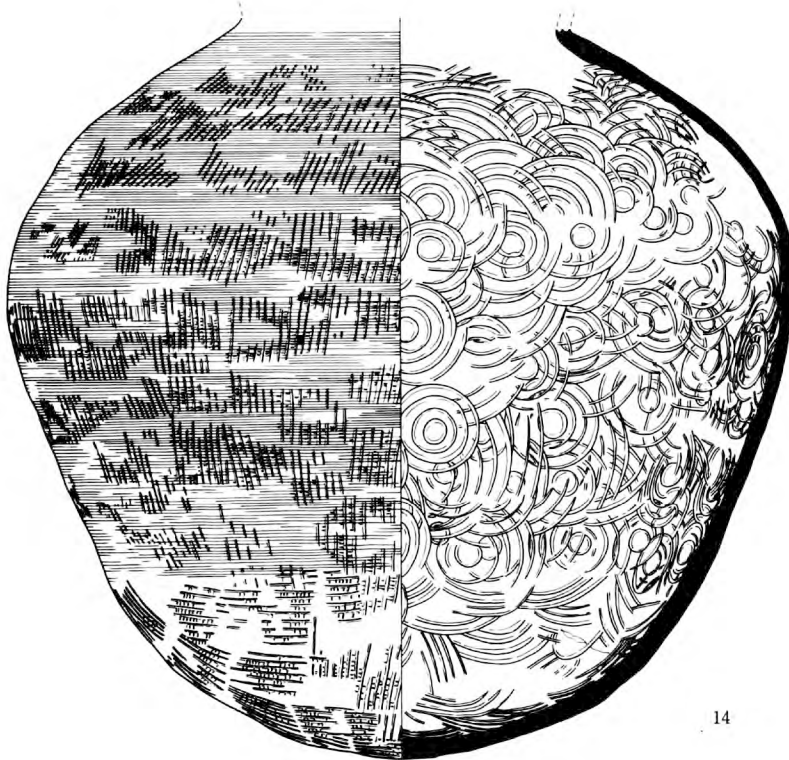
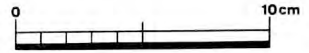
15～17は微妙な整形上の個体差はあるものの、ほぼ一括して同類とみなされるものである。法量にも差はほとんど認められない。丸い体・底部は、その外面をヘラケズリ調整とし、口縁部は小さく外反させて、ヨコナテ調整を施す。内面は、全体に判然としないが、口縁部以外をヘラミガキ調整としている。その他の属性については、15は、口径13.0cm、器高5.1cmで、色調は明橙



第29図 主体部出土須恵器実測図 (S = 1/3)



13



14

第30図 主体部出土須恵器実測図 (S = 1/3)

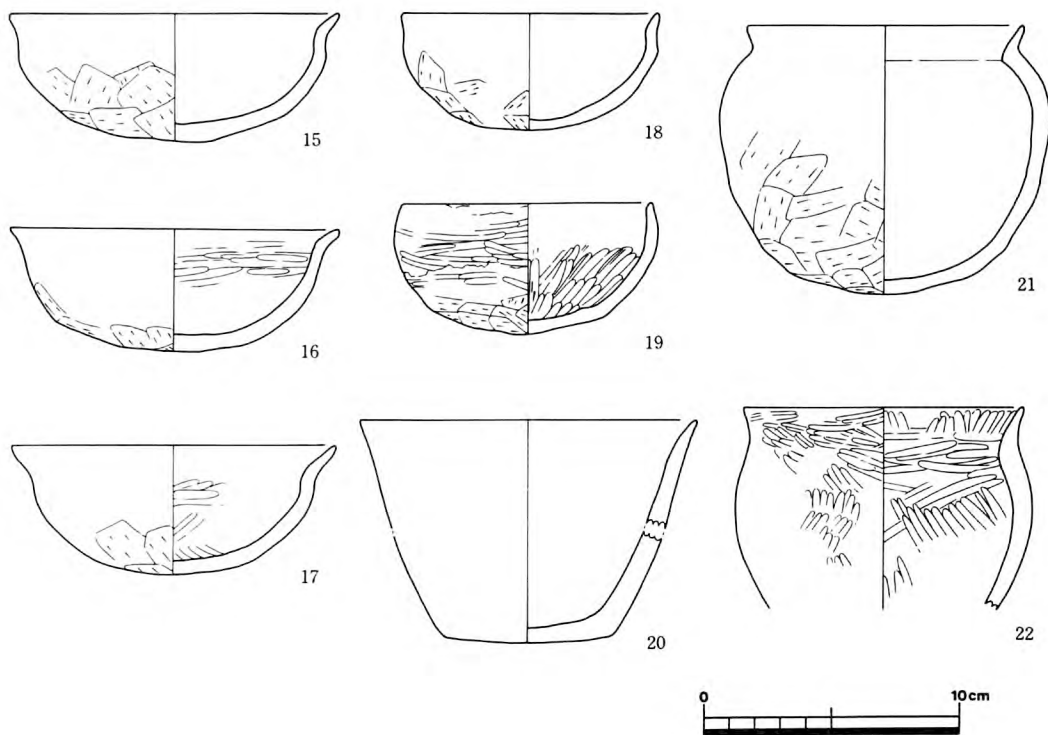
色を呈し、焼成は良である。16は、口径13.0cm、器高4.8cmで、色調は明橙色から淡黄褐色を呈し、外面底部に黒班が認められる。焼成はやや良である。17は、1/4の残存で、口径12.8cm、器高5.1cmを推定。色調は、内面が淡黄褐色から一部黒色、外面が淡橙褐色を呈する。焼成はやや良。胎土はすべて白色・黒色の微砂粒をやや多く含むが、緻密で、表面は概して平滑である。

18は、上述の小型品で、口径10.0cm、器高4.6cmを測る。口縁の外反は弱く、外面側のヨコナデ調整の影響程度のものである。体部内面の調整はミガキをもたず、ナデ調整のみと思われる。色調は淡橙褐色を呈し、焼成はやや良。胎土は15等と同じである。

19は東群出土のもので、口径9.8cm、器高5.1cmを測る。口縁部はややすばまる感じで丸くおさまり、半球形に近い。外面の調整は、底部にヘラ削りがなされ、体部から口縁にかけては横方向にヘラミガキが施される。内面は、ヨコナデの後、底部中心部から放射状にヘラミガキ⁽⁵⁾が施されている。胎土は、白色砂粒を多く含むとともに、暗橙褐色から赤褐色の粒子が目立つ。色調は、内面が橙褐色、外面が淡黄褐色を呈し、一部に黒班が認められる。焼成は良である。

鉢形土器（第31図20～22）

20は、平底から直線的に開く体部を持つもので、口縁部側との明確な接合点が無く、推定で図化したものである。1/2の残存で、口径は約13.2cmを測る。調整は摩耗により不明瞭である。色



第31図 主体部出土土師器実測図（ $S = \frac{1}{3}$ ）

調は、内面が淡橙灰褐色、外面が淡黄褐色を呈する。焼成はやや不良である。

21は、丸い体部から、「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つもので、形態的には壺に近い印象を与える。ここでは一応、次の22を含めて、埴形土器の系列のなかで法量の差から区分した鉢形土器に抱括することにした。1/3の残存で、口径約10.8cm、器高約10.5cmを測る。外面の体部下半から底部はヘラケズリが施されているが、その他は、調整痕が明瞭ではない。色調は、内面が淡黄褐色、外面が淡黄褐色から淡橙褐色を呈する。焼成は良である。

22は、21に近い形態を示すが、口縁部内側において体部から屈曲する明瞭な稜が形成されず、むしろ外反する程度の状況は、21よりは埴形土器に近い。調整は、内外面ともヘラミガキが施されている。底部にかけては不明である。1/5の残存で、口径約11.0cmを測る。色調は、内面が明橙色、外面が淡橙褐色を呈する。焼成は良である。

以上の鉢形土器は全て西群出土で、胎土はやはり、白色・黒色の微砂粒をやや多く含む共通のものである。ただ、しまりにややバラツキがあり、22は、きわめて緻密で精製された堅牢さがあり、表面はいたって平滑である。

3. 鉄製品（第32図、第2表）

鉄製品には、刀子と鍔がある。このうちには、主体部発見時に表採し原位置が不明であるものも含むが、元来は、いずれも主体部内に副葬されていたと考えられる。

刀子（第32図1～3）

刀子は、3点を数える。1は、やや茎尻を欠くがほとんど完形に近く、柄の木質及び柄縁金具の一部も遺存している。関は、棟側でやや斜角を持って明瞭に作り出されるが、刃側は金具装着のため確認できない。刃部下半には、木片が僅かに付着している。柄の木質は、ほぼ茎部全体に観察でき、最も残りの良い関付近で、最厚0.4cmを測る。また、柄縁金具は幅1.9cm、厚さ0.1cmの薄い鉄板を円筒状に曲げ、刃側で両端を重ねて作っている。つまり、柄は、前述の木質を関部まで挿入し、この金具で締める構造となっている。なお、柄縁金具の表面には、黒い漆状の塗料が薄く塗られている。

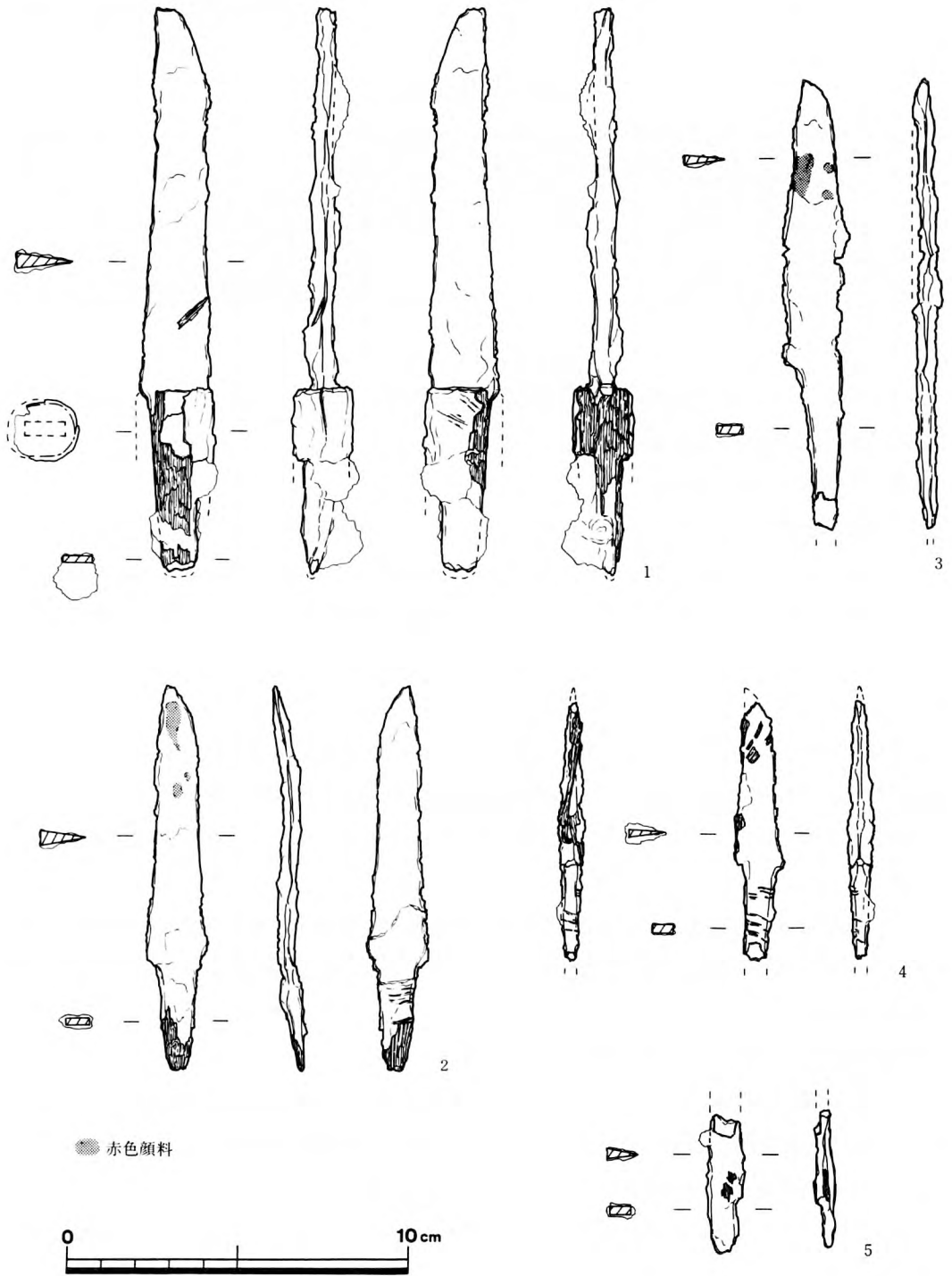
2は、ほぼ完形で、1を小型にした形状を呈する。関は、棟側で1のそれに似るが、刃側は錆のため不明である。茎部下半に、木質が遺存する。

3は、1・2と異なり刃先がやや幅広で、茎部も細く長い。関は、棟側で直角に近く切り込まれるが、対する刃側は直線的に茎部へと続いており、片関であると推定できる。

また、2・3の刃部上半には、主体部内の礫床に散布していた赤色顔料が、微量ながら付着している。

鍔（第32図4・5）

鍔として分類したものは、2点を数える。4は片刃で、刃側が関付近で緩く外反し逆刺状の突起を表出している。棟側は錆で膨れているが、元来は刃先から茎部にかけて直線的に続くものと



第32図 主体部出土鉄製品実測図 (S = 1/2)

見られる。また、この部分を被うように木質が薄く遺存している。茎部はやや扁平な方形で、樹皮が巻かれている。

5は、刃部の断面及び各部の計測値が4に似るため鏃としたが、刃の一部とそれに続く茎部が残存するだけであり、正確な原形は不明である。

第2表 鉄製品観察表

番号	種類	現存長 (cm)	刃部 (cm)			茎部 (cm)			備考
			長	幅	厚	長	幅	厚	
1	刀子	16.6	11.5	1.7	0.4	5.1	1.3	0.6	主体部内、西側付近礫床上より出土
2	"	11.4	7.6	1.3	0.4	3.8	0.7	0.3	主体部北東側破壊部分より採取
3	"	13.3	8.4	1.4	0.3	4.9	0.7	0.3	主体部内、中央付近礫床上より出土
4	鏃	7.7	4.9	0.9	0.4	2.8	0.7	0.4	"
5	" (?)	4.1	1.3	0.9	0.3	2.8	0.9	0.4	主体部北東側破壊部分より採取

4. 玉類 (第34図)

玉は、管玉とガラス製小玉の2種類である。大半が表採によるものであるが、それらも含めて玉類は、主体部の東半で集中的に検出している。

管玉 (第34図1~11、第3表)

管玉は11点を数える。いずれも硬く、緻密で光沢を持つ碧玉質の石材を使用している。

法量では、大型の1で直径12.8mm、長さ26.9mm、小型の11でも直径7.8mm、長さ19.0mmと、総じて重量感のある太身の管玉である。長さにおいて多少の差異はあるものの、直径に関しては、10mm前後のものが3点(2~4)、9mm前後のものが6点(5~10)あり、ある程度の規格性が窺える。

全て片面穿孔で、終孔口の位置が大きくずれる8以外は、管玉のほぼ中軸を穿孔している。孔径は、開口で2.5mm前後、終孔口で1mm前後に集中しており、法量差を越えた一貫した穿孔過程が想定できる。なお、2・3・7・11では、終孔口を中心に3mm前後の円形の凹みが穿たれている。

また、成形時の研磨痕は、上下面で一定方向に明瞭だが、側面では縦方向に微かに残る。6・7・9が、製作過程の角柱の名残を留めてやや不整形である以外は、円柱を意識した丁寧な研磨が施されている。

ガラス製小玉 (第34図12~84、第33図、第4表)

ガラス製小玉は、総計75点を数える。色調は、紺色、青緑色、水色、紫色、黄緑色の5色が基本となり、さらに濃淡、明暗、透明感の強弱が観察できる。色調別の点数は、紺色64点、青緑色8点、その他各1点ずつで、紺色の小玉が圧倒的な数を占める。

小玉の法量はその大小に較差があるため、直径を基軸に厚さ、重量、孔径について比較し、大・中・小に分けて検討した。但し、紺色と青緑色の小玉の中で、損傷が著しく図化及び計測不可能なもの2点は、ここでは除外している。

まず、直径9.5mm以上の大型品(12~16)では、重量分布が散在するのに比し、厚さは7mm前

後に収まる。非常に濃い色調を呈し不透明で、表面には、小玉製作時にできる気泡孔が目立つ。

上下面が直線あるいは内湾気味で、側面形は方形に近いが不整である。

次に、直径5mmから9mmまでの中型品（17・45・75・76・82・83）では、重量分布がほぼ3ヶ所に集中する。即ち、直径7.2mmから9mmで重量3.5gから5.5gまでの範囲、直径6mmから7mmで重量2gから3gまでの範囲、直径5mmから6mm未満で重量1.4g前後の範囲である。

色調は濃く不透明で、上下面は直線あるいは内湾し、側面形は隅のシャープな方形を呈するものが多い。気泡孔も、やや目立つものがある。

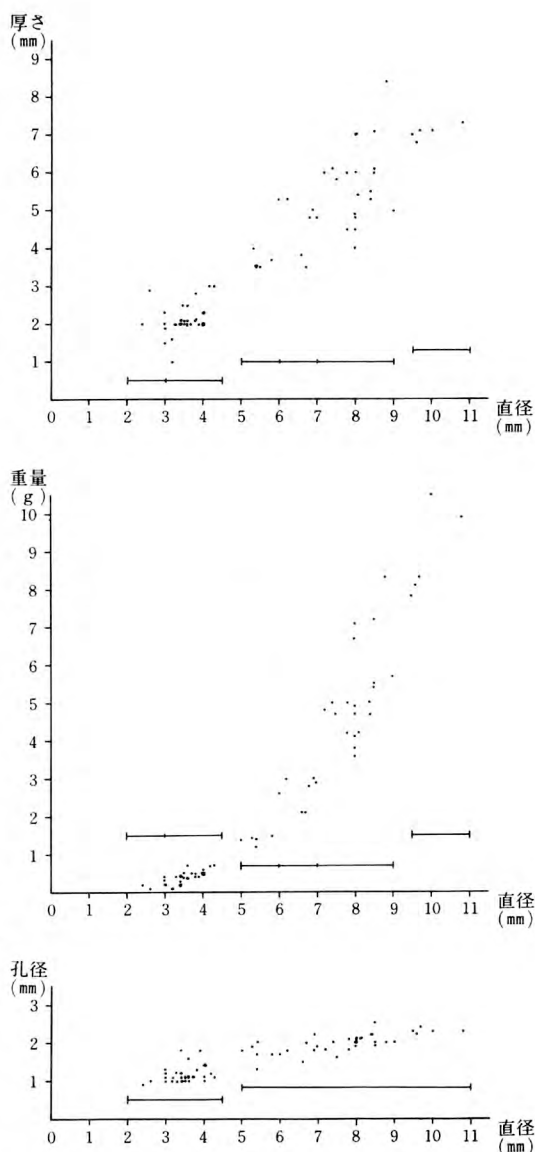
しかし、重量1.4g前後の小玉の中には、気泡が目立たず表面が滑らかで、透明感も強く、上下面が外湾し、側面形が丸みを帯びるものも含まれてくる。

最後に、直径4.5g以下の小型品（46・74・77・81・84）は、厚さ1.5mmから2.5mm前後、重量0.2gから0.5g前後の範囲に比較的偏っており、大・中型品との間に著しい較差を示している。重量に限って言えば、中型品で直径5mmから6mm未満を測る小玉の重量1.4g前後の、約1/2になっている。色調も大・中型品に比べて淡く透明感も強くなっている。上下面がやや外湾気味で、側面形は楕円形に近く全体に揃っており、極端な不整形は見られない。

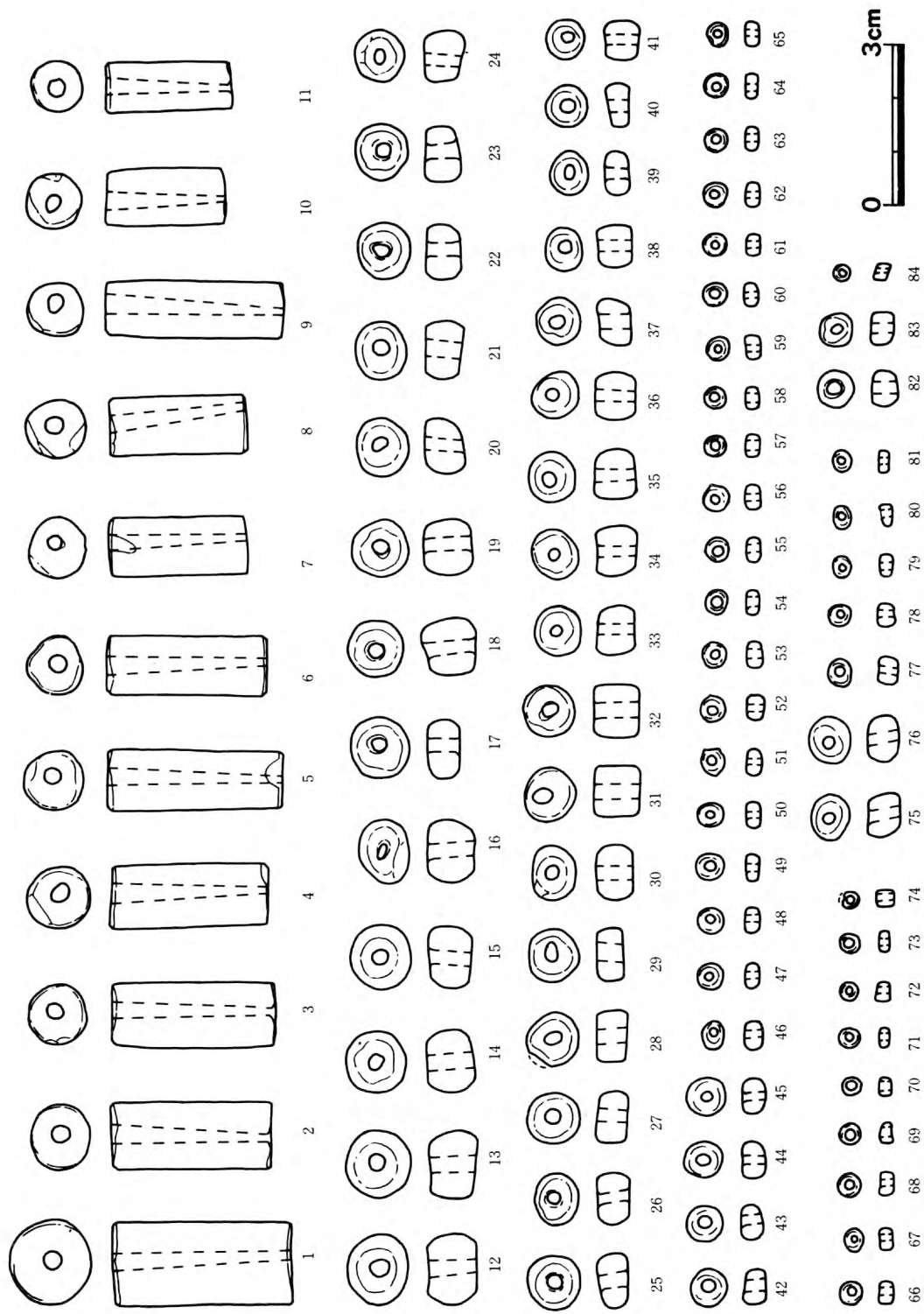
さらに、これらの中には、摘みあげたような小突起を残すものが数点見られる。

孔径に関しては、大・中型品で1.5mmから2.5mm、小型品で1.0mmから1.3mmといった比較的狭い範囲に集中しており、上述した法量の較差に伴った孔径の差、つまりは工具の相違が推定できる。

また、小玉中の気泡は、観察可能なもので、全て縦方向に走るのを確認しており、色調、法量差を越えた小玉製作技法における共通性が窺える。



第33図 ガラス製小玉法量分布図



第34图 主体部出土玉類美測図 (S=1/5)

第3表 管玉観察表

番号	色調	直径 (mm)		重量 (g)	備考	番号	色調	直径 (mm)		重量 (g)	備考	
		長さ (mm)	孔径 (mm)					長さ (mm)	孔径 (mm)			
1	濃深緑	12.8	26.9	79.5	片面穿孔	7	深緑	9.0	21.0	2.2	32.6	片面穿孔
2	深緑	10.1	24.0	42.7	"	8	"	8.9	20.8	1.3	29.7	"
3	"	10.1	24.2	38.2	"	9	"	8.8	18.1	1.0	24.5	"
4	"	9.9	23.8	41.2	"	10	"	8.6	26.8	1.1	37.2	"
5	"	9.0	26.0	38.6	"	11	濃深緑	7.8	19.0	1.0	18.9	"
6	"	9.0	24.0	35.6	"							

第4表 ガラス製小玉観察表

番号	色調	直径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	番号	色調	直径 (mm)	厚さ (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
13	"	10.0	7.1	2.3	10.5	"	50	"	4.0	2.0	1.1	0.5	"
14	"	9.7	7.1	2.4	8.3	"	51	"	4.0	2.0	1.0	0.5	"
15	"	9.6	6.8	2.2	8.1	"	52	"	3.8	2.8	1.0	0.4	"
16	"	9.5	7.0	2.3	7.8	楕円	53	"	4.0	2.3	1.4	0.5	"
17	"	9.0	5.0	2.0	5.7	縦	54	"	3.9	2.0	1.8	0.4	"
18	"	8.8	8.4	2.0	8.3	"	55	"	3.7	2.0	1.1	0.5	"
19	"	8.5	7.1	2.0	7.2	"	56	"	3.6	2.5	1.0	0.7	"
20	"	8.5	6.1	1.9	5.4	"	57	"	3.6	2.1	1.6	0.4	不透明
21	"	8.5	6.0	2.5	5.5	縦	58	"	3.4	2.1	1.8	0.4	"
22	"	8.4	5.3	2.2	5.0	"	59	"	3.8	2.1	1.3	0.5	"
23	"	8.4	5.5	2.4	4.7	"	60	"	3.6	2.0	1.1	0.4	"
24	"	8.0	6.0	2.0	4.9	"	61	"	3.3	2.0	1.2	0.4	"
25	"	8.0	4.8	2.1	4.1	"	62	"	3.5	2.1	1.0	0.5	"
26	"	8.0	4.9	2.0	3.6	楕円	63	"	3.4	2.0	1.2	0.4	"
27	"	8.0	4.5	2.1	4.7	縦	64	"	3.6	2.0	1.1	0.4	"
28	"	7.8	4.5	2.1	4.2	"	65	"	3.5	2.0	1.1	0.4	透明感あり
29	"	8.0	4.0	2.0	3.8	縦	66	"	3.4	2.2	1.2	0.4	"
30	暗紺	8.1	5.4	2.1	4.2	僅かに透明	67	"	3.3	2.0	1.0	0.4	"
31	濃紺	8.0	7.0	2.1	7.1	不透明	68	濃紺	3.4	2.0	1.0	0.3	不透明
32	"	8.0	7.0	1.9	6.7	"	69	明紺	3.0	1.9	1.2	0.2	透明感あり
33	"	7.5	5.8	1.6	4.7	縦	70	"	3.0	2.0	1.3	0.2	気泡縦方向
34	"	7.8	6.0	1.8	5.0	"	71	紺	3.0	1.5	1.1	0.3	"
35	"	7.4	6.1	2.0	5.0	縦	72	"	3.0	2.3	1.0	0.4	"
36	"	7.2	6.0	1.8	4.8	"	73	淡紺	3.2	1.0	1.1	0.1	"
37	明紺	6.9	5.0	2.2	3.0	縦	74	明紺	2.6	2.9	1.0	0.1	"
38	濃紺	6.2	5.3	1.8	3.0	僅かに透明	75	青緑	7.0	4.8	1.9	2.9	縦
39	"	6.6	3.8	1.5	2.1	"	76	"	6.8	4.8	1.8	2.8	"
40	紺	6.7	3.5	2.0	2.1	"	77	"	4.2	3.0	1.2	0.7	不透明
41	濃紺	6.0	5.3	1.7	2.6	不透明	78	"	3.5	2.5	1.1	0.4	透明感あり
42	"	5.4	3.5	2.0	1.4	"	79	"	3.4	2.0	1.1	0.2	縦
43	紺	5.4	3.5	1.7	1.2	"	80	"	3.4	2.0	1.0	0.2	"
44	淡紺	5.8	3.7	1.7	1.5	"	81	白濁	3.2	1.6	1.0	0.1	楕円
45	"	5.4	3.5	1.3	1.4	"	82	水色	5.3	4.0	1.9	1.4	不透明
46	濃紺	4.3	3.0	1.1	0.7	僅かに不透明	83	濃紫	5.0	3.5	1.8	1.4	"
47	紺	4.0	2.0	1.0	0.5	"	84	黄緑	2.4	2.0	0.9	0.2	"
48	"	4.0	2.3	1.1	0.6	"							

第5節 その他の遺構と遺物

今回の調査で、主体部以外で検出された遺構は、溝状遺構2条（1号溝・2号溝）、土坑2基（1号土坑・2号土坑）である。1号溝は、Aトレンチ南端で検出され、その他は、主体部調査終了後に、その下位の地山面精査で検出されたものである。

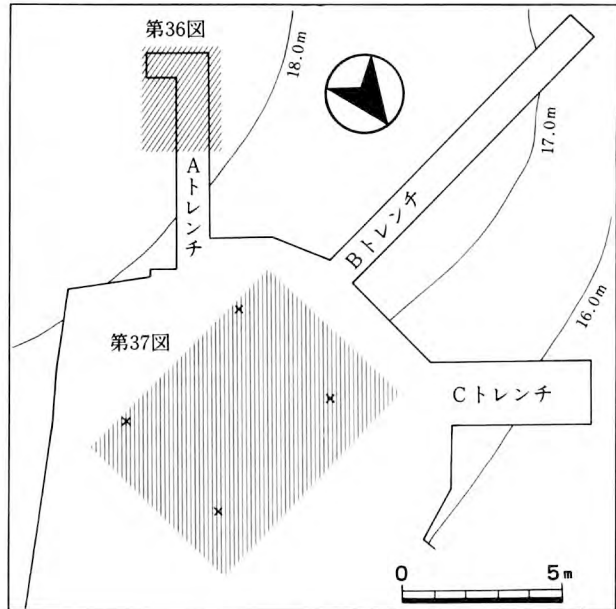
1. 1号溝（第36図）

本遺構は調査区南西側のAトレンチの南端部より検出された。遺構掘り下げの段階で、遺物の集中が南隅部にみられたため、第36図のように東側に調査区を拡張した。

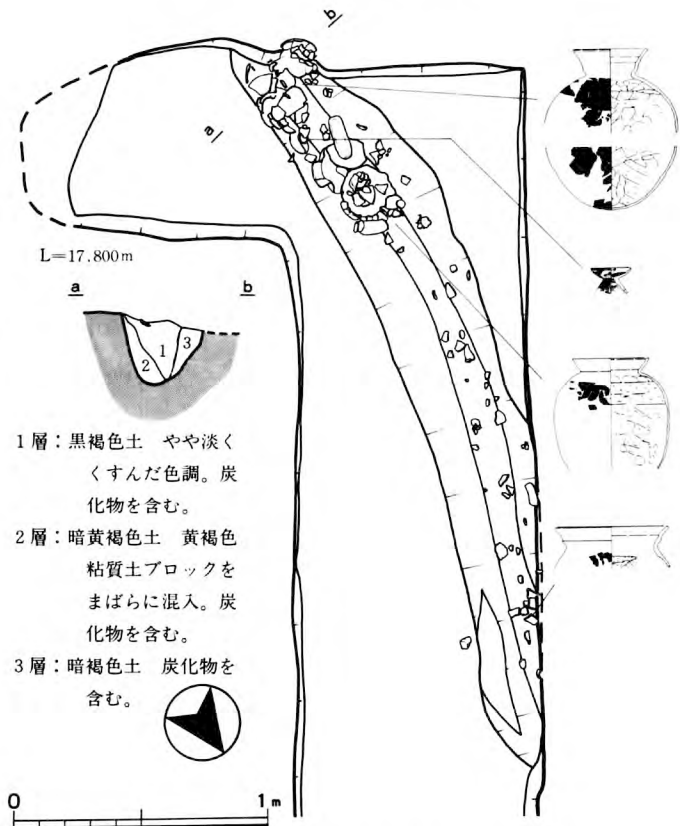
この溝は、尾根の傾斜に対してやや斜めに横切りながら、方向をほぼ南北から僅かに東へ屈曲させて裾部へ走る。溝底面は現況面とほぼ同様の傾斜で裾部に向かって低くなっていく。

規模は、幅が肩部31～46cm、底部10～13cmで、深さ30～46cmを測る。断面は逆台形状で、溝本体が東方向へ屈曲する辺りから底面の西側が低くなり、いわゆる逆バンク状を呈する。

覆土は、炭化物を少量含む淡黒褐色・暗褐色土を主体とした自然堆積を示しているが、実測位置が土器集中部にかかったため、整然とした堆積を把握できていない。



第35図 挿図区分図



L=17.800m

- 1層：黒褐色土 やや淡くすんだ色調。炭化物を含む。
- 2層：暗黄褐色土 黄褐色粘質土ブロックをまばらに混入。炭化物を含む。
- 3層：暗褐色土 炭化物を含む。

第36図 1号溝平面図（S=1/30）

出土遺物（第39図7・8、第40図）

遺物はすべて土師器で、底面よりやや浮いた状態で出土している南端部からは、甕（第39図8）と壺（第40図10）の破片を1個体分づつまとまったかたちで検出した。各々出土状況から、ほぼ完形で投棄されたものと推測され、本溝に伴う遺物である。器種の把握できる出土遺物の内訳は、破片を含め、甕6点、壺3点、器台1点、高坏1点である。

10の壺は、口径16.0cmを測る。口縁部は下部を僅かに屈曲させて有段口縁状をなす。口唇部は面取りによって肥厚している。体部は胴部最大径を中位よりやや上方にもち、肩部の横方向のハケ調整、下半部ではハケ調整ののち部分的にナデがみられる。器肉は胴部中央から底部にかけて薄く仕上げられている。淡赤灰色を呈し、胎土中に3mm以下の砂粒を非常に多く含む。外表面下半にススの付着がみられる。

8の甕は、推定口径17.0cmを測る。口縁部では、口唇部を肥厚させ、内傾した端面をもつ。体部外面には肩部にヨコハケ調整、内面は肩部より下半を単位が確認できない程丁寧な仕上げのへら削り調整がなされる。器肉は非常に薄いといった、「布留式」甕形土器独特の斉一的な手法を持つ。淡黄灰褐色を呈し、胎土は3mm以下の砂粒を多く含む。外表面全体、特に肩部より下半に多量のススが付着している。

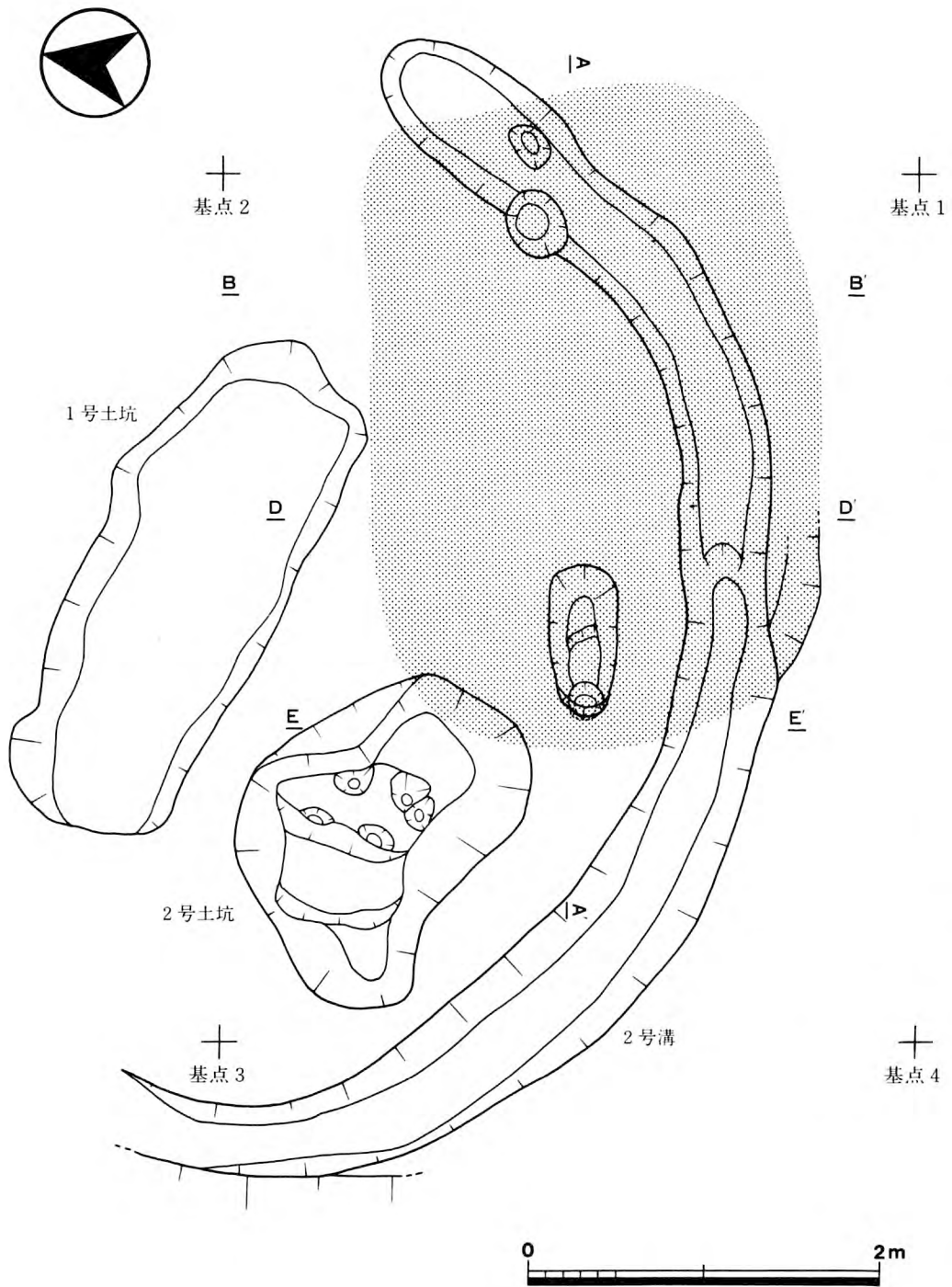
9は、外反して開く口縁部下端に稜をもつ「山陰系」甕形土器で、推定口径24.6cmを測る。口唇部は面取りがなされ、体部外面は、肩部にハケ調整、内面は肩部以下がヨコナデのちへら削り調整。器肉は肩部から急に薄くなる。淡灰褐色を呈し、胎土中に1mm以下の砂粒を多く含む。

7は器台形土器で、受部径8.8cm、現存器高5.6cmを測る。受部は内湾ぎみに開き、口縁端部を丸くおさめる。脚部は受部底より直線的に開き、3個の円形透かしがある。内外面ともへら磨き調整が施されている。淡橙灰色を呈し、胎土は1mm以下の白色及び透明の微砂粒を含む。

以上、本溝出土の土師器については、古墳時代前期（V型式、漆9・10群）の所産で、溝の機能した時期もほぼその時期と推定される。

2. 2号溝（第37図・第26図）

主体部に重複して検出されたもので、北側を弦とする弓形のプランを呈する。東端部は丸く収束するが、立ち上がりは低く弱い。対する西端部は、片側の壁が古墳周溝に切られるとともに、深さを減じて途切れる。ほぼ中央部の底面に段差が形成されており、東半部と、一段低い西半部とに分けられる。西半部は、幅約50～70cm、深さは東寄りで約35cmを測り、西に向かって斜面の傾斜に対応しながら立ち上がり高を減じていく。東半部の大半は、主体部掘り方に重複しているため、本来の属性を示していないと思われ、幅約50cm、深さ約15cmを測って規模の縮小を示す。底面の傾斜は、東半部ではほぼ平坦、西半部では西に向かって僅かずつレベルが下がっていく。断面は逆台形を示すが、底面の状態はフラットではなく形状の均質さを欠く。土層は、すべて主体部セクションとの連続で把握している（第26図）。黒褐色土を主体としており、色調の点では主体部床下埋土の9層等とは区別できる。



第37图 主体部低位遺構全体図 (S = 1/40)

遺物は、土師器の細片が僅かに出土したのみで、時期・性格は不明である。1号土坑を主体部とした周溝を思わせる位置関係を示している。一応、粘土槨に先行する遺構と判断しており、粘土槨の暗渠施設との捉え方は保留としておきたい。

3. 1号土坑（第38図・第26図）

主体部のタチワリ延長上で発見した。主軸はN-76°-Wをさし、不整な隅丸長方形を呈する。壁の立ち上がり高は、南辺で約13cm、北辺で約3～6cmを測り、掘り込み自体は浅い。底面は、ほぼ平坦で、中央部が僅かに凹んで緩い皿状を成す程度である。

本土坑の性格については多くの問題点を含んでいる。時間的前後関係では、第26図の土層断面でみるように、主体部に先行する遺構として把握している。しかし、断面C-C'でみるⅢ層と①層の関係、D-D'でみる8層と①層の関係は、その分離が必ずしも明確ではない。ともに黒～暗褐色を呈し、切り合い関係の把握は、あくまでも現地での主観にもとづく便宜的区分であった。

最も大きな問題は、東半部の礫集中及び粘土塊の性格付けである。礫総数668個で、その構成は、長軸3cm以下が332個（50%）、3～6cmが212個（32%）、6～9cmが82個（12%）、9～12cmが30個（4.5%）、12cm以上が12個（1.5%）である。つまり、小さな礫から大きな礫へ急激にその量を減じていく傾向が看取される。これは、主体部の礫床構成礫が9cm以上の礫を主体として、小さな礫へ量を減じていく在り方と全く対称的である。両者を組み合わせることで、各礫の量比がほぼ平均化するようである。これを、礫層内における礫構成に合致する数値と仮定すれば、自ずと、礫層からの礫の一括採取→主体部構築時の礫床使用礫の選択→不要礫の一括廃棄、という過程が想定されてくる。即ち、主体部構築との共時性を認めるものである。

また、中の一つに赤色顔料が付着しているものがあり、これらの礫が主体部のものと非常に関連が深いと考えることを支持している。

次に、粘土塊であるが、礫集中のほぼ中央部にあって、約15～20cmの厚さを示す。粘土は粘土槨に用いられているものと同質である。粘土とともに80個の礫が混在していた。その構成比は、先の分類序列に従えば、5%・25%・30%・27.5%・12.5%となり、全体の傾向に反している。つまり、より主体部の礫構成に近いとも言える。このことから、想像を逞しくすれば、この粘土塊も粘土槨構築時の残余物で、含まれる礫は、礫床形成の際に最終的に残ったものと考えることができる。

逆に、これを一つの遺構と判断すれば、性格は全く不明となる。2号溝を周溝とする古墳あるいは円形周溝墓とも考えられるが、このような例を知らない。礫は、床面より浮いた状態で検出されていることから、礫と本遺構を分離して考えるべきなのだろうか。

ここでは結論を得ることはできないが、主体部との切り合い関係の把握が誤りであったとして、前者の可能性を有力視しておきたいと思う。

本遺構に伴う遺物は検出されていない。

4. 2号土坑（第37図・第26図）

主体部の北西コーナーに接する位置の下位で検出された。1.8×1.3mの不整な楕円形を呈し、西側の一部が張り出している。断面は、基本的には埴形となるが、底面は、風倒木痕に類似した複雑な形状を成す。最深部の、斜面上方側肩部との比高差は約35cmを測る。斜面下方側は、傾斜に対応して立ち上がりも浅くなる。覆土は、黒褐色土を主体とし（第26図）、遺物を多く含んでいるが、性格は不明である。

出土遺物（第39図4・5）

遺物は、パンケースにして半分近く出土しており、規模からしては比較的多い。甕胴部片が主体で、個体単位での投棄は認められず、ほとんど接合は成し得ていない。図化できたのは口縁部片の2点のみで、すべて1/5以下の残存率からの復元実測である。

共に、有段の口縁部に擬凹線を施す甕形土器である。4は、口縁部が直立し、厚さを減ずることなく口唇部をやや平らにおさめる。下端部は比較的鋭く突出ぎみとなる。5は、直立して弱く外反し、口唇部を丸くおさめる。両者、内面は、頸部に削り残しによる面を有し、口縁部の指頭圧痕は観察されていない。実測不可能な細片で、指頭圧痕を持つものも若干認められる。時期は、月影式期に該当しよう。

5. その他の遺物（第39図1～3・6）

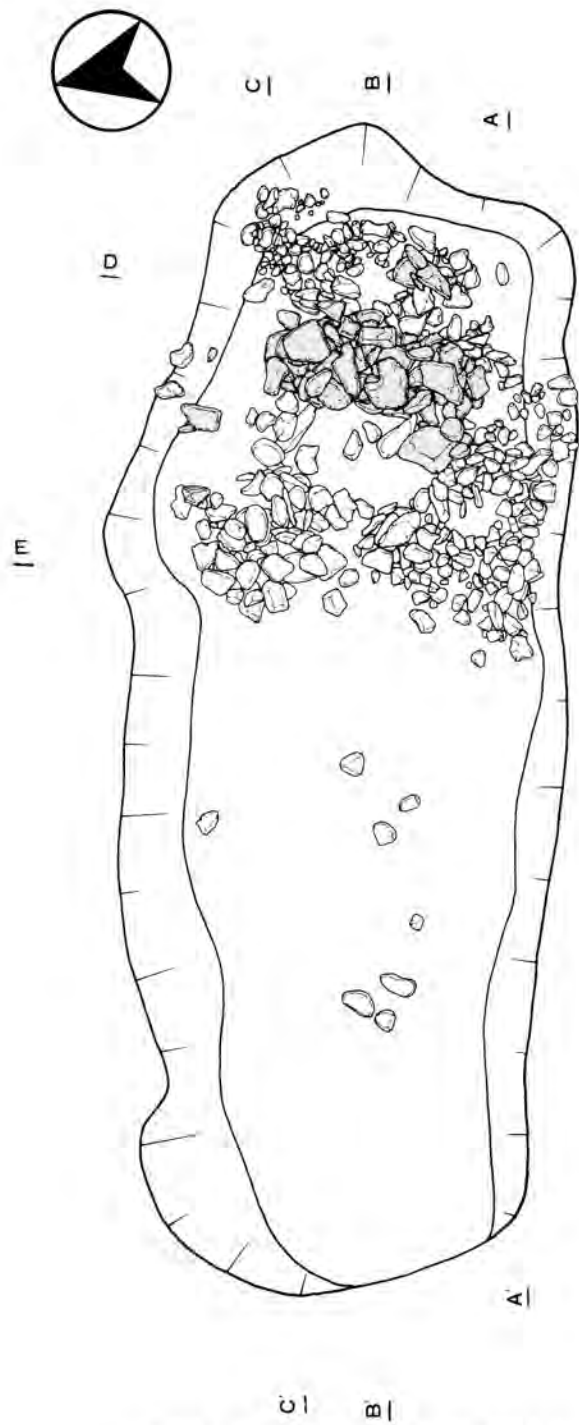
周溝からは、土師器が、極めて細かく散在して検出されている。ほとんどが2号土坑併行時期のもので、図化できたのは口縁部3点だけである。

1は、強く外傾した有段口縁を持つ壺形土器と思われるが、頸部にかけては判然としない。口縁部に縦方向に浅い線刻が並列し、下端の有段部には、ハケ状工具による刻み目を加飾する。内面は、細かいヘラミガキによって丁寧仕上げられている。2は、直立する有段の口縁部に擬凹線を施す甕形土器。4と異なり、口唇部にかけて急激に厚さを減じている。下端はやや丸みをもち、頸部の屈曲も比較的弱い。3は、直立して弱く外反する有段口縁を持つ壺形土器。口縁部への加飾はなく、やや長めの頸部を持つ。頸部内面に横方向のハケ目が観察される。

6は、主体部覆土に混在していた器台である。1号溝に併行するものであろう。

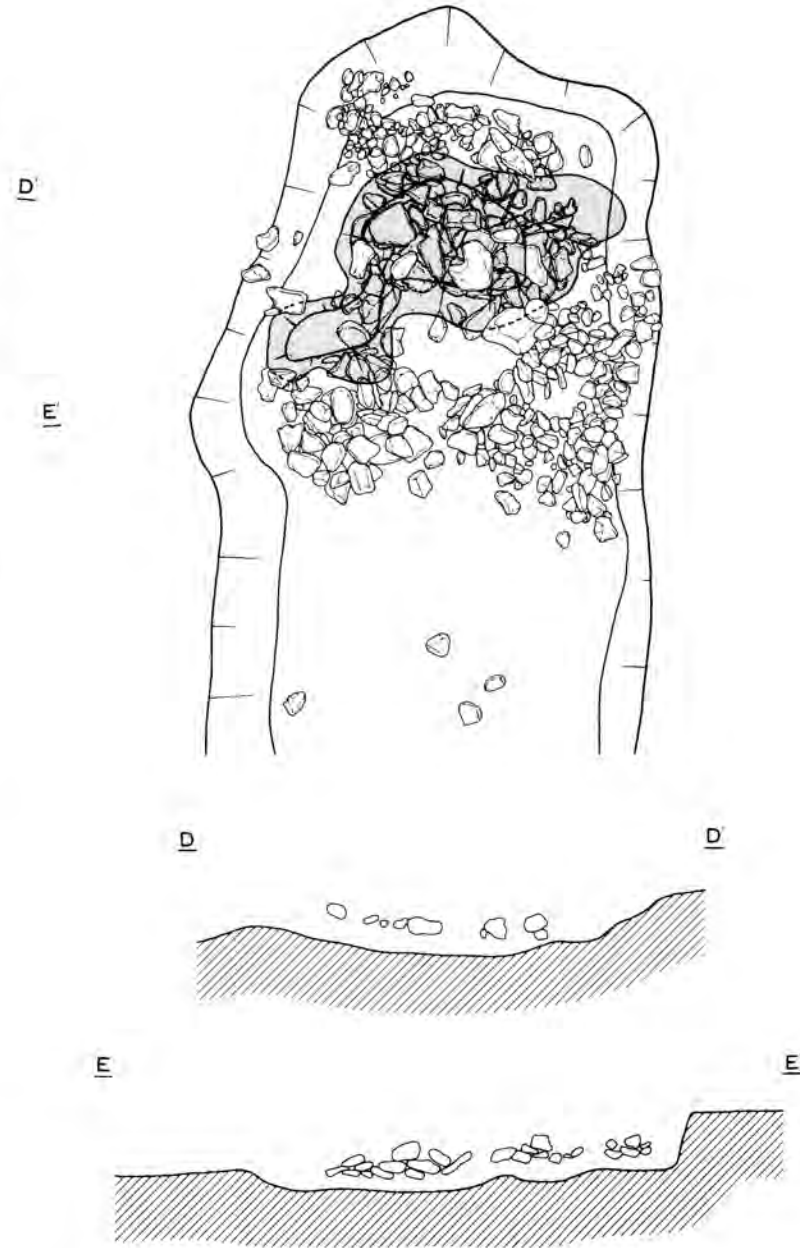
第5表 2号土坑ほか出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	成 形 及 び 調 整	色 調	胎土	焼成	備 考
周 溝	1	口径 18.8 残存高 3.4	口縁部：外/ヨコナデ後、タテ方向線刻。下端にハケ状工具によるキザミ・内/ヘラミガキ	外/淡褐色 内/黒色	微砂 粒多	良	口縁残存率 $\frac{1}{10}$ から復元実測
	2	口径 16.4 残存高 5.3	口縁部：外/擬凹線・内/ヨコナデ 頸部：外/ヨコナデ・内/ヘラケズリ	淡赤褐色 ～淡灰褐色	微砂 粒多	良	" $\frac{1}{8}$
	3	口径 14.4 残存高 6.1	口縁部：内外とも不明 頸部：不明。内面の一部に横方向のハケ目を確認。	外/白色・ 淡赤色 内/淡灰褐色	微砂 粒多	やや 不良	" $\frac{1}{4}$
2号 土坑	4	口径 20.0 残存高 4.1	口縁部：外/擬凹線・内/ヨコナデ 頸部：外/ヨコナデ・内/ヘラケズリ。屈曲部にケズリ残しによる面有り	淡灰褐色 ～白色	"	やや 良	" $\frac{1}{8}$
	5	口径 15.2 残存高 4.1	口縁部：外/擬凹線・内/ヨコナデ 頸部：外/ヨコナデ。一部にハケ痕・内/ヘラケズリか。屈曲部に面有り	"	"	"	" $\frac{1}{8}$
主体 部	6	口径 8.0 残存高 4.5	坯脚部：外/ヘラミガキ・内/ヘラミガキ 接合痕明瞭	灰白色 ～淡灰褐色	"	"	

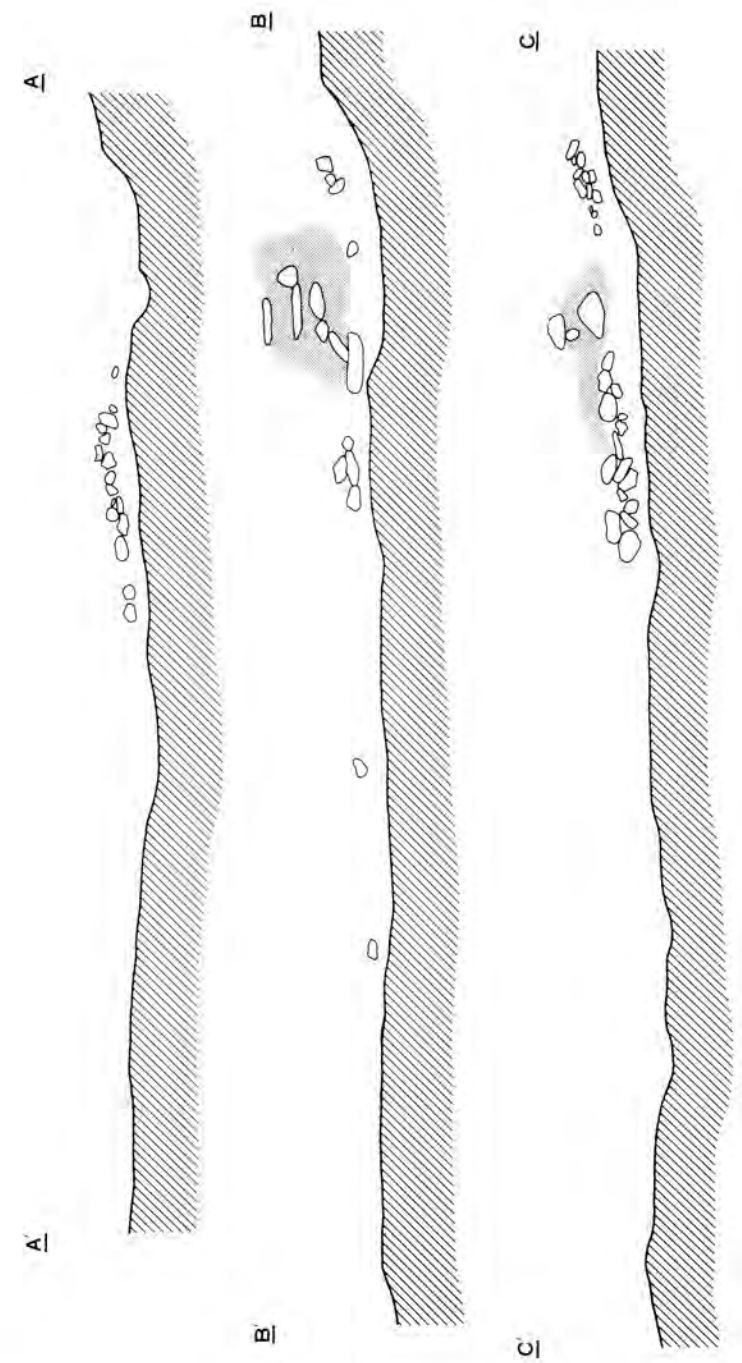


網掛け礫は、粘土塊上面または内部のもの。

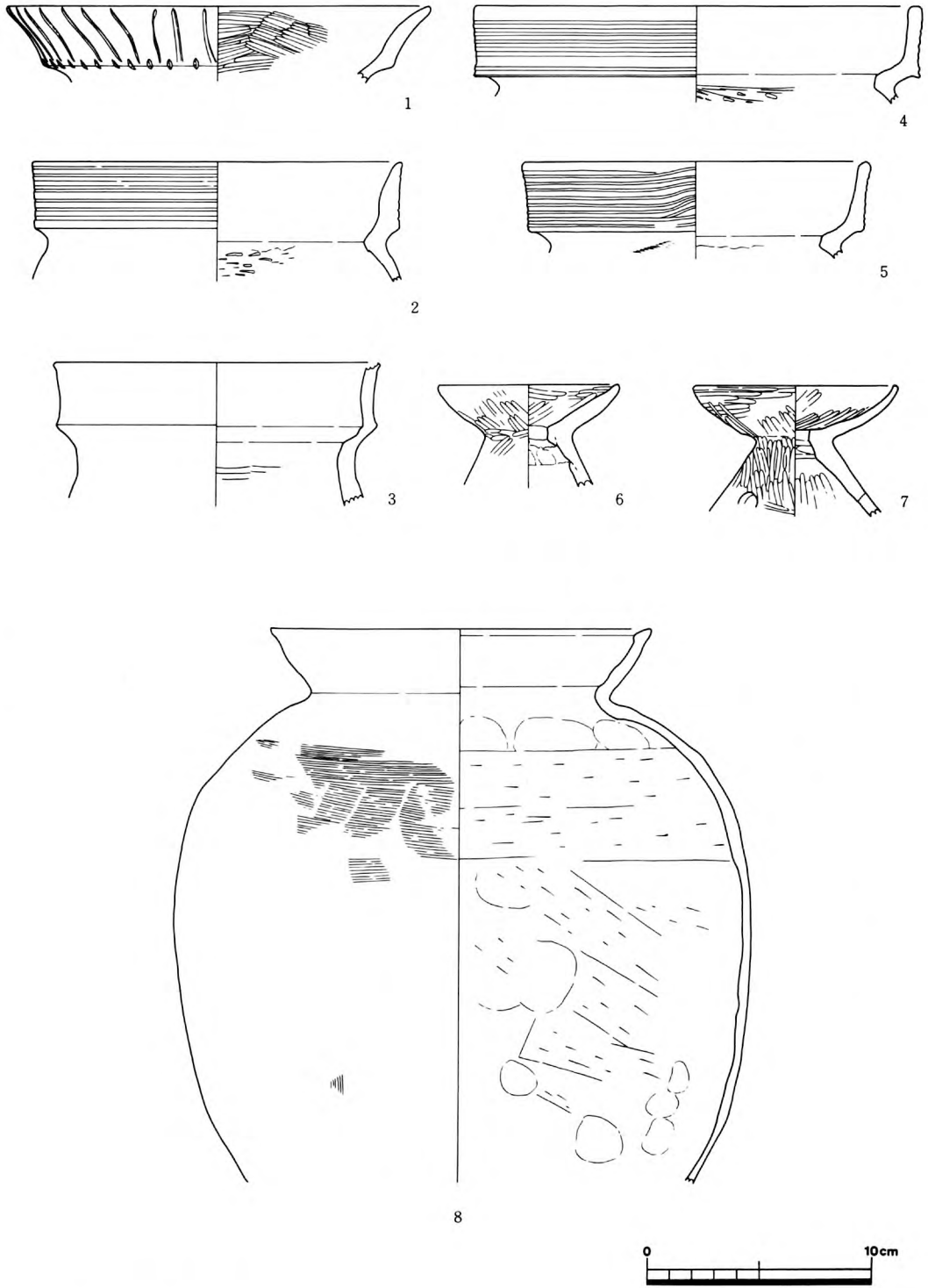
粘土塊範囲平面図



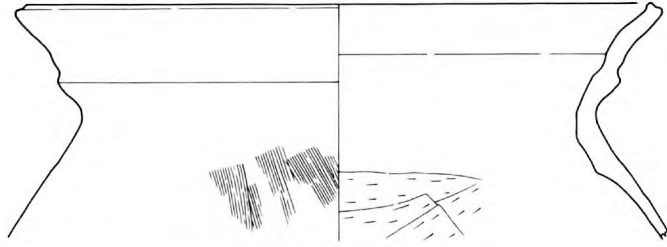
0 1m Level=16.900m



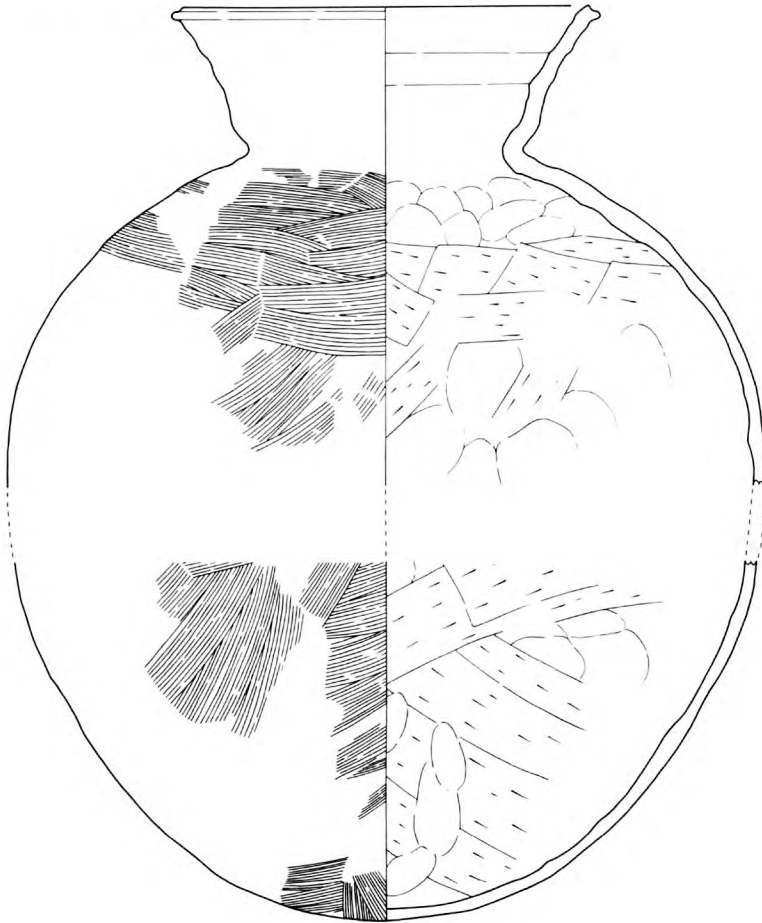
第38図 1号土坑平面・断面図 (S=1/20)



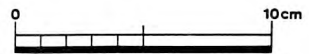
第39図 その他の遺構出土遺物実測図 (S=1/3)



9



10



第40図 その他の遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

第6節 小 結

後山明神3号墳の発掘調査によって、南加賀地域特有の埋葬施設といわれる「箱形粘土槨」に新たな資料を加えることになった。箱形粘土槨の調査例がいずれも古いため、それ自体に対する位置付けも、固定化してしまっている感がある。今回の調査で得られた情報は、構造等の諸問題を一挙に解決するものではなかったが、新たな視点での問題意識の抽出に、大いに役立つものと評価している。以下に、成果を簡単に整理しておく。

成果の第一点目は、主体部主軸上の両端粘土壁の下位でピットを検出したことである。このピットは、粘土槨の構造をささえる主柱（木芯）と考えてよいものであろう。箱形粘土槨の構造に関しては、その形態の属性から、畿内とその周辺部に分布する「横穴式木室」との関連性で、再考を求める動きがある（北野1983）。このことから、まさに時宜にかなった成果を復ることができたと言える。推定される構造は、両端に2本の主柱を持ち、それが棟持柱となって、合掌形の木質の構造体を形成したのち、粘土で被覆するものである。つまり、明らかに「室」を構築するものといえる。ただ、その正当な評価については、さらに、資料の増加を持たねばならない。

第二点目としては、主体部内の副葬品の配置に特殊性を見いだし得たことである。土器分布は東西の群に分離され、組成的に対峙する関係を示している。そして、时期的な差異を認定し難いという内容を示しながらも、両群には、明らかに供給源（製作集団）の相違が指摘されるのである。副葬品供献の在り方を考えるうえで、様々な推測を引き起こさせる。

以上の2点については、第4章の考察で、さらに検討しておきたい。

第三点目は、これも多分に推測を含むものであるが、1号土坑について、箱形粘土槨の構築と有機的関連性が想像されることである。1号土坑は、多量の小円礫と白色粘土塊をもつ特殊な遺構で、その類例を今のところ見つけ出していない。現地では、土層観察等に疑問点を残したままで処理せざるをえなかった。しかし、内容の分析によって、それが箱形粘土槨の製作過程で生じた、礫及び粘土の残余物を集積したものとする考えが有力となった。今回、付近の礫層中の礫構成との対比を行なえなかったのは残念であるが、蓋然性は高いと予測している。

この3点が主体部調査における主たる成果と考えている。また、遺存状態はさほど良好とは言えず、属性の抽出作業は満足のいくものではなかったが、そういった中でも、知り得る情報はできる限り詳細に把握したつもりである。さらに良好な資料の発見に期待したい。

本墳の位置付けについてであるが、年代は、ほぼ6世紀前葉に求められよう。須恵器の編年では、MT15型式（田辺1966）あるいはII-1段階（中村1978）に相当する。これは、従来発見されている箱形粘土槨の年代と矛盾するものではない。むしろ、ほぼ例外なく該期の遺物を伴っており、それを遡るものは今のところ無い。そしてこれは、能美と江沼の両地域に共通した事象であり、ほぼ同時に突如として南加賀で採用された葬制ということが出来る。この葬制の成立事情

については、加賀地域全体の古墳時代の流れのなかで整理して考える必要がある。資料の蓄積状況は未だ不十分であるが、この点についても、後述の考察で若干触れておきたい。

埴田後山古墳群では、これで2基の箱形粘土槨が発見されたことになる。後山無常堂古墳については、第1主体部と墳丘の構築が5世紀中葉に求められていることから、8基以上の存在が想定される当古墳群全体を、必ずしも、6世紀代群集墳と位置付けることはできない。後山無常堂古墳と後山明神2号墳は、河田山古墳群とほぼ並行関係にありながら、それよりは優位に立つものとして隔絶された立地を示しており、さらに、両者は有機的な関連を持っていたものと評価できる。しかし、後山明神3号墳に並行する時期の古墳の展開は、当丘陵で5～6基が予想されるものの、河田山古墳群では確認されていない。このあたりの情勢の変化や、周辺の6世紀代古墳の立地と内容の解明が、箱形粘土槨の性格づけを明確にするものと思われる。

註

- (1)昭和29年に発見された、後山明神2号墳は、直刀、短甲、カブト、環鈴をもつものと伝えられているが、その実態は不明である。これについては、5世紀代までさかのぼって、後山無常堂古墳により近い築造時期が与えられる可能性が強い。後山明神1号墳については、付篇に掲載したが、6世紀前半代のものであり、第22図のA～C付近の散布土器も当該期のものが主体を占める。
- (2)北野博司氏は、1983年に発表した論文「箱形粘土槨の再検討と横穴式木室との関連性について」において、新たな視点で問題点を抽出し、槨としての構造に疑問をなげかけた。
- (3)この主体部内側の(2)層は、天井部の崩落粘土と解釈した方が、次に述べるP1との関係では都合が良い。
- (4)註(3)に同じ
- (5)赤褐色を呈する焼土状の粒子(粒径0.5～1mm)の含有が、西群出土土師器の胎土との大きな違いである。

参考文献

- 上野与一 1965 「古墳文化時代」 『小松市史』(4)風土・民俗篇 小松市
- 北野博司 1983 「箱形粘土槨の再検討と横穴式木室との関連性について」 『北陸の考古学』石川考古学研究会 会誌第26号
- 向日市教育委員会 1988 『物集女車塚』向日市埋蔵文化財調査報告書 第23集 向日市教育委員会
- 大場磐雄 1963 『加賀市片山津玉造遺跡の研究』加賀市文化財紀要 第1集 加賀市教育委員会
- 田嶋明人 1986 「Ⅳ考察—漆町遺跡出土土器の編年の考察—」 『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ
- 中村 浩 1978 「和泉陶邑窯の時期編年」 『陶邑』Ⅲ 大阪府教育委員会

第Ⅳ章 考 察

一 所謂箱形粘土槨について

1. はじめに

箱形粘土槨が初めて発見されたのは、1949年（昭和24年）の小松高等学校地歴班による念仏林古墳発掘調査においてであった。縄文時代遺跡の研究を主眼として着手した調査が、偶然の主体部発見により、古墳調査へと切り替えられたものである。この報告文段階では、特殊な構造をもつ主体部については充分認識されておらず、単に「粘土棺(槨)」と称されただけであった。しかし、この報告発表後、特異な例として注目されるに至った経緯については、「小松市念仏林遺跡調査後記」として作田氏が記述している（作田1950）。念仏林古墳の調査指導にあたった上野与一氏は、以来、この特異な埋葬主体の探究に精力的に取り組むことになる。奇しくも昭和24年から昭和30年までの6年間に矢田借屋古墳群・末寺山7号墳・蓑輪塚古墳等の調査が相次ぎ、資料は短期間に集積された。

この主体部の名称について一つの帰結を得たのは、念仏林古墳発見の翌年に調査された矢田借屋2・4号墳の発掘調査報告（小松高1951）においてであった。ここでは、従来の舟形の粘土槨とは区別すべきとして、箱形石棺を念頭におきながら、「箱形粘土棺」と呼称したのである。以後、氏は一貫してこの用語を使用している。一方、下出積与氏は、棺を粘土で被覆するものであるとし、「粘土槨」と称するのが妥当としている（下出1960）。この「箱形粘土棺(槨)」は、資料の集積に伴い、南加賀における後期古墳特有の埋葬施設として、様々な視点で論議された。この過程については、北野博司氏によって簡潔に要約されている（北野1983）。特有のものとなれながらも、その発見は上野氏の精力的な探求期間で終始し、資料の継起的な増加は早い段階で途絶えてしまった。構造自体の研究がなござりとなり、呼称に対する論議も活発化し得なかった原因の一端がここにある。しかし一方で、一定の資料集成のもと南加賀地方の古墳時代史のなかで整理し、通史的に脈絡を与える作業の進展があった（吉岡1968、中司1977、田島他 1978）。そして、これらの研究が、現在も尚最も新しい問題提起として評価されているのが実情である。

1983年、北野博司氏は、畿内とその周辺部を中心に分布する横穴式木室との構造上の類似点に着目し、全く新しい観点で箱形粘土槨の再検討を行った（北野 前掲）。箱形粘土槨の調査例がいずれも古いため、結論を得るものではないが、出現の契機に対して極めて重要な問題を提起した。構造解明の必要性が浮き彫りにされたのである。

今回報告の箱形粘土槨2例は、実にほぼ30年の空白を経た新資料ということになる。しかしながら、歴史的評価については数量的に、構造上の問題については遺存状態の点で、甚だ不十分な状況であることはいなめず、すでに提示されている多くの重要な問題点については、さらに保留

とすべきものが多いと思われる。ただ、本報告が、先にも触れたように、長い空白期間を置いての重要な資料を提供したものであり、北野氏の新たな問題提起を受けた一つの段階として、再度問題点に触れておく必要があると考える。ここでは、箱形粘土槨にからむ問題点を整理し、その歴史的 position を検討してゆきたい。

2. 箱形粘土槨の特性

(1) 構造に関する諸問題

箱形粘土槨の構造については、北野氏の論文（北野 前掲）において、古い資料ながらも、的確にその知りうる諸属性についてまとめられている。諸例の集成として、小松市念仏林古墳（小松高1950）、同市矢田借屋2・4号墳（小松高1951）、同市蕨輪塚古墳（小松実高1954）、加賀市二子塚37号墳（大聖寺高1950）、同市分校山王1号墳（湯尻・梶1978）、寺井町末寺山7号墳（寺井町公民館1959）の7例が列挙された。本報告書の埴田無常堂古墳と後山明神3号墳を加えることによって、都合9例の資料を得たことになる。以下に、北野氏の作成した「箱形粘土槨墳一覧表」に新資料の後山明神3号墳の属性を加えて引用してみた。

第6表 箱形粘土槨墳一覧表（北野1983に一部追記）

番号	古墳名	所在地	墳 丘		箱形粘土槨			副葬須恵器の時期	群 構 成
			形	規 模 (m)	規 模 (m、内法)	側壁	礎床		
1	念 仏 林	小松市松生町	円	径約10 高—	2.7×2.2	約40°	有	6C前~6C後	複数(上野1952)
2	矢田借屋2号	小松市矢田町	円	径9×6.35 高2.02	3.6×2.0	直立?	有	6C前?	8 基
3	矢田借屋4号	"	円	径13×9.7 高3.15	3.2×1.6	直立	無	6C前~6C中	"
4	蕨 輪 塚	小松市島町	前方後円	全長約40、後円径約20、同高4.5	2.8×2.3	約60°	有	6C前~6C後	単独?
5	二子塚37号	加賀市森町	円	径約12 高1.5	— ×1.7	約40°	有	6C後	複数(大聖寺高校1950)
6	分校山王1号	加賀市分校町	円	径 15 高2.75	(3×2)	内傾	有	6C中~6C後	2 基
7	末寺山7号	寺井町末寺	円	径 7 高1.2	2.2×1.5	内傾	有	6C前~6C後	2~3 基
8	後山無常堂	小松市埴田町	円	径23.5 高1.5	2.9×1.9	約40°	有	—	5~6 基
9	後山明神3号	"	円	径11.5 高—	2.7×1.8	約30°	有	6C前半	

(無常堂の計測値は一部修正。また、「埴田無常堂」を「後山無常堂」に名称改変)

表で見ると、箱形粘土槨の規模としては、本報告の2例は共に、殆ど同じ計測値を示し、さらに、念仏林古墳と蕨輪塚古墳に近似するものと言える。北野氏の分類に従えば、側壁が内傾して方形に近いプランとなるII-a類⁽¹⁾に加えられる。形態の諸属性に関しては、特に異質な例を追加したものではないことが分かる。むしろ問題は、北野氏が論の主眼とする横穴式木室との関連性で最も必要とされた、構造上の属性の抽出にある。

「槨」か「室」か

箱形粘土槨がどのように構築され、どのような機能を果たしていたかは、名称の再考にかかわる重要な問題である。平面プランとその規模、及び内傾する側壁の断面形などの点から、それが「粘土槨と同様な構築法を想定するわけにはいかない」ことは明らかである。この構築法に関して、後山明神3号墳の調査で極めて重要な施設が検出された。主体部としての完掘段階では注意不足から発見できなかったが、主体部下位面の調査によって、柱穴状のピット2個がそれぞれ相対する短辺の粘土壁に重複し、さらに主軸上に合致する位置で検出されたのである。主体部下位には古墳築造以前の遺構が存在しているが、ピットとの関係で把握が可能なものではなく、調査時の所見からも、主体部に付属する遺構と認定すべきものである。このピットが、構造上の役割を担っていたものと判断すると、やはり横穴式木室（森下1984）や横穴式木芯粘土室（水野1966）等と呼ばれているものに強い関連性を見いださざるを得ない。特に、北野氏による木室の再分類で、「側壁が内傾し、玄室部断面が三角形となる合掌形構造」で「墓室中軸上に棟持柱となる主柱を2本」有し、「玄室指数が1.0~1.6」となるII-A-a類に包括されるものである。ただ本例では、仏山1号墳（照岡1973）で確認されたような側壁の骨組みをなす木柱痕は検出されていない。しかしながら、本墳粘土槨の西半部南壁際で検出した蓋坏群の出土状態を綿密に観察すると、遺物の傾き及び破碎状態が、側壁の内傾度と合致した面的加圧の結果を示している観がある。このことは、板材を棟木に立て掛ける構造を想起させる。本例とは形態が異なるが、瓦屋西カマド塚（八木1975）では、板材の多用が確認されており、木室の構築法自体にもいくつかのバリエーションが推定されている。即ち箱形粘土槨は、棺を直接被覆する施設、あるいは粘土のみによって構築される施設ではなく、なんらかの骨組みに粘土がささえられると思われる点に、横穴式木室との構造上の類似点が指摘できるのである。

ところで、横穴式木室の呼称についてであるが、類縁性をもって統括されるものの、細部の構造や諸属性の相違から、決して統一はされていない。骨組みの相違以外に、火化の有無あるいは粘土使用の有無といった非常に重要な点においても、差異が見いだされるのである。それでも、これらが同一の机上で論じられる大きな理由は、その大部分が玄室と呼ぶに十分な羨道または入り口部を有する点にある。北野氏もまず、箱形粘土槨を横穴系の墓制であると位置付けたうえで論を展開している。これは、横穴系の墓制ではむしろ一般的な、追葬の可能性を指摘したことによるものであり、その根拠となったのは次の3点にある。

- ①いずれも、同一埋葬施設内に複数の型式にわたる須恵器が検出されている。
- ②新古2型式が別の群を形成（念仏林古墳・矢田借屋4号墳）したり、あるいは一ヶ所に集中して「かたづけ」の痕跡を示す（矢田借屋4号墳・養輪塚古墳）。
- ③一方の短辺近くの床面で、礫床が途切れたり、一段低くなった例（念仏林古墳・矢田借屋2号墳）があり、横口部の存在を想定させるものがある。

ここでは、構造に関する③について、今回報告の2例をもとに検討してみたい。

後山明神3号墳では、一部主体部にまで攪乱が及んでいるため、不明な点も多い。しかし、あえて横口部の存在を想定して諸属性を解析すると、それを支持するものとして、次のようなことが揚げられる。まず、礫床であるが、西壁側において長さ約70cmにわたって空白部が形成されている。横穴式木室で、入り口に直接付随する現象として評価できる同様例は、京都府中坂7号墳（末本・平良1972）や静岡県北山2号墳（柴田1987）等（第44図）に求めることができる。特に北山2号墳では、それを前室とする考えを示している。他に、礫床の有無が墓室の中軸線を境として左右に分割される例も静岡県権現山3号墳（柴田1980）（第44図）を代表として時折見受けられるが、これは、棺を安置する位置区分であり、性格は異なる。従って後山明神3号墳の場合は、類例を参考とするかぎり、少なくとも墓室の前後（奥と手前）の区別は存していたものと見るべきである。即ち、③の根拠に新たな資料を加えたものと言えよう。

次に、入り口部の存在を首肯させるためには、さらに、玄門の閉塞を示す痕跡の確認が必要である。この点に関しては、西壁の粘土層の状況から、その形成過程について、他の粘土壁とはやや異なる様相を呈するという観察結果を得ている（第Ⅲ章第3節1）。これを有力視すれば、粘土による封鎖として想定することも可能である。それでもやはり状況証拠としては、未だ不十分であると言わざるを得ない。

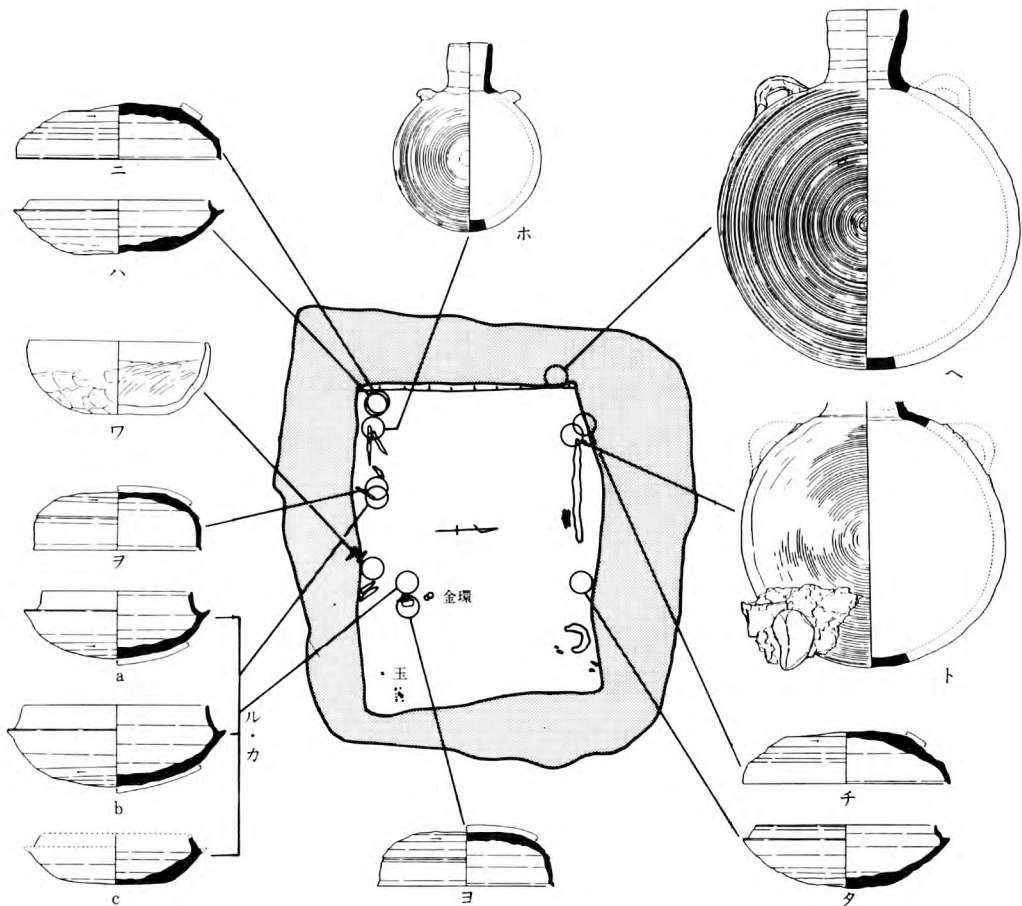
玄門については、無常堂古墳例においても、調査に関して不明瞭な部分も多く、状況は判然としない。ただ、本墳は極めてしっかりとした長方形の掘り方が形成されており、重要な意味を持っている。即ち、本例で見るかぎり、羨道の存在は完全に否定されるのである。四周は約70cmに及ぶ立ち上がりのみせており、竪穴系の在り方を踏襲している。少なくとも、追葬可能な埋葬施設とは言い難い。また納棺方法について、仮に羨道はもたなくとも、横口部を有し、そこから行われると考えてみる。掘り方内での主体部の位置が、長軸上でやや一方に片寄っているとはいえ、掘り方壁までの距離は150cm前後、礫床端から求めても180cm程度であり、不可能ではないとしても、かなり難しいと思える。この点でも、棺を安置したあと、粘土施設を構築した竪穴系の葬法を想起させる。本墳は、副葬品を全く持たない特異な例でもある。この特異性が構造の差異に還元して考えられるのであろうか。被葬者が追葬を必要とした存在であったかなかったか等によって、施設が構造的変位を見せたかすべきか甚だ疑問が残る。

以上、今回報告の2基によって得られた情報を統合すると、粘土施設については、主柱が存在し、木材で合掌形をなす骨組みをつくり、それを粘土で被覆するという横穴式木室に類似した構造を想定することができる。一方、礫床の片寄りから、一端を横口部として長軸にそって横から納棺する、横穴系の葬制も考えられるが、無常堂古墳に関する限りは否定的である。しかしながらその呼称については、構造と機能に依拠する限りにおいて、「槨」ではなく「室」として認定すべきと考える。ただそれが、「横穴式」として横穴式木室と同列に扱うことについては、無常堂古墳例を特殊例とみるべきかどうかにもかかわっており、その判断は流動的である。この点については、①・②で示した追葬の事実についても、検証が必要となろう。

追葬について

北野氏が指摘した、同一主体部内での時期差を持つ須恵器の共存は事実である。既往の調査例で、殆んど例外無く認められる。さらに、型式としては、田辺編年（田辺1966・1981）でいうMT15にはじまり、ほぼTK43段階で終焉をむかえるという統一性が見受けられる。

付篇で、過去出土遺物を再収録した。矢田借屋や蓑輪塚古墳に関しては、報告書掲載遺物との照合の点で、多分に検討余地を残しているが、念仏林古墳については、ほぼ完全に照合し得た。その土器実測図を出土状況図に組み込んで表示したのが第41図である。土器番号は原報告のとおり使用している。この中で、坏蓋の(ヲ)と(ヨ)、坏身(ル・カ)のaとbがほぼMT15併行となり、(ニ) (ハ) (チ) (タ)の蓋坏2セットがほぼTK43併行となろう。そして、前者の蓋坏は灰白色を呈する焼成不良の軟質須恵器として統一され、後者の蓋坏及び提瓶の(ホ)は、胎土に極めて多量の砂粒と黒色粒子を含んで南加賀窯産に同定でき、焼成の状況からも生産の同時性・一括性が指摘できる。また、提瓶の(へ) (ト)については、(ホ)との比較における法量の差及び把手の形態から、一見古い要素を兼ね備えているようである。しかし、(ト)の胎土・焼成



第41図 念仏林古墳主体部内遺物分布図

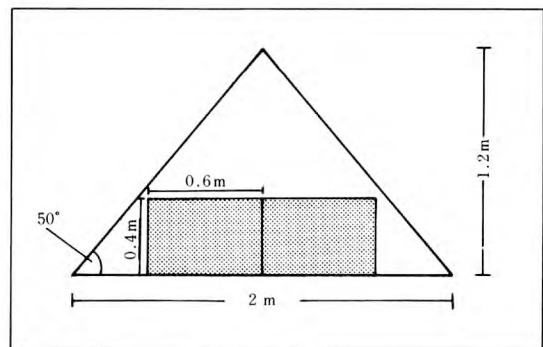
は後者のグループに類似し、把手は（へ）と同様に重厚さを欠くものと予想される。さらに、（へ）の口縁形態は、むしろ（ホ）の延長線上で捉えられ、MT15に併行する通常のそれらとは大きく趣を異にするものである。従って、TK43とした後者のグループに包括される可能性が高いと判断したい。この新古2型式を仮にI期（MT15）・II期（TK43）と呼んでおく。

さて、これらの分布状態であるが、巨視的にみて、南北それぞれの壁沿いに並ぶ二つの群が形成されている。この中で、北壁側の群（以下、北群）は全てII期に属する。南壁側の群（以下、南群）は、西端部にII期の（ニ）（ハ）（ホ）が集中し、それ以東はI期で占められている。これによって、南北の群が単純に時期区分と合致するものではないことがわかる。と同時に、決して異なる型式が混在しているものでもない。西壁際の床面は、礫が途切れ、一段低くなっていることが報告されている。このことから北野氏は、ここに入り口部の存在を想定しているのであるが、これに従えば、氏の言う通り、入り口部側に配された一括品として（ニ）（ハ）（ホ）（へ）を認定できよう。この2型式の分布状況は、追葬の結果としての判断を否定するものではない。従って、天井部は盛土で覆われていたであろうから、横穴系の追葬形態を考えざるをえない。

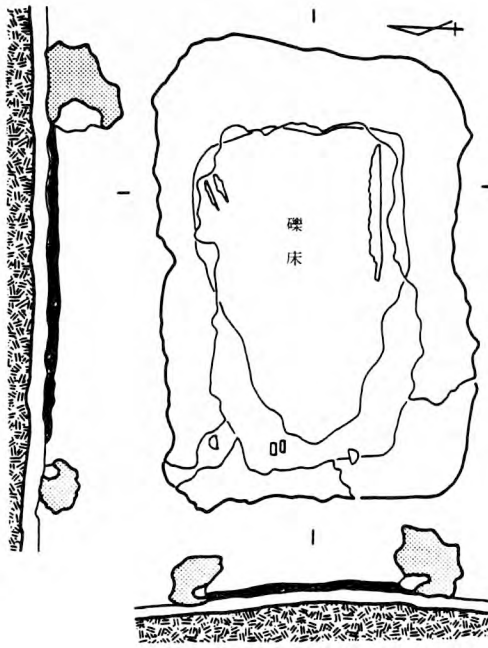
そこで、I期の土器の出土位置であるが、金環・玉類を伴って南壁寄りに集中しており、これらが埋葬時の原位置を保ったままである公算が大きいと思われる。一方、追葬時に形成された北群の遺物配置は、施設のかなり奥部まで及んでおり、この段階でも内部に入ることができた構造であったと言える。あるいは仮に、棺内に副葬品を配置し、入り口部から押し込むかたちで納棺したものと考えると、追葬時の棺位置は、北壁側に著しい片寄りを見せていたことになる。これらどの可能性をとってみても、この配置は、埋葬当初より、施設内の計画的な納棺位置の区分がなされていたと見るのが自然のように思える。

では、これが構造的に可能であるかということについては、横穴式木室を参考とする限り首肯できる。たとえば権現山3号墳（第44図）では、玄室が礫床の有無によって完全に2分されており、追葬の計画性が明確なものである。規模は、玄室中央で幅2.2m前後、側壁の傾斜角は約50度程度と推定できる。これは、念仏林古墳に極めて近似した数値と言える。側壁の傾斜角については、その多くが土圧による変形を受けていると考えられることから、念仏林に限らず、多くが50度前後まで復元してよいものと思われる。

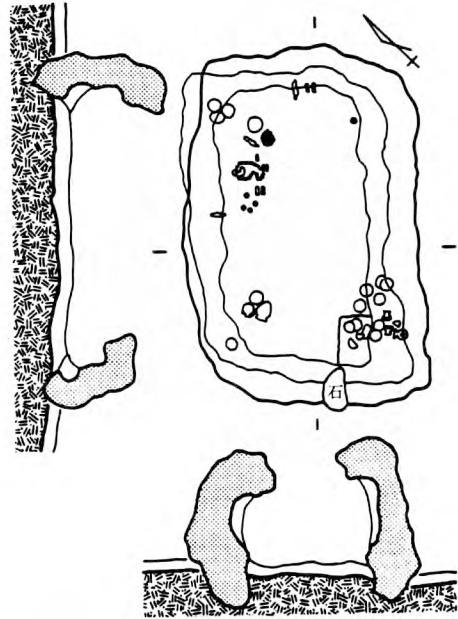
第42図は、玄室幅を2m、側壁内傾度を50度として模式図化したものである。これによれば、高さ40cm、幅60cmの棺ならば、かろうじて2棺並置可能である。また、玄室内をかたづけによって再編する作業を実施したものとしても、天井頂部が床から120cmの高さに求められ、決して作業が不可能な数値とは言えない。



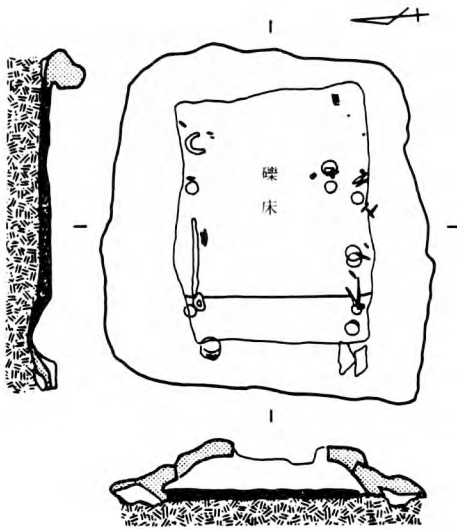
第42図 粘土槨(室)断面略図



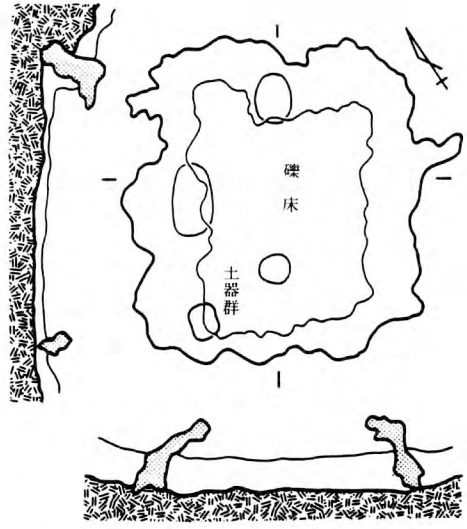
矢田借屋 2号墳



矢田借屋 4号墳



念仏林古墳

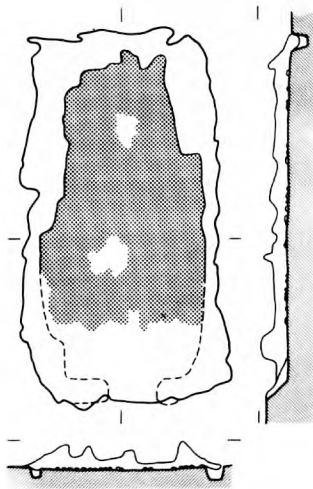


養輪塚古墳

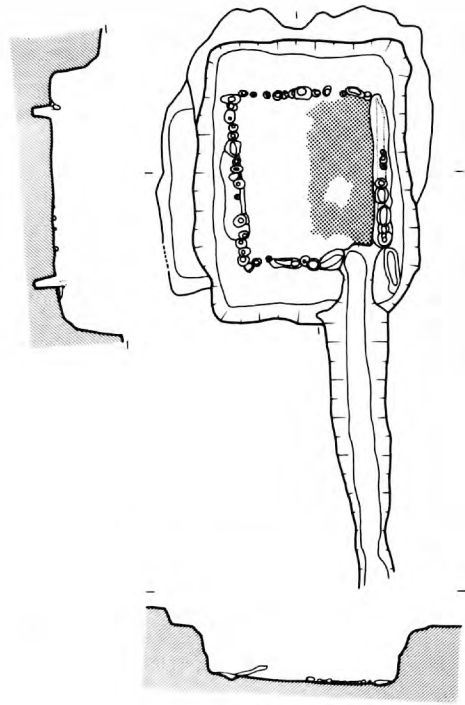
北野氏作成（北野1983）図より
転載。



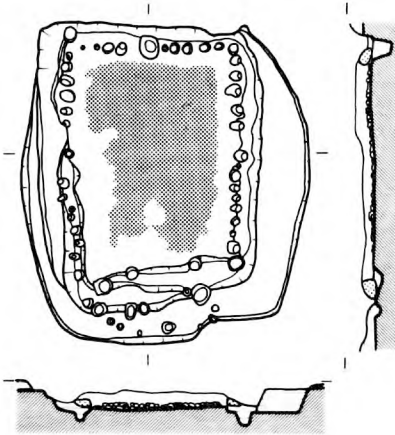
第43図 南加賀型木芯粘土室諸例



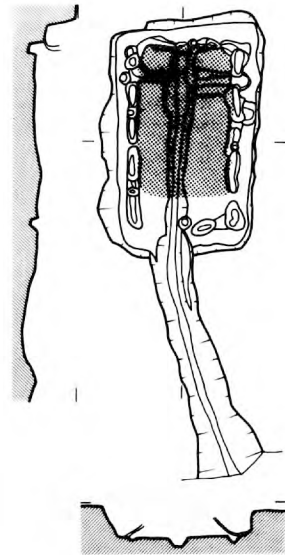
中坂 7号墳



権現山 3号墳



仏山 1号墳



北山 2号墳

	I 類	II 類		
		A	B	C
a				
b				
c				

横穴式木室分類概念図 (北野1983)

第44図 横穴式木室諸例

以上述べてきたように、追葬が実際どのようなかたちで行われたかは推測の域をでないが、少なくとも、規模としては、それが可能であること、構造としては、横口部の存在を想定せざるをえないことが理解された。

ところで、後山明神3号墳では、過去の調査例で判断された実態とは、また異なった性格を提示してくれている。遺物は東西2群に分離して分布しているものの、両者には型式的な段階差を設定しがたい。そしてその二つの群は、供給源を全く異にすると同時に、器種組成においては、両群が関連性をもって対峙する在り方を示す。この配置は、僅かな時間差をおいて追葬された結果とみるよりは、その総体で同時性をもった一つの副葬形式を成していると考えたいと思う。いかなる事情であったかは不明であるが、供献時に被葬者をとりまく二つのグループ（供給ルート？）が存在していた、あるいは意識されていたものと言える。また、別の可能性として、二遺体（夫婦等）が同時埋葬された結果としても考えられる。この可能性の方が逆に、副葬品にみる二つのグループを理解しやすいかもしれない。

(2)「南加賀型木芯粘土室」

ここまで多くの推測を交えながら、やや短絡的すぎるかもしれない様々な可能性を指摘してきた。過去の調査例は、いずれも追葬が行われた可能性が高いという一つのパターンを示しているが、今回報告の二例はそのまま、さらに二つのパターンを加えるものとなった。即ち、無常堂古墳例は、副葬品を一切伴わず、追葬が不可能な埋葬施設と判断され、後山明神3号墳例は、二遺体同時埋葬の可能性が指摘できるものである。

横穴式木室の中では、構築段階でその機能と活用が構造的に規定されるというバラエティーを認めることができる。たとえば、名草3号墳では、しっかりとした石積みの羨道部に、奥行きのある広い玄室を持ち、6遺体にも及ぶ複次葬が考えられている。まさに横穴式石室を木室化したという感がある。一方、先に例として揚げた権現山3号墳では、追葬による二遺体埋葬が計画的で、羨道を追葬時の納棺位置に向けて設定している。さらに、屋敷山1号墳南室では、羨道部中央に支柱穴を有し、構造的には追葬が不可能と思われるものもある（柴田1983）。このような例を考えると、箱形粘土槨の構造的な実態や性格の位置付けは、未だ資料不足と言える。

箱形粘土槨の構造を北野氏の論を土台として、横穴式木室の例と対比しながら考えた。結論的には、両者の強い関連性を確信することになったが、ただ、横穴式木室に含めて考えて行こうとは未だ思っていない。系譜の問題であるが、横穴式木室で箱形粘土槨に先行する例が知られていないという事実は重要である。従って、まず地域内での位置付けを、さらにつきつめて考えてゆかなければならない。その前提として、構造の検討をある程度成し得た今、少なくとも、箱形粘土槨の名称の改変は必要であろう。形態上類似する横穴式木室との対比から、それが粘土のみよっての構築は成し得ないこと。さらに、後山明神3号墳の調査で、その木芯の存在が確認されたこと。そして、構造及び機能的に「槨」ではなく「室」であること等により、「木芯粘土室」⁽³⁾という呼称を採用したい。また、従来、粘土槨あるいは粘土棺に「箱形」と付すことにより、加

賀におけるこの特殊な埋葬施設を示し、固有名詞化しているという便宜があった。「横穴式木芯粘土室」としては、横穴式木室と同義的にすでに多用されているので、これと区別するため、「南加賀型木芯粘土室」と仮称しておきたい。「南加賀型」とすることについては、その概念規定のあいまいさが否めないが、分布が南加賀地域を越えるものではないこと、明確な羨道が未だ検出されていないこと、そして、さきに揚げたバラエティーをもつこと等南加賀における実態の総体を一括する暫定的なものとして設定しておく。

3. 南加賀型木芯粘土室成立の背景

南加賀型木芯粘土室は名称に付したとおり、現在のところ北陸にあって南加賀固有の墓制である。さらに、6世紀前半代を初現として中～後半代には消滅するという、極めて短命な異例の葬法である。こうした、一地域に固有の特殊な形態をもって成立し、さらに被葬者を特定階級あるいは特定の性格を持つ者にあて得る状況は、北野氏が横穴式木室との関連を指摘した、もう一つの重要な根拠となっている。つまり、成立する歴史的背景を横穴式木室にオーバーラップさせて考えることで、南加賀のそのの解明に迫ろうとしたものである。

ここでは、南加賀地域を舞台としてそれが存在している背景を検討する。最初に、やや長くなるが、南加賀における古墳時代の展開過程について、筆者が問題視している部分への推測あるいは可能性の指摘を交えながら、通史的な整理を行っておき、理解の土台としておきたい。

(1)南加賀における古墳時代の様相

南加賀地域には、農業共同体の地縁的結合を紐帯として発展した、二つの地域集団の成立が考えられている。それぞれは、能美平野を生産基盤とした能美地域と江沼平野を生産基盤とした江沼地域を舞台とするものであり、同時に、能美古墳群と江沼古墳群に投影して捉えられるものである。

5世紀代の江沼と能美

江沼地域では、少なくとも5世紀中頃までは、江沼を狭域統治圏とする地域首長擁立の体制が確立していたものと思われる。ただそれは、強大な政治的勢力をもって専制的に支配するものではなく、地域を構成する地縁集団相互で伝統的紐帯のもとに共立せられた首長であったようである(田嶋他1978)。首長擁立の背景の一つには、大和政権に対して地域ぐるみで連携(ある面では存続のための防衛策として)を強めようとしたことがあったと考えられる。

これに対して、4世紀代にすでに加賀一帯の広域地域圏が成立していたのではないかとする見解がある(中司1977)。これは、両地域の想定される首長墓が、編年の序列のなかで相互補完的に継起している姿を読み取ったことによるものである。

能美古墳群に対して吉岡氏は、3世紀末葉ないし4世紀前半頃から7世紀初頭にかけてほぼ継起的に営造されている姿を、「北陸における典型的な古墳群」と位置付けて、世襲権を持った特定家系による閉鎖的支配構造を想定された(吉岡1968)。ただ、この継起する様は5世紀前半代

に空白部を介するという問題を残していた。その後、氏は、寺井山遺跡の分析をとおして、能美古墳群の古墳前期の様相を再考し、4世紀中葉から後半代に位置付けられる大型の前方後方墳である和田山9号墳においてすら、「首長権が特定家系によって世襲化したことを意味しない」として、「首長権固定化による地域集団の一元的統合を達成」したものではないと分析した(吉岡1971)。とすると、5世紀前半代の空白はかなり大きな意味を持ってくるのではないだろうか。強大な力を誇示して成立した、和田山5号墳に至る首長出現の経緯が、極めて不鮮明なものとなってくる。やはり中司氏のいうとおり、和田山5号墳は、加賀地域を統合してきた一連の首長系列で捉えられるのであろうか。

しかしながら、近年調査された小松市河田山古墳群は、4～5世紀代を中心とするもので、主軸長50mを超える前方後円墳を含んでいる。時期はまだ確定できないが、恐らく和田山5号墳に相前後する時期のものと思われる。河田山古墳群自体は、梯川流域の平野を基盤とする地縁集団の累世墓域として成立したものと考えられ、初期古墳を含んでいる。ただ、この中に存する大型前方後円墳が能美地域を統括する立場に発展した首長墓であった可能性もある。従って、能美地域の首長権継承の序列は、いまだ不確定要素が濃いと考える。すでに多くの古墳が失われたと思われる寺井町佐野近辺の丘陵から河田山古墳群にかけてが、5世紀代能美地域の動向を解明する鍵と予測している。

もう一つの問題は、江沼地域における古墳の展開過程が、次に述べる二子塚狐山古墳の造営に至るまで、ある程度自己完結性をもった脈絡を与えることができ、その首長継承の流れに能美の和田山5号墳を含めるのは、無理があるように思えることである。特に、和田山5号墳に関しては、5世紀末葉まで築造時期が下り、二子塚狐山古墳に並行する可能性が近年示されている(河村1983)。従って、編年的にも多くの問題を内包しているのである。

以上のことから、三つの仮説が成り立つ。一つは、中司氏の言う、加賀一帯の広域統治権の成立をさかのぼって想定すること。もう一つは、今後の調査によって5世紀代資料が補填され、能美地域を狭域統治圏とした首長創出の継起性が把握されること。さらにもう一つは、5世紀前半代の空白を認めるとしても、江沼と能美を統合する首長権の移動があったのではなく、5世紀中葉頃⁽⁵⁾に、能美における新たな政治勢力の発生を想定するものである。

結論的には、筆者は三つ目の仮説を支持したいと考えている。能美古墳群では、河田山古墳群の資料を含め、5世紀中葉以降6世紀初頭までの古墳の充実が判明してきている。また、河田山古墳群では、副葬品の貧弱さが目立つが、この墓域とは分離された位置に、同じ5世紀中葉の埴田後山無常堂古墳が造営され、副葬品の優位性が指摘できる。同一丘陵上には、環鈴を伴う後山明神2号墳も知られており、階層差を反映した墓域を形成したものと判断される。さらに、和田山5号墳の築造を二子塚狐山古墳に並行するものと考えれば、5世紀末葉には、能美と江沼の二大勢力がそのピークを迎えて分立していたと言える。能美の勢力は、地縁集団間の結合のもとに次第に醸成されて出現した江沼地域首長とは異なり、かなり強引な武力行使をもって台頭した、

専制的首長ではなかったか。その出自については、江沼地域から派生した可能性もあるが、和田山5号墳の埋葬主体が粘土槨という前代からの葬制を踏襲し、江沼の首長墓に対応しないことから、能美に北加賀を含めた地域からの急激な台頭と考えたい。

二子塚狐山古墳・和田山5号墳築造以後

5世紀後半代に比定されている加賀市二子塚狐山古墳の築造が、旧来の如き地縁集団相互が擁立した共立首長とはやや異なる性格を示しているという見方は、多くが認めるところである。即ち、首長擁立の過程は、基本的には継続する共立体制のなかに置かれていたと理解されても、その被葬者は「江沼地域の地縁集団間の相互の均衡を打ち破り、その再編を成し遂げた地域首長」（田嶋他 前掲）であり、「より専制的な性格を強め、共同体規制から脱却し得た」（中司 前掲）首長であると考えられている。つまり、一地域の一元的支配体制の確立及び、階層的構成の組織化へ移行する画期を想定するものである。

田嶋氏は、根拠とする古墳分布の具体的表徴として、集団墓域から隔絶して優位に立つ首長墓と、それに従う階層差を反映したかたちで形成された、所謂「東田支群タイプ群集墳」の成立をあげている。二子塚狐山古墳以後、江沼地域首長墓域は三湖台地区に舞台を移して継起し、6世紀代の後期群集墳の盛行へと引き継がれる。そして、階層差は、石棺内蔵の横穴式石室——切石積横穴式石室一箱形粘土槨⁽⁶⁾と、古墳構造の優劣に明瞭に反映される⁽⁶⁾として注目している。

一方、中司氏は、加賀地域全体の動向のなかで解析し、江沼首長墓域を三湖台地区に移してのち、6世紀前半代までを統合首長として継起したとする姿を読み取っている。そして、6世紀後半代に至っては、切石積横穴式石室の能美地域での集中を鑑みて、再び北加賀・能美・江沼の各地域は分立するとした。

この5世紀後半代の江沼地域首長(具体的には二子塚狐山古墳被葬者)による南加賀全域の統合についてはそれを否定する見解を先に述べた。しかし、能美地域での和田山5号墳以後の6世紀前葉にかけては、勢力の減退は否定できないものがあるように思う⁽⁷⁾。5世紀後半代は、古代王権形成史上重要な画期とされる雄略期にあたり、江沼地域首長がヤマト政権との強固な繋がりを確固たるものとして、地域の統括者として容認されるに至ったとみることは想像に難くない。ただ、ヤマト政権がそれを機に能美・北加賀の勢力を否定する立場をとったとは考えたくない。和田山5号墳被葬者の死後の一次的な沈滞は、純粋に両勢力の地域を舞台とした不均衡さを示すものとも考えられ、すぐさま広域的統合の結果と見做すことはできない。能美では、5世紀代から6世紀代を通じて、一貫して埴輪祭祀を取り入れていないことも、両地域の相対性を示している。6世紀中葉に能美で出現する切石積横穴式石室(和田山6号墳)の被葬者は、和田山5号墳被葬者の末裔の可能性も否定できない。

和田山6号墳以後、切石積横穴式石室は、西山支群に墓域を移して1号・9号・8号と7世紀初頭まで継起する。近年発見された河田山古墳群の切石積横穴式石室(河田山12・33号墳)は、7世紀後半代に位置付けられるもので、その連続性を予想しておきたい。西山支群のそれとは、

約半世紀の開きをもつが、西山と河田山を結ぶ区域に、間を埋める未発見古墳が存在する可能性がある。

以上のことから、能美を舞台とする勢力は、その盛衰や質的転換を別として5世紀後半代から7世紀代をとおして存続していたものと理解したい。ただ、この勢力が加賀地方において、いかなる政治的關係で存在していたかの評価については、筆者自身甚だ流動的な考えを持っている。

加賀立国以前の加賀地方は、加賀郡と江沼郡の二郡編成であったとされている。しかし、これがすぐさま、能美地域での別個の政治勢力の存在を否定する根拠とはなりえないとする考え（浅香1978）は妥当であろう。浅香年木氏は、こういった見解をとりつつ、加賀における古代有力氏族のミチ氏とエヌ氏の本拠地をそれぞれ北加賀と江沼地域に限定し、能美における第三の勢力として、財氏を有力視した。ただ、浅香氏がミチ氏の本拠地を想定するために用いた考古学的事象は、氏の言う「原ミチ氏」から長坂二子塚古墳築造にいたる成立事情に詳しく、それ以後、末松廃寺の建立までの、ミチ氏が史上に登場する時期の裏付けとなる考古資料に極めて乏しいという実情を含んでいた。この点のみを取り挙げれば、河田山12号墳や同33号墳の発見は非常に重要な意義をもってこよう。

この2基の古墳は、尾根を別にしながらも、石室主軸を合致させており、これが白山の眺望を意識していたと考えることは、至極当然である。浅香氏が、ミチ氏の勢力拡大について、白山禅定道の掌握及び加賀馬場の形成と支配をめざして南下する姿として読み取ったことを肯定すれば、河田山古墳群のそれが、この勢力の延長上の性格をもつものと推定されても無理はない。能美地域において、切石積横穴式石室が6世紀後半代から7世紀後半代へと継起するかたちを認めるとすれば、手取川兩岸の地域を一流域という概念で包括し、能美を白山を意識して存在している北加賀勢力の最前線地帯とみることも可能である。また、中央の政治勢力との強い結び付きを抜きにしては考えられない河田山12号墳の築造時期が、天智天皇の宮人に「越道君伊羅都売」が送り出された時期に該当していることや、同じく同時期に建立された末松廃寺の瓦が、対岸の湯屋窯から供給されている事実は、ミチ氏の勢力が北加賀及び能美地域を包括して存在していたとの考えを大いに補強するものと言える。そして、北加賀で台頭してきたミチ氏の強大化と能美地域進出の最初の足跡を河田山5号墳に求めることも可能である。

しかし、さらに留意すべき意見として、河村好光氏の指摘がある。6世紀代中葉以降、能美と江沼は切石積横穴式石室と箱形粘土槨という葬法が共有され、両地域の擬制的同族関係を想定できるが、一方で、末松廃寺と湯屋窯との関係から北加賀との一定の結び付きを認めざるを得ないとし、それぞれを能美のある側面として統一的に捉えた（河村1985・1987）。道君の大王詐称事件の記事を「自主的外交権」の撰取による王権の地方支配政策の表徴とし、これ以後、畿内王権が側近的豪族（具体的には膳氏）を介して在地首長を統括してゆく過程をこの複雑な側面の背後に読み取っている。

財氏については、8世紀代には能美地域を本拠地として一定の勢力集団を形成していたとみら

れるが、その出自を和田山5号墳被葬者にまでさかのぼらせる（浅香 前掲）のは、不確定要素が多い。むしろ、6世紀末葉に畿内王権から政策的に派遣された膳氏が、能美地域にまで覇権を伸ばしていた道氏の勢力に対して介入・調停し、能美地域から退ける手段を講じたともとれる。こういった過程で、能美地域本来の在地集団が北加賀勢力の統率下から解放されるとともに、膳氏によって、王権領有集団としての財氏を名のって再編されていった可能性もある。このような観点に立てば、西山古墳群での切石積横穴式石室の築造の終焉が政策完遂の画期にあたり、能美地域の新たな展開が河田山古墳群等の造墓域の移行に表現されているものともとれ、ここでは先の石室の同一勢力による継起性は否定されることになる。加賀立国時の能美分郡の措置を理解しやすくするのも事実である。さらに別の可能性を付け加えるならば、能美地域と江沼地域で、切石積横穴式石室と南加賀型木芯粘土室（箱形粘土槨）という葬法が共有される点を重視し、能美勢力の変貌を6世紀前半代から中葉にさかのぼらせることも考えられる。6世紀前葉の古墳の動向に読み取れる勢力の沈滞も、これに関連させることもできよう⁽⁸⁾。

江沼地域の後期古墳の動向について、やや詳細さを欠くかたちとなった。これについては、次に述べる粘土室の位置付けの中で考える必要があると思われるので、別項を設けて検討したい。

以上、ややまとまりのないものとなったが、簡単に整理すると、5世紀前半代までには、能美と江沼の両地域には、農業共同体の地縁的結合を紐帯とした地域集団が成立していた。5世紀後半代に至って、江沼地域では、専制的首長による一元的支配体制が確立され、二子塚狐山古墳が築造される。以降、江沼地域首長はエヌ国造としての支配層を形成し、一族を確立する。

一方能美地域では、和田山5号墳が築造され、それに近い前段階に継起を認める首長墓の存在が、今のところ確認されていないことから、その被葬者を北加賀を含む地域からの急激な台頭勢力と考えた。能美のそれ以降の動向については、7世紀後半代に至るまで、特定家系が連続して首長墓を継起させるものとし、これに道氏をあてる考えを有力とした。ただ、6世紀後半代の道君による大王詐称事件に関する記事の評価、8世紀代にみる能美を舞台とした財氏の動向、さらには加賀立国時の江沼郡からの能美分郡という流れに鑑みると、畿内王権の介入によって道氏勢力は西山支群で切石積横穴式石室が断絶する7世紀初頭を最後に北加賀へ退けられた可能性もある。別に、6世紀中葉の江沼と共有する葬法に依拠すれば、和田山5号墳の築造が短命で一次的な勢力の台頭となり、根本的な捉え方の修正が求められることになる。

今のところ様々な可能性を列挙しておく以外になく、新たな資料の増加に伴ってその都度、再考を余儀なくされるのが実情である。次に、以上の問題点を踏まえて、南加賀型木芯粘土室（箱形粘土槨）に焦点をすえて別の観点から若干の言及を行っておきたい。

(2)南加賀型木芯粘土室の位置付け

南加賀型木芯粘土室（以下、粘土室）の分布は、現在のところ手取川以南の越前国江沼郡域に限られている。時期は、田辺編年のM T 15～T K 43に限られているといっても過言ではない⁽⁹⁾。さらに、この型式が同一の主体部内で追葬の結果として検出されており、新段階型式の須恵器のみ

を保有して存在するものは認められない。言い替えれば、粘土室の構築は、MT15型式期に限られるのである。この事象一つをとってみても、極めて特異な葬制であることがわかる。

畿内周辺域で注目された横穴式木室という類似の主体部の評価については、渡来系氏族とからめて被葬者像を探ろうとする立場が有力である（柴田1980・1983）。しかし、「南加賀型木芯粘土室」は、横穴式木室と構造面の類似を認めるものの、それよりは明らかに古く位置付けられ、火葬例も存在せず、その成立事情の独自性を考慮しておく必要がある。

手工業技術の画期

南加賀地域で粘土室が成立した時期には、同じく二つの事柄が発生している。一つは、須恵器生産の開始である。小松市の東南部丘陵地に展開する南加賀古窯跡群は、中世にまで綿々と操業された北陸有数の窯業遺跡である。現在のところ、当窯跡群で確認されている最古の型式はMT15並行期である。この中には、埴輪併焼窯である二ツ梨トノサマイケ単位支群（近間1988）があり、該期を中心に三湖台地区を舞台として、新たに後期群集墳の展開がある様相と決して無縁ではないことが推測される。江沼地域首長は、潟湖と入江を海上交通の要所として確保し、同時に須恵器生産を加賀地域で一早く導入して、支配秩序の拡充を図っていた（河村1987）。粘土室の採用は、まさにそれと機を一にしているのである。

二つ目としては、南加賀型とも呼べる切石積横穴式石室の採用がある。最古とされる能美の和田山6号墳こそ実態に不明な点が多いが、MT15型式期まで遡るのは确实である。石室構築がある程度明確な西山1号墳では、切石の積み上げに際して、鍵手積の手法を採用しており、少なくとも、本墳築造の6世紀後半代まで、河田山12号墳の石室構築技術の一貫性が遡り得る。従って南加賀の石室構築技術は、その成立当初から、かなり完成された高度な技術をもっていたものと推測される。

以上の二つは、いずれも技術者集団の存在を抜きにしては考えられないものである。古墳築造に伴う石工集団は、特定の豪族層の支配下にあつて、技術保持のために組織化されていたという性格をもっている（和田1983）。これは、第一に挙げた須恵器在地窯の成立時の状況に極めてよく似た側面といえよう。切石技術自体は、5世紀代の石棺製作においてすでに必要とされていたものであるが、それは、頂点に立つごく少数の首長層の埋葬において発揮される程度であった。6世紀代の石室の普及は、石工集団が技術を発揮する機会の急激な拡大⁽¹¹⁾となったことは确实である。この点もまた、須恵器生産の需要増大の側面に似たものがある。

このように、粘土室成立時は、南加賀における手工業技術（技術集団の編成）の画期であった。

古墳築造の画期

6世紀代は、後期群集墳盛行をむかえる時期である。6世紀前葉の江沼地域では、三湖台地区に舞台を移し、50mを越える規模の前方後円墳が二子塚狐山古墳から継起する首長墓としての位置を占め、30m級の前方後円墳を中核に備えた古墳群（借屋古墳群等）がブロックを形成して展開していく。この三湖台地区での在り方は、二子塚狐山古墳で成し遂げられた、専制的地域首長に

よる一元的支配と階層的組織化の延長上にあり、一見安定化した一面を示している。この時期の首長墓ともくされる牛のほぞ古墳は、主体部が不明であるが、古墳群を構成する円墳の中には、粘土室を内部主体とするものが含まれる。その後も首長墓は継起するが、6世紀後半代に至っては、前方後円墳は消滅する。墳形は円墳となり、内部主体は切石積横穴式石室が主流となる。このことは、後期群集墳盛行期にいたる事象と考えてよからう。ただ、石室内に石棺を内蔵するものとしなないものという階層差は指摘できるが、後半代に至っては、新たな小円墳の築造はほとんど停止している。粘土室を例にとれば、MT15以降、追葬というかたちでしか埋葬活動の継続は確認されていないのが実態である。かわって、法皇山横穴古墳群（橋本・田嶋1976）を代表とする横穴古墳が主流を成してくる。横穴古墳被葬者の性格付けにも係わってくるが、少なくとも、前方後円墳の消滅に相前後して、墳丘を伴う小規模群集墳もまた途絶えるのは事実である。横穴墳の展開を、単に後期群集墳被葬者層と性格を一にして古墳形態の異なるもの、とするのは過小評価につながるのかも知れないが、造墓に対する観念の変化は、前方後円墳の消滅とともに一体的に捉えるべきかもしれない。従って、実質的な画期は、6世紀中葉頃に求める必要がある。

三湖台において、MT15型式期を遡る古墳としては御幸塚古墳がある。群としての展開は判然としないが、この古墳の被葬者は、三湖台地区先住の地縁集団の統率者であって、同時に、江沼地域首長によって組織化された状況を端的に示している古墳であることは疑いない。従って、江沼の首長権継承の流れには属さないものと考えている。とすると、二子塚狐山古墳を頂点とした階層的構成を示す古墳群が、同様のパターンで三湖台地区を舞台に展開するのは、MT15型式期であり、また、その終焉を迎えるのも該期直後であった可能性が強い。この急激ともいえる変貌は、政治的社会的状況の変化を抜きにしては考えがたい。

首長墓及びその系列の上位墓のみが継起し、階層に組み込まれた小規模群集墳の断絶は、その地域内部での独自の階層性、あるいは専制的性格の崩壊を意味しているのではないか。先にも述べたように、造墓に対する観念的变化、言い替えれば、造墓の意図するところの質的变化が想定されるのである。即ち、地域首長の中央政権による官僚化の徹底と不可分の関係が予想される。

以上のような状況は、能美地域にもあてはまり、加賀地域全体でも現在のところ6世紀後半代に新たに展開する群集墳は確認されていない。

粘土室墳は、階層的にみれば、継続する墳丘墓はなく、これを最後に横穴墓に引き継がれるものとして位置付けられる。

南加賀型木芯粘土室の被葬者

先に、粘土室成立時の背景をなす二つの面の画期について指摘した。それぞれは、そのまま被葬者像をさぐる二つの有力な手がかりを提供するものである。まず手工業技術の画期、特に須恵器生産の開始に粘土室成立が関与しているとみる北野氏は、「箱形粘土槨墳の被葬者集団が在地のものではなく、技術者集団として大和政権によって当地へ移住させられたものとした時、そこで発揮される技能が何であるか考えれば、そこに窯業生産との関わりが想起されてくる」(北野19

83) と述べている。

粘土室被葬者をおある種の技術者集団あるいは渡来系氏族と考えることは、即ち、粘土室が単に階層的序列の断面を示す葬法ではないことを意味している。これについては、否定する具体的根拠はない。ただし粘土室が、江沼と能美の両地域に分布していることは、被葬者が窯業生産のみに関与していた技術者集団ではないことを示している。能美地域での須恵器生産の開始は7世紀代を待たなければならない。あえて技術者集団にこだわるならば、「鶴川石」と呼ばれる凝灰岩を素材に能美地域で編成された石工集団を想定することによって理解可能と思われる。

しかしながら、実際南加賀における粘土室の在り方は、被葬者の特殊性をそこまで端的に示しているかといえは甚だ疑問でもある。例えば、江沼地域で発見されている該期の主体部で、横穴式石室の下位層にあてられるものは、今のところ粘土室以外では明確な展開が確認できない⁽¹²⁾。粘土室は、畿内周辺域の横穴式木室との関連性を重視する立場においてこそ、その性格の特異性が浮き彫りにされてくるのであって、南加賀地域におけるそれは、形態・構造の特殊性以外に特異な性格を示す状況証拠に乏しいというのが実情ではなかろうか。被葬者を技術者集団等特殊な立場にある集団ではないとした場合からの論及もまた必要であろう。

ここで、二番目にあげた画期をふりかえてみると、粘土室に、より大きな意味合いをもたせる事象であるように思う。6世紀後半代の横穴墓への転化は、被葬者集団の再編までは意味しないとしても、旧来の造墓秩序と意識は大きく変化したと見るべきである。南加賀におけるこの変化は、近畿地方等の横穴式石室墳の群集化と時期をほぼ同じくしており、むしろ、両者は同様の性格で定義づけられる群集墳かもしれない。畿内の群集墳に関して、木棺直葬形態の「群集墳」と、横穴式石室形態の「群集墳」を同質と見做すことへの懐疑(都出1970)が指摘されているのと同様の観点を南加賀におけるこの変化にあてておきたい。群集墳をなす横穴式石室は、一埋葬施設へ追葬するという意識の普及と密接に結びついている。これもまた、南加賀における横穴墓の展開にあてはめて考える必要がある。

以上の事柄を簡潔に表現すれば、南加賀地域(少なくとも江沼地域)での後期群集墳の盛行は横穴式石室の拡大にではなく、横穴墓の拡大に求められるのである。そして、その画期に6世紀後半代をあてることができる。さらに、6世紀前半代に小規模な墳丘墓を築造していた集団を有力家父長層にもとめ、後半代にいたって横穴墓に埋葬形態を転化させるとする立場をとれば、埋葬方法の思想がすでに、粘土室という埋葬施設に胚胎している姿を読み取れないであろうか。これによって、石棺内蔵の石室を江沼地域首長の個人墓⁽¹³⁾とし、その下位から、世襲権をもった有力家系墓として捉えれば、造墓を許された末端の家系に粘土室が一時的に採用されたとも考えられる。そこには、横穴式石室の下位階級への拡大を容認しない一定の規制をも想定できる。追葬が普遍化するなかで、構造的に耐久性の乏しい粘土室が横穴墓にとってかわられるのもごく自然なことであつたらうし、この変化を助長したのが、大和政権とのかかわりで地域内部に起こった政治的構造の変化であつたと言える。こういった意味では、6世紀前半代に構築される粘土室を後

期群集墳の初期形態、あるいは、過渡期の様態として評価するものである。

粘土室の成立は、横穴式石室の導入と不可分の関係にあり、同様の埋葬観念のもとに階層序列化された墓制で、その被葬者を墳丘墓の築造を許された末端の有力家父長層に求めようとすればこの特殊な埋葬方法は、南加賀におけるこうした動向のなかで、自生、創出されたものとすべきかもしれない。

ここまで、江沼地域を舞台に論を進めてきたが、能美地域での実態に即応するかと言えば、問題は多い。能美地域でも粘土室が分布している一方で、下開発茶臼山古墳群（西野1982）のように、木棺直葬形態の群が形成されていることは注視される。ただ、粘土室墳を有する末寺山古墳群の内容について詳細な報告がまだなされていないので、MT15型式期に限定した時期の様相が今一つ明確ではない。もし仮に、能美地域での一定の序列に、介入するかのような特異な埋葬形態を示すとなれば、やはり、被葬者自体に特殊性を見いだす考えが浮上することになるだろうか。

江沼地域は、ある意味では、極めて法則的な変遷を読み取ることができた。一方の能美地域での動向は、(1)で述べたように、非常に複雑な様相が予想されている。和田山5号墳以降の動きを「道氏」とからめて、いくつかの可能性を指摘したが、いずれも想像の域をでるものではなかった。しかしながら、ここで述べた粘土室の位置付けを通して再び言及すれば、能美勢力の変貌を6世紀前半から中葉にさかのぼらせるとした第三の可能性も捨て切れないのがわかる。江沼で読み取った6世紀中葉の大和政権の地域介入は、決して江沼地域に限定されていたものでは無かったであろう。江沼を取り込んだ中央勢力が、両者一体化して、能美にまで覇権を伸ばしていた北加賀勢力に懐柔策を講じていた姿を能美が独自性をもつ一方で江沼との墓制の共有があるという複雑な様相にあてはめて考えるのは、やや飛躍のしすぎであろうか。いずれにしても、粘土室の被葬者像は、これの分布する南加賀地域全体の動向に矛盾することのない位置付けを経なければ解明できない。先に示した二つの被葬者像をめぐる結論は、能美地域の古墳時代後期の動向解明とともに今後の課題としておきたい。

4. 結 び

従来、箱形粘土槨と呼ばれていた埋葬施設に対して、ここでは、南加賀型木芯粘土室と呼ぶことを提示した。その定義付けは、現在知られている粘土室のパラエティーや様相の実態を総体で捉えるというあいまいさを含んでいたが、しかし、必要な一つの研究過程と考えている。

粘土室の位置付けに関しては、被葬者に技術者集団等特殊な立場におかれていた集団を想定する考えと、6世紀後半代から盛行する横穴墓に引き継がれる追葬墓とする考えの二つを示した。后者は、粘土室を横穴式石室という葬制を意識しながらも階層差を反映して成立したものと解釈に立つものであった。畿内周辺の横穴式木室等については、火化の実態を重視して、横穴式石室との間に送葬思想の決定的差異を見いだす意見がある（柴田1983）。だが、南加賀型木芯粘土室については、畿内のそれとは全く異なった観点から、地域性に即して論及する余地は充分に残

されていると言えよう。

加賀地域の古墳時代の動向について、様々な問題を解決するにはあまりにも資料が断片的であるのが実情であり、筆者自身も、執筆に際して目まぐるしく認識が変化した。筆者は、古墳に関しては、言わば門外漢で、にわかじこみの断片的知識で本稿に取り組んだため、論旨が終始一貫せず、空想めいた思い付きも多かった。それでも、あえて考察に取り組んだのは、昭和61・62年度の河田山古墳群の調査で、7世紀後半代の切石積横穴式石室をふくむ重要な成果を得、その報告をひかえていたがためである。河田山古墳群の石室が加賀地域の古墳時代史になげかけた問題は、恐らく筆者の想像を越えるものであると思う。本稿は、その解明に向けて勉強するにあたって、先学諸氏の御批判を仰ぐことを期待してのものである。考察に欠落している視点、或は、参考文献の論旨をよく組み取っていない誤認があれば、是非御指導をお願いしたいと思う。

本稿を記すにあたり、北野博司氏より、御教示並びに多量の文献の提供を賜った。また、小嶋芳孝氏からは、筆者の愚問に対し快くご指導を賜った。考察に反映しきれなかった筆者の勉強不足をお詫びするとともに、記して厚く御礼申し上げたい。

註

- (1) I類は側壁の直立するもの。a類は、長さが3mを超え、床面指数1.8~2.0の大型長方形プランをなすもの。b類は、それより小型で、床面指数1.2~1.5と方形に近いものを指している。
- (2) これらの呼称は一定しておらず、また、属性の相違を認識しての名称の設定もあるので、一概に混乱しているとも言えない。ただ、これらは同一の机上で論ずべき一定の要素は備えている。本論では、北野氏の論文の標題にならない、「横穴式木室」という用語をもって、畿内周辺域の同類の埋葬施設の総称にあてて記述していきたい。
- (3) 木芯の存在を確認したのは、後山明神3号墳のみであるが、木組みの構造体抜きには考えがたい施設であるのは明白であろう。
- (4) 河田山古墳群は、土器の出土が極めて少ない。現在整理中であるので、明確にはできないが、梯川流域を超える範囲を統治する強大な勢力の墓域である可能性は薄いかもかもしれない。
- (5) 新勢力台頭の時期を和田山5号墳築造の5世紀後葉にではなく、中葉に求めたのは、一つには、埴田後山無常堂古墳を中葉に比定したことにある。そして、より大きな理由として、県内最大の前方後円墳と目される秋常山1号墳（全長110m）の評価（河村1985）に鑑みたものである。
- (6) 箱形粘土槨を単に後期群集墳盛行期の埋葬施設とすることには、やや疑念をもっている。この点については後述「(2)南加賀型木芯粘土室の位置付け」で触れる。
- (7) 能美では、この段階ですでに前方後円墳が消滅し、際立った規模をもつ首長クラスの古墳はみうけられない。
- (8) 6世紀中葉に能美で採用された切石積横穴式石室が継起する状況を述べたが、少なくとも能美古墳群での石室墳被葬者が国造クラスの首長と見做されるかは疑問がないわけではない。切石積横穴式石室は江沼地域と共有する墓制であるが、江沼では、石棺を内蔵するという、より上位墓が首長墓にあてられる。この両地域の差異は注意しておかなければならない。このあたりの状況が、政治的關係を示し、能美地域の変貌を6世紀前半代に遡らせる見方を補強する可能性がある。
- (9) 矢田借屋4号墳の有蓋高環について、TK47にあてる意見（北野1983）とMT15にあてる意見（河村1983）の二つがあるが、後者の要素により近いと考えている。

- (10) 河村氏は、和田山23号墳供献土器の分析と南加賀の政治的動向の把握をとおして、TK47段階の須恵器窯の存在を想定しているが(河村1983)、未だに確たる資料を得るに至っていない。
- (11) この時期に限らず、二子塚狐山古墳や、那谷金比羅山古墳の石材の産地同定は、今後重要な作業となろう。
- (12) 切石積横穴式石室と粘土室との中間に、黒瀬御坊山1・2号墳(大聖寺高校社会部考古班1951)のような河原石積の横穴式石室が位置付けられる可能性がある。矢田借屋7号墳(小松高等学校地歴クラブ1956)の主体部も同様の性格のものかもしれない。矢田借屋8号墳(小松高等学校地歴クラブ1962)は調査所見から、凝灰岩を用いた石室であった可能性がある。これを肯定することによって、矢田借屋古墳群内で、墳形の序列に合致した主体部の序列も示すことができようか。
- (13) 最終的には、那谷金比羅山古墳の横穴式石槨(浜野1983)に引き継がれる。
- (14) もちろん、両葬法は系譜の異なるものであり、単純に構造の形態転化を意見しているのではない。被葬者の政治的・社会的立場の変化と新たな墓制採用の働きを連続的に捉えるものである。
- (15) 註(8)参照。

引用・参考文献

- 浅香年木 1983 『古代地域史の研究』(北陸の古代と中世I) 法政大学出版局
- 上野与一 1952 「南加賀に於ける粘土材使用の古墳に就いて」『石川考古学研究会々誌』第4号 石川考古学研究会
- 上野与一 1954 「石川県に於ける古墳文化圏への仮説」『石川考古学研究会々誌』第6号 石川考古学研究会
- 上野与一 1956 「加宜国造に就いて」『加南地方史研究』第3号 加南地方史研究会
- 上野与一 1957 「南加賀の古墳時代」『県下の貝塚と古墳』石川考古学研究会
- 上野与一 1965 「古墳文化時代」『小松市史』(4)風土・民俗篇 小松市
- 上野与一 1970 「古墳文化各説—北陸地方—」『新版考古学講座』第5巻 雄山閣
- 河村好光 1983 「須恵器在地窯の成立をめぐる——和田山23号墳出土須恵器群の検討——」『北陸の考古学』『石川考古学研究会々誌』第26号 石川考古学研究会
- 河村好光 1985 「秋常山1号墳と能美古墳群」『加能史料研究』創刊号 石川史書刊行会
- 河村好光 1987 「(通史編)第一章 原始・古代」『辰口町史』第二巻 辰口町
- 北野博司 1983 「箱形粘土槨の再検討と横穴式木室との関連性について」『北陸の考古学』『石川考古学研究会々誌』第26号 石川考古学研究会
- 小嶋芳孝 1978 「金沢市長坂古墳群の研究」『石川県立郷土資料館紀要』第9号 石川県立郷土資料館
- 小松高校地歴班 1949 『石川県小松市蕨輪地方念仏林古墳発掘調査報告書』小松高校地歴班
- 小松高校地歴クラブ考古学研究会 1951 「江沼郡月津村矢田借屋古墳調査報告」『研究報告』第三輯 石川県立小松高等学校
- 小松高校地歴クラブ 1952 『石川県能美郡寺井町寺井和田山古墳調査報告』(上野 1965 所収)
- 小松高校地歴クラブ 1956 『石川県小松市矢田町所在借屋七号古墳調査報告』小松高校地歴クラブ
- 小松高校地歴クラブ 1962 「借屋八号墳発掘調査」『石川県高等学校文化連盟郷土部会報』2号
- 小松実業高校地歴クラブ 1954 「石川県小松市島町みのわ塚古墳調査報告」『石川考古学研究会々誌』第6号 石川考古学研究会
- 作田 公 1950 「小松市念仏林古墳調査後記」『石川考古学研究会々誌』第2号 石川考古学研究会
- 柴田 稔 1980 「遠江における横穴式木芯粘土室墳」『静岡県考古学研究』8 静岡考古学会
- 柴田 稔 1983 「横穴式木芯粘土室の基礎的研究」『考古学雑誌』第68巻4号 日本考古学会
- 柴田 稔 1987 『北山遺跡』浅羽町教育委員会
- 下出積与 1960 「加賀における後期古墳の歴史的意義」『金沢大学法文学部論集』哲史編8
- 末本信策・平良泰久 1972 「中坂古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財調査報告』1971 京都府教育委員会

- 大聖寺高校考古学同好会 1950 『山代町大堰宮古墳調査報告 付二子塚古墳調査報告』（同郷土研究部1978『郷土』所収）
- 大聖寺高校社会部考古班 1951 「石川県江沼郡南郷村字黒瀬御坊山古墳調査報告」『石川考古学研究会々誌』第3号 石川考古学研究会
- 高堀勝喜・吉岡康暢 1966 「古墳文化の地域的特色——北陸——」『日本の考古学』Ⅳ 河出書房新社
- 田嶋明人・湯尻修平・梶幸夫 1978 「江沼古墳群分布調査報告」『石川考古学研究会々誌』第21号 石川考古学研究会
- 田代克巳 1972 『上寺山古墳発掘調査概要』（『茨木市文化財資料集』11） 茨木市教育委員会
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群』Ⅰ 平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 近間 強・小松高等学校地歴部 1988 「小松丘陵窯跡群分布調査報告Ⅰ（遺跡編）」『石川考古学研究会々誌』第31号 石川考古学研究会
- 寺井町教育委員会 1983 『国指定史跡 和田山末寺山古墳群環境整備事業報告書』
- 寺井町公民館 1959 『末寺山古墳発掘調査の概要』
- 照岡正巳 1973 「仏山1号墳」『上野平遺跡発掘調査報告書』 京都府教育委員会
- 都出比呂志 1970 「横穴式石室と群集墳の発生」『古代の日本』5近畿 角川書店
- 中口 裕 1955 「箱形粘土棺に関する一二の考察」『加南地方史研究』第2号 加南地方史研究会
- 中司照世 1977 「加賀における古墳時代の展開」『古代文化』第29巻第9号 古代学協会
- 西野秀和 1982 『辰口町下開発茶白山古墳群発掘調査報告』 辰口町教育委員会
- 橋木澄夫・田嶋明人他 1976 『法皇山横穴古墳群』 加賀市教育委員会
- 浜野伸雄 1983 「那谷金比羅山窯跡群の発掘調査と金比羅山古墳の発見」『石川県立埋蔵文化財センター所報』第13号 石川県立埋蔵文化財センター
- 古川 登 1983 「越前及び加賀における6世紀代の埴輪について」『北陸の考古学』（『石川考古学研究会々誌』第26号） 石川考古学研究会
- 水野正好 1966 『蒲生郡日野町小御門古墳群調査概要』 滋賀県教育委員会
- 水野正好 1970 「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』5近畿 角川書店
- 森下大輔 1984 『名草3号墳・4号墳』（『加東郡埋蔵文化財報告』4） 加東郡教育委員会
- 八木勝行 1975 「浜松市有玉西町瓦屋カマド塚の調査」『静岡県埋蔵文化財調査報告』（『静岡県文化財調査報告書』第13集） 静岡県文化財保存協会
- 湯尻修平・梶幸夫 1978 「江沼古墳群出土資料の紹介」『石川考古学研究会々誌』第21号 石川考古学研究会
- 吉岡康暢 1968 『能美古墳群調査概要』 石川考古学研究会
- 吉岡康暢 1971 「古墳時代前期における特殊円丘遺構——石川県寺井山遺跡の調査——」『寺井山遺跡調査報告書』 寺井町教育委員会
- 和田晴吾 1983 「古墳時代の石工とその技術」『北陸の考古学』（『石川考古学研究会々誌』第26号） 石川考古学研究会

付編 小松市内粘土室墳出土土器

本編は、過去に小松市内で調査された、所謂箱形粘土槨（南加賀型木芯粘土室）を内部主体とする古墳の出土土器を再実測により集成したものである。一部、主体部の異なるもの、あるいは不明のものも、関連性を重視して掲載している。また、実測は、小松市立博物館においてほぼ完形状態で保管されているものに限った。

いずれの調査例も古く、保管状況も良好ではないので、検討余地を多分に残しているものが主体を占めている。古墳との照合が不明確なものについては、その資料的価値が半減するものと思われる。しかし、小松市の6世紀代古墳出土資料の大半が提示されていないという状況は非常に憂慮すべきことで、あえて、保管上混乱を生じているものも含めて再掲載することにした。今回掲載対象から除外した、符津石山古墳等の石室関連資料は、別の機会に集成したい。

紙幅の関係で、詳細な遺物の検討はできなかったが、最後に土器観察表としてまとめたので参照されたい。以下に、個々の遺跡について、簡単に概要の説明を加えておく。

埴田後山明神1号墳（付第1図）

遺物は、小松市立国府小学校に保管されていた。遺物には墨書の注記が明確に記されており、「発掘場所 国府村字埴田ト343番地畑地、発掘年月 昭和27年12月25日」とある。後山明神2号墳は、昭和29年8月9日の発掘であるので、これが1号墳の出土遺物であることは、ほぼ確実と思われる。地番は、昭和30年代に換地処分を受けた区域にあたり、古い公図による照合は困難であるが、本文第22図のEに該当する公算が大きい。掲載遺物の3のみが、小松市立博物館で後山古墳出土と伝えられているものであるが、国府小保管遺物の注記の一括性から、3は該当しないと考えるべきかもしれない。

念仏林古墳（付第2・3図）

昭和24年7月、小松高等学校地歴班考古学部が実施した縄文遺跡調査により、偶然発見された粘土室の初例である（小松高1949）。位置は、「島町蓑輪地方国有念仏林の南西部の突端」とあるが、明確にはしがたい。近年の念仏林地区の調査成果からみれば、現在念仏林遺跡とされている地点ではなく昭和59～61年に小松市で調査した念仏林南遺跡付近が該当するようである。

本墳出土遺物は、保管状況が最も良好で、ほぼ報告書との照合を成し得た。遺物番号にカッコ書きで記した文字は、報告書の遺物記号に合致する。ただ、保管遺物が1点多く、3・4・5の内いずれかが報告書のル・カに該当すると思われる。

蓑輪塚古墳（付第4・5・6図）

昭和28年8月、小松実業高等学校地歴クラブと石川考古学研究会が調査した（小松実高1954）。古墳は、前方後円墳であるが、栗津病院拡張工事中の調査であって、後円部の半分は削り取られ

ており、また、前方部も工場建設ですでに大部分が消滅した状態であった。粘土室は、前方部と後円部の接合点で検出されており、これが本墳唯一の主体部であった可能性は薄い。後円部では、墳丘断面で凝灰岩の「しっくい」を認めたとされており、凝灰岩の切石積横穴式石室を構築していた可能性もある。

土器は、主体部内南西のコーナー部に集積された状態で出土しているが、後円部西斜面でも須恵器坏4点が検出されたとしており、保管している遺物は両者混在していると思われる。報告書と照合し得たものは、カッコ書きでその記号を記したが、蓋坏では殆ど不可能であった。ただし、保管状況から、本墳出土の一括遺物と考えて良いものと思われる。

矢田借屋 8 号墳（付第 7 図）

昭和36年7月、小松高等学校地歴クラブが、工場建設で借屋古墳群が破壊されている途中で事前に調査した（小松高1962）。本古墳群最後の調査である。全長約30m強の前方後円墳で、当群内では7号墳も同様の規模・墳形である。墳丘自体の遺存状態は非常に良好であったが、主体部はすでに盗掘により破壊されていた。報告書では、「礫棺（礫床粘土棺とも考えられる）」としているが、「礫と凝灰岩の相当大きな部分」を検出したとされており、切石積横穴式石室を内部主体としていたとも考えられる。そうであれば、江沼地域最古の例に該当することとなる。また、くびれ部に埴輪列を検出している。

遺物の出土状態は不明であるが、土器への注記はしっかりしており、掲載した大部分が本墳の一括遺物と思われる。（P105参照）

矢田借屋 7 号墳（付第 8 図）

昭和30年7月、小松高等学校地歴クラブが、土砂採集事業による破壊の進行中に調査した（小松高1956）。全長約34mの前方後円墳で、西半分が大きく削り取られていたが、主体部を検出している。主体部は「礫棺と粘土棺の折衷様式ともいうべき」と表現されており、河原石積の横穴式石室の可能性が高い。また、埴輪を伴っている。

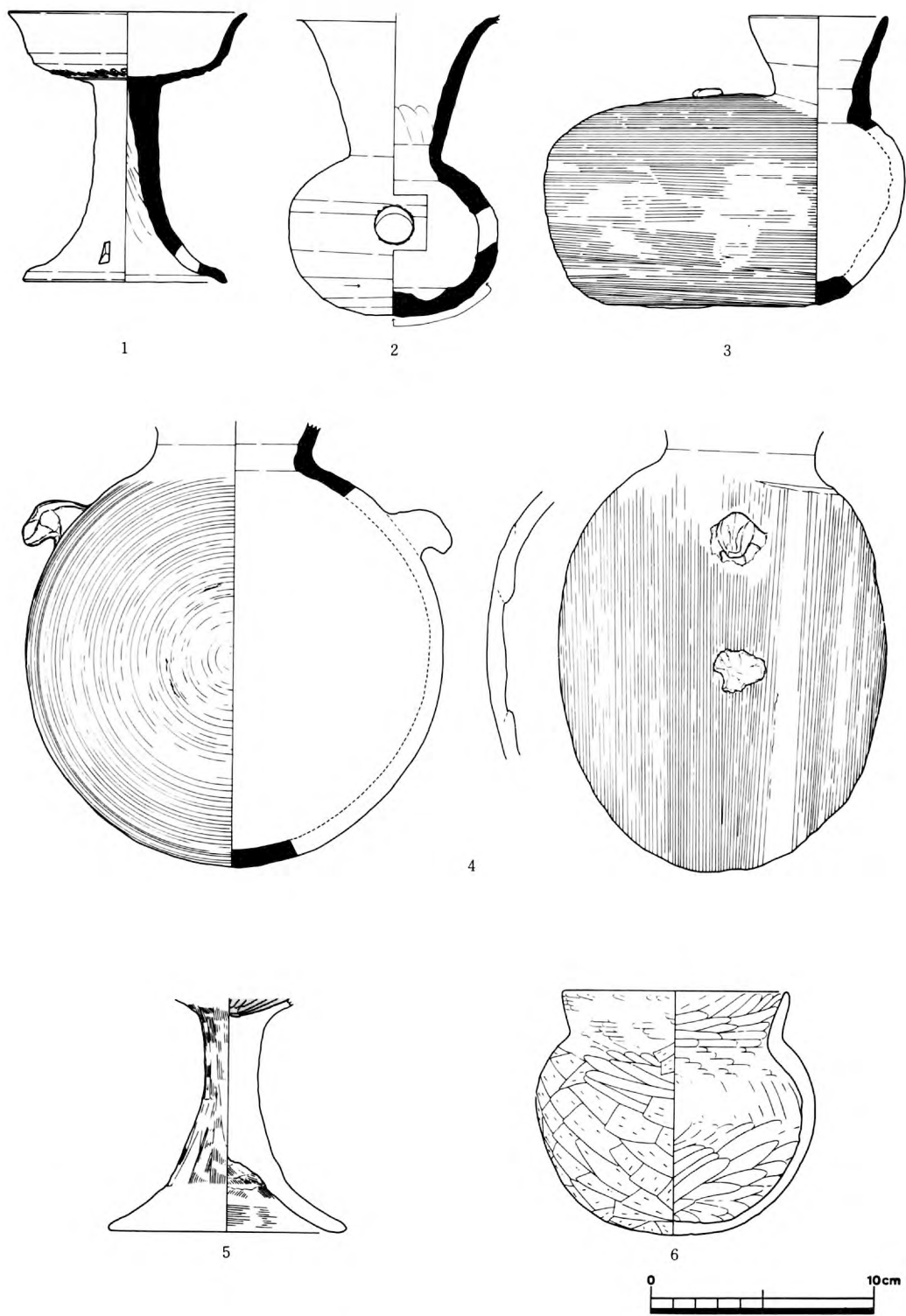
出土遺物は、保管が最も混乱しているもので、明確にできたのは1と2のみである。そのほかの蓋坏類は、4号墳出土遺物から除外されたものを一括したかたちで掲載した。本墳出土の可能性を指摘できる程度のものである。

矢田借屋 4 号墳（付第 9・10 図）

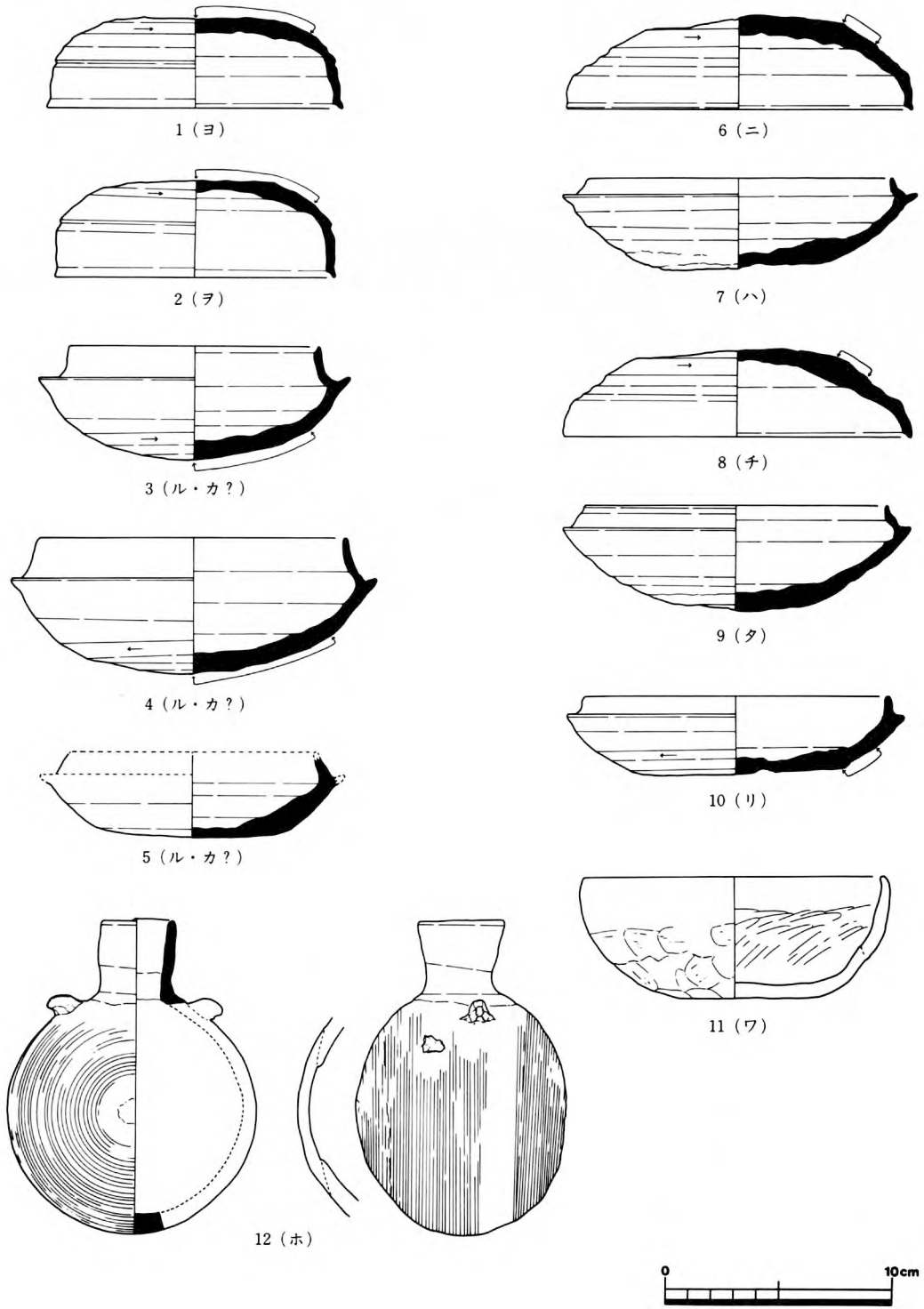
昭和25年8月、小松高等学校地歴クラブ考古学研究班が、粘土室の研究を目的として学術調査を実施した（小松高1951）。調査対象は2号墳と4号墳で、ともに径10m程の円墳である。両方から粘土室を発見したが、2号墳の出土土器は須恵器破片が2点のみであった。従って、掲載したのは、すべて4号墳のものである。

報告書との照合が困難なものも多いが、ほぼ確実と思われるものを抽出して掲載した。

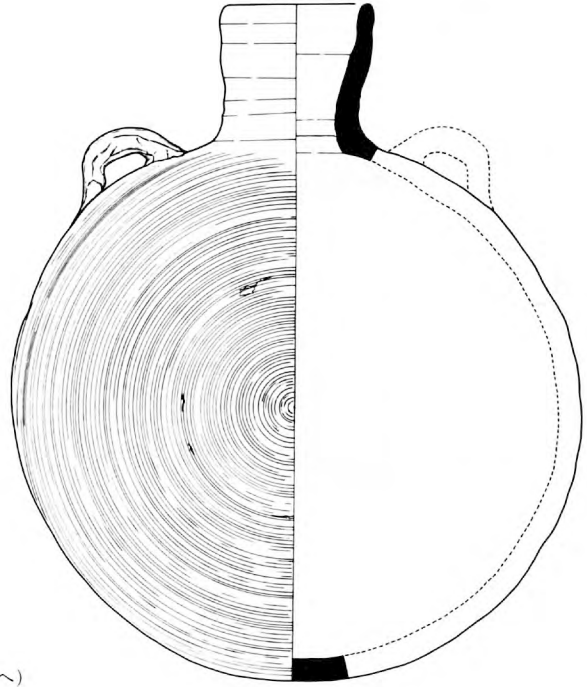
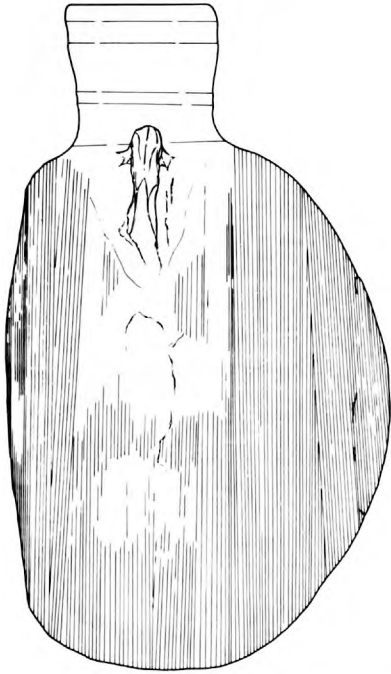
以上である。文献は、本文の引用・参考文献を参照されたい。



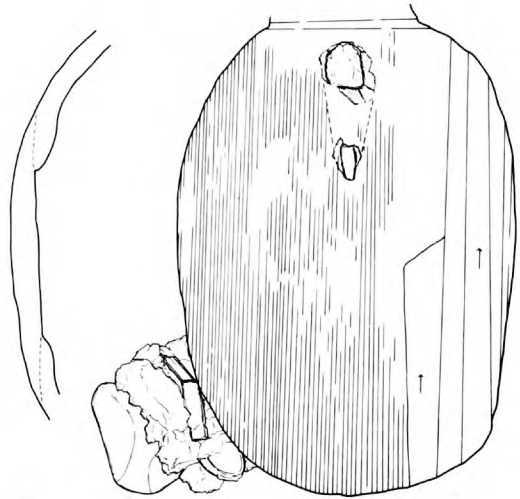
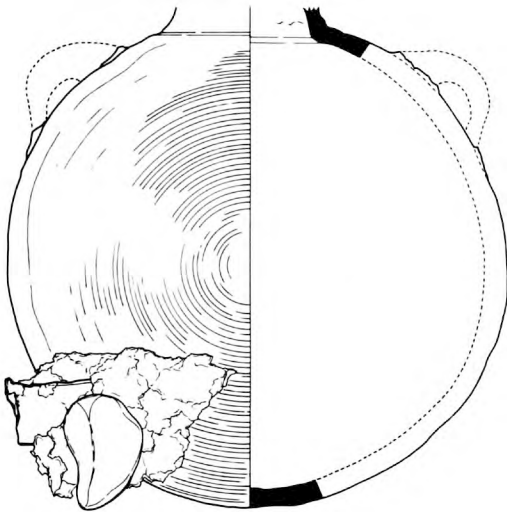
付第1図 埴田後山明神1号墳出土土器実測図 (S=1/3)



付第2図 念仏林古墳出土土器実測図 (S=1/3)



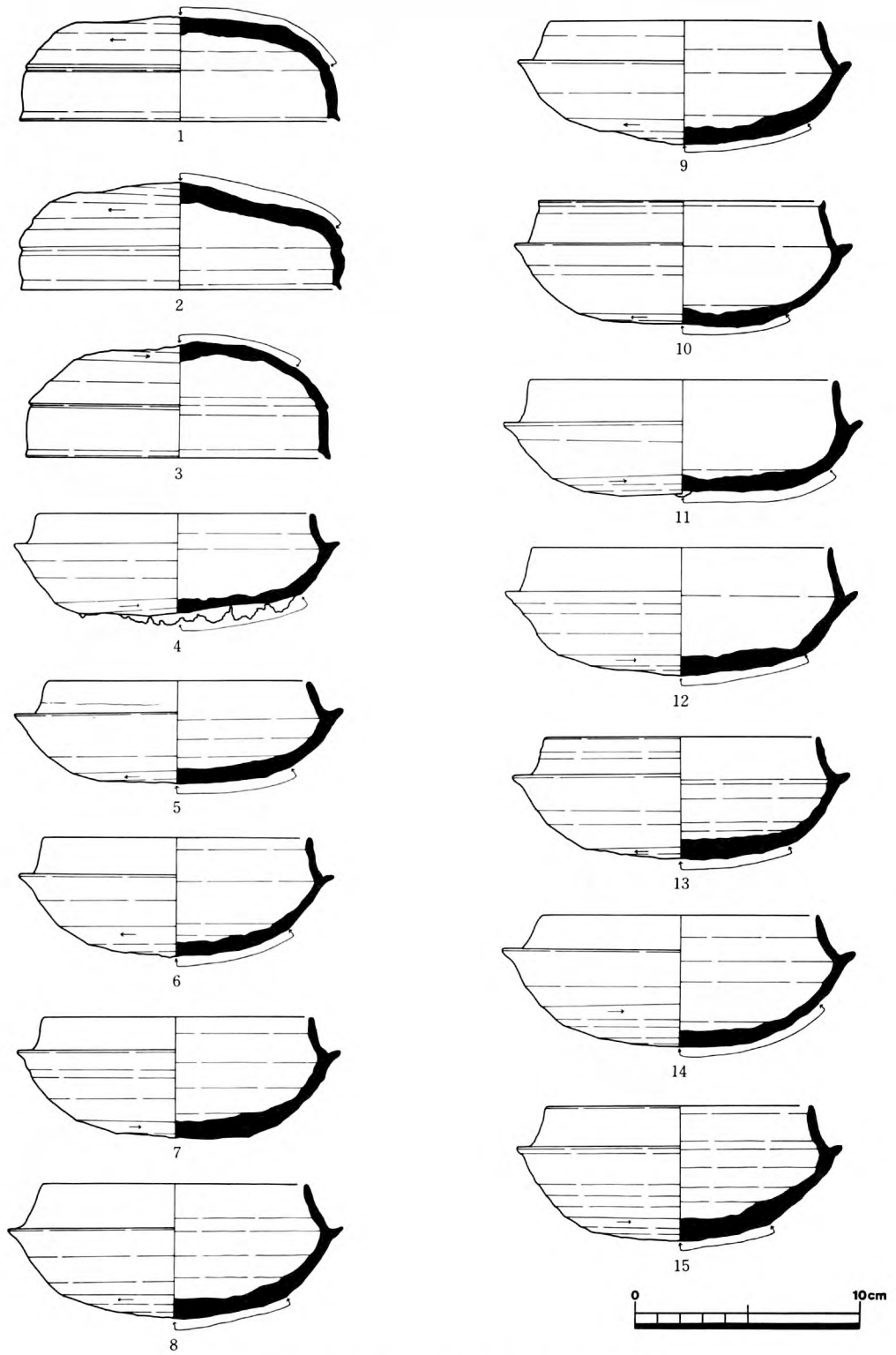
13 (〜)



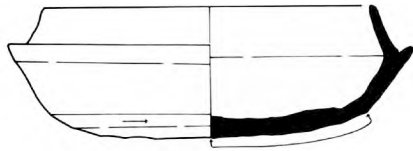
14 (ト)



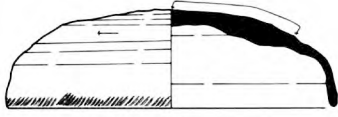
付第3図 念仏林古墳出土土器実測図 (S=1/3)



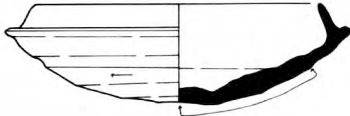
付第4図 藁輪塚古墳出土土器実測図 (S=1/3)



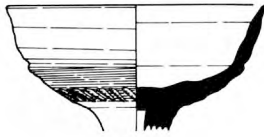
16



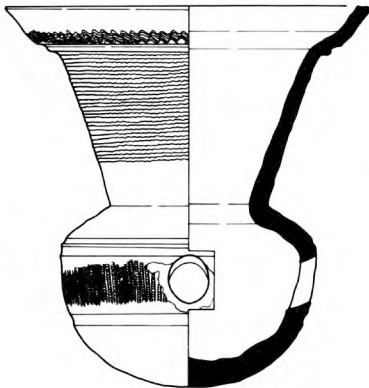
17



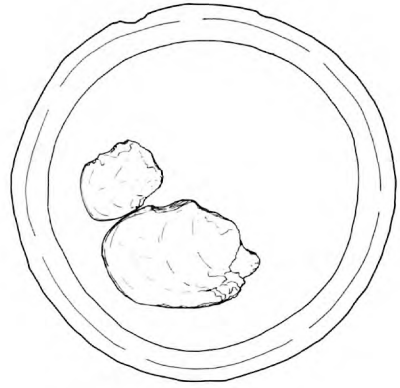
18



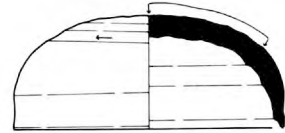
20 (ト)



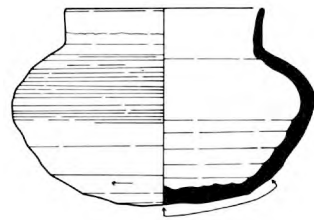
21 (ホ)



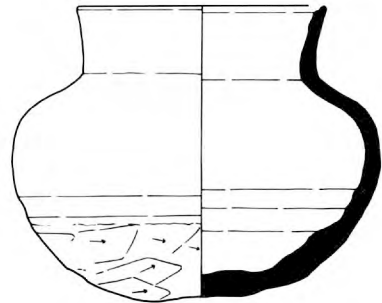
19 (U)



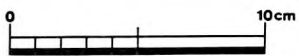
22



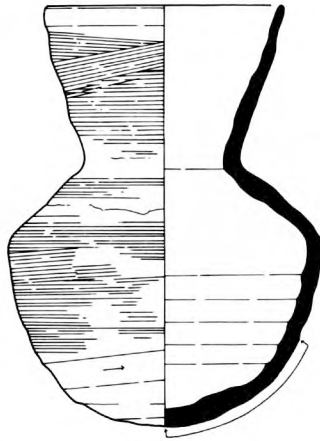
23 (チ)



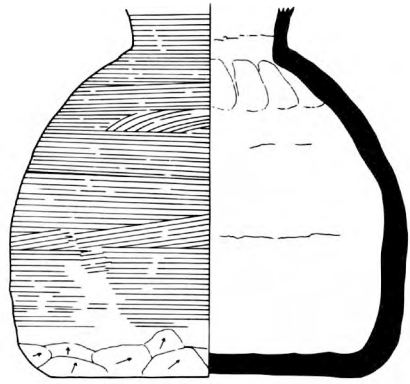
24 (ル)



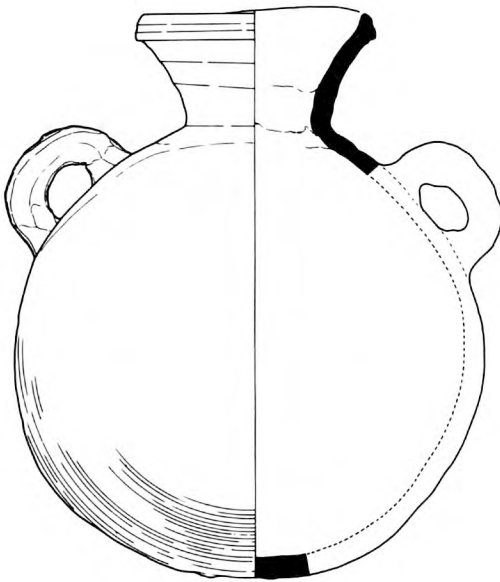
付第5図 葦輪塚古墳出土土器実測図 (S=1/2)



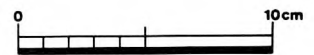
25 (ニ)



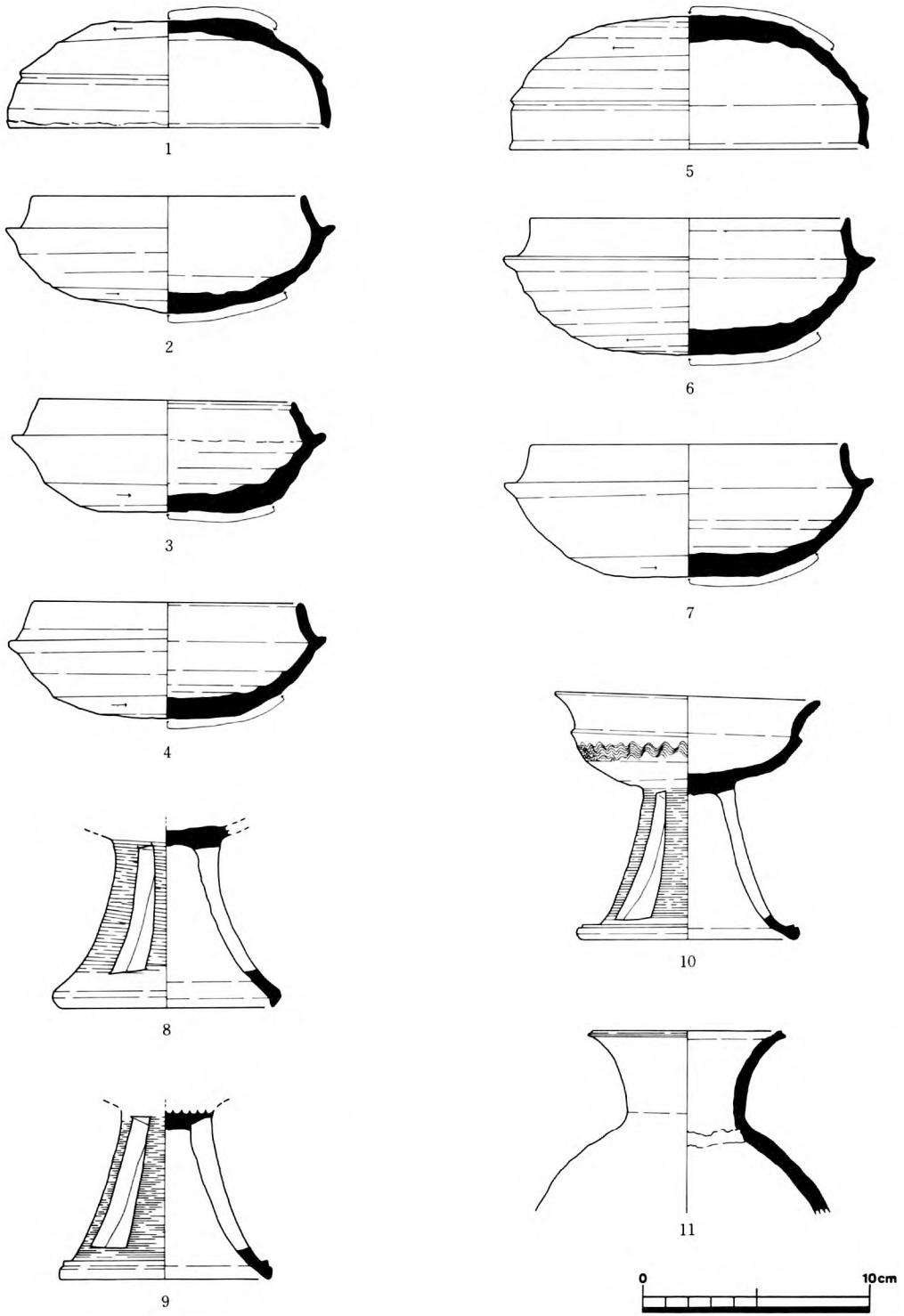
26 (リ)



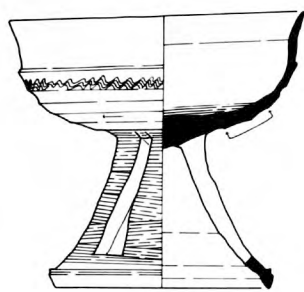
27 (イ)



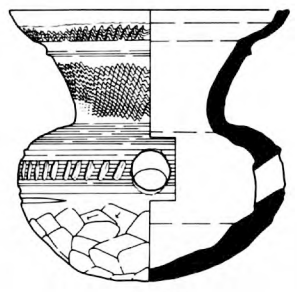
付第 6 図 養輪塚古墳出土土器実測図 (S=1/3)



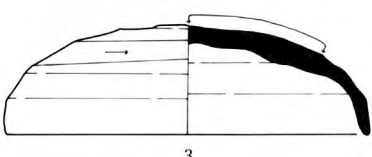
付第7図 矢田借屋8号墳出土土器実測図（ $S = \frac{1}{3}$ ）



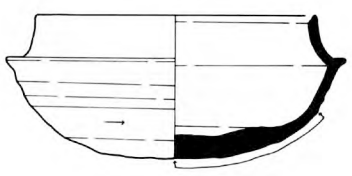
1 (10)



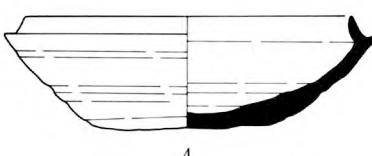
2 (12)



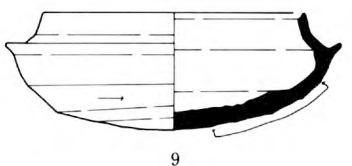
3



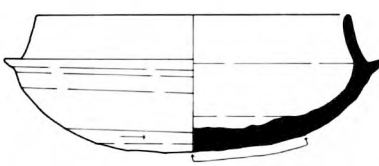
8



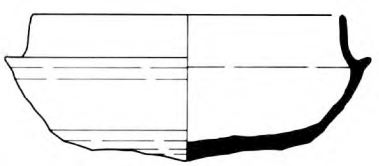
4



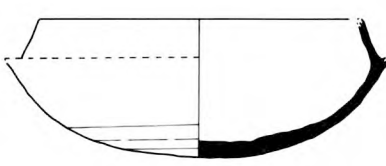
9



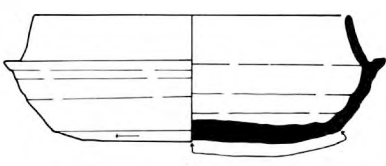
5



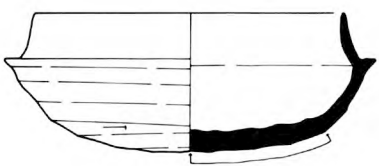
10



6



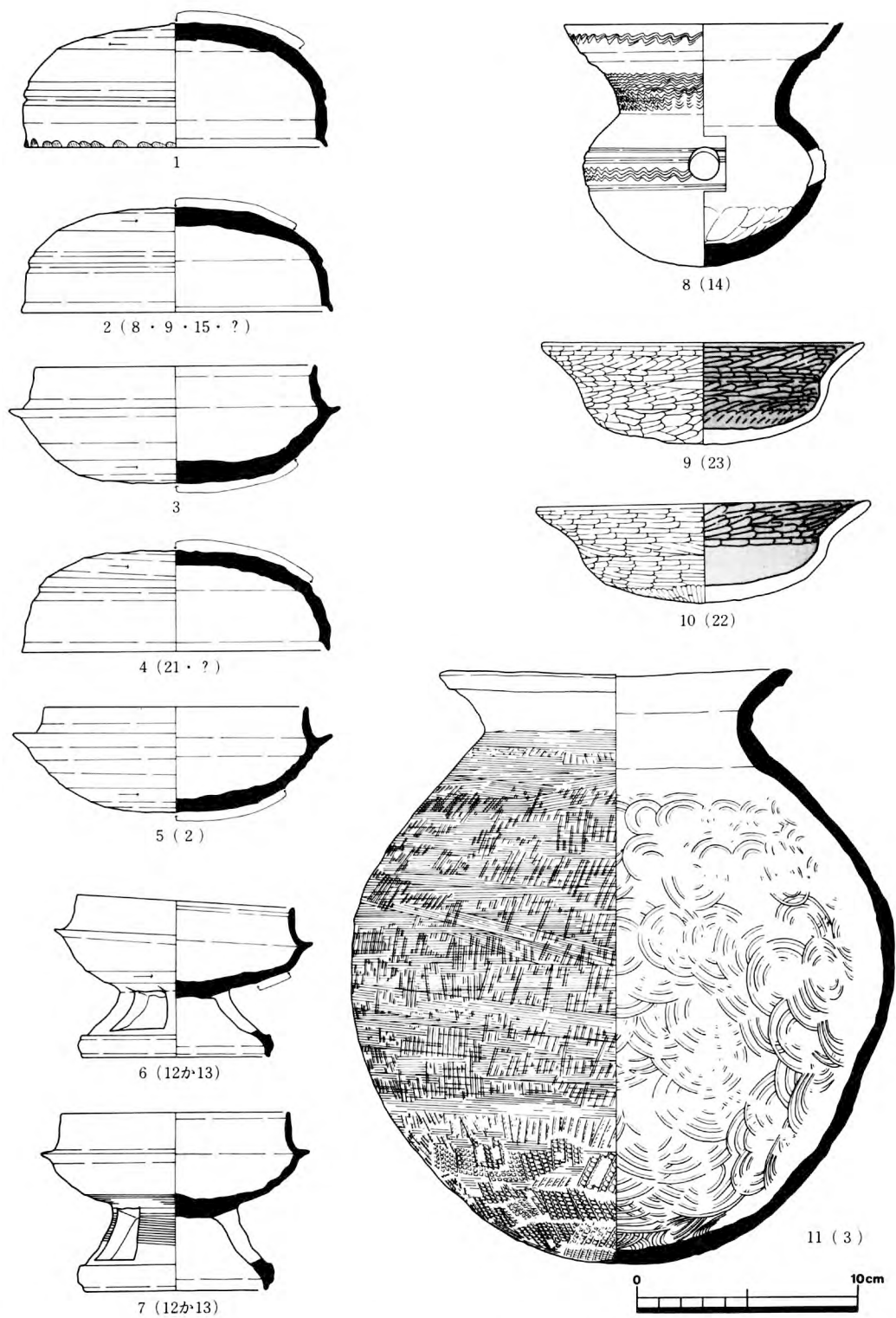
11



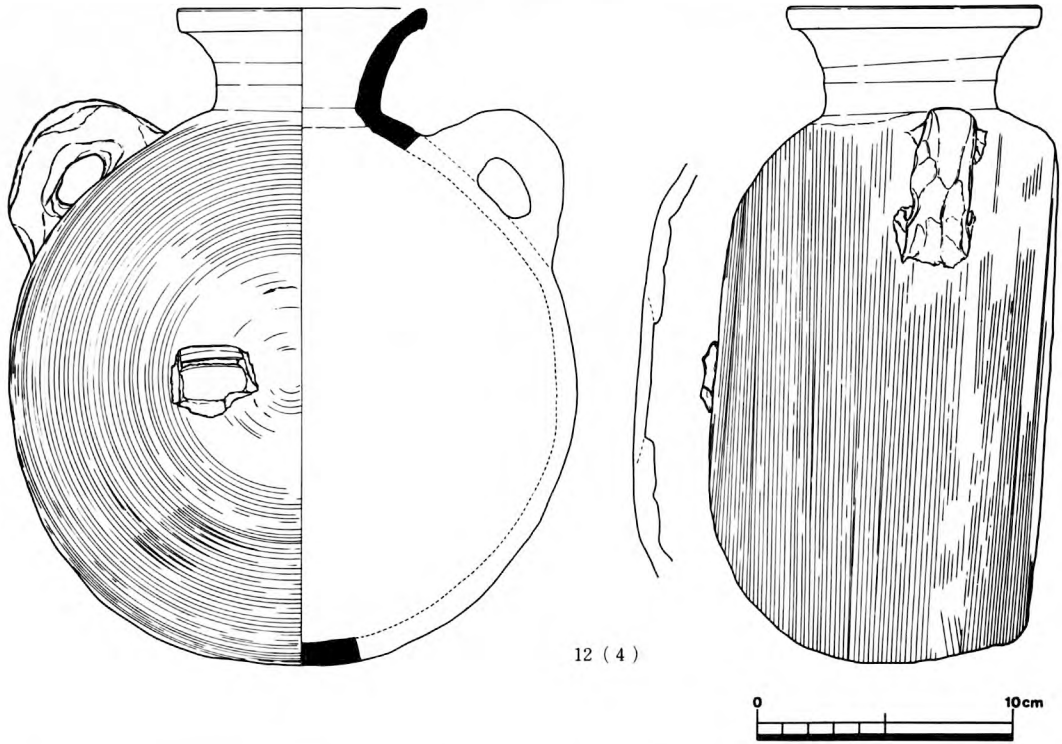
7



付第8図 矢田借屋7号墳出土土器実測図 (S=1/3)



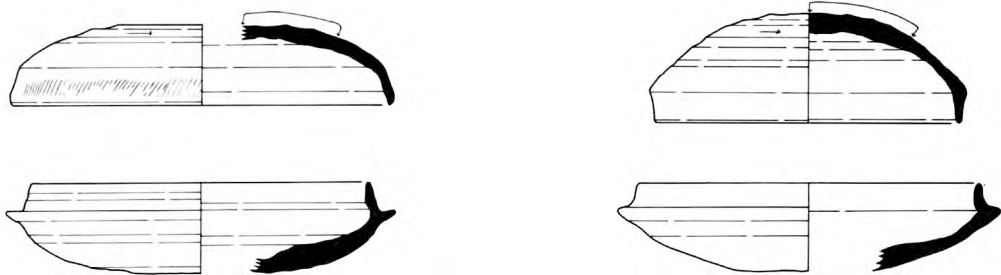
付第9図 矢田借屋4号墳出土土器実測図 (S=1/3)



12 (4)

付第10図 矢田借屋4号墳出土土器実測図 (S=1/3)

脱稿後、借屋8号墳出土とされる小破片の保管箱を見つけ、点検したところ、付第7図掲載蓋坏類とは、明らかに時期の異なるものが含まれていることが判明した。借屋8号墳出土遺物の注記は全て「36・8」という年月のみであるので、1号墳付近で採集したとする遺物との混在が予想される。ただ、保管遺物の内容の量比の関係から、8号墳から2時期にわたる遺物が検出されていた公算が大きいと思われる。



矢田借屋8号墳出土土器実測図 (S=1/3) 付第7図に追加

土器観察表

須恵器・土師器等土器色調一覧

須恵器	①	灰白色
	②	やや青味がかかった灰白色
	③	青味がかかった灰白色
	④	青味がかかった灰色
	⑤	灰色
	⑥	暗灰色
	⑦	青灰色
	⑧	やや暗い青灰色
	⑨	暗青灰色
	⑩	赤味がかかった灰白色
	⑪	赤灰褐色
土師器	⑫	黄灰白色
	⑬	淡い黄灰白色
	⑭	やや淡い橙褐色
	⑮	赤褐色

須恵器・土師器等土器胎土一覧

須恵器	①	白色微砂粒を少量含む
	②	白色砂粒を通常量含む
	③	白色砂粒を多量含む
	④	小石・白色砂粒を少量含む
	⑤	小石・白色砂粒を多量に含む粗悪な胎土
	⑥	砂粒をほとんど含まない良質の胎土
	⑦	白色砂粒・小石を微量含むが、良質の胎土
	⑧	微砂粒を少量含む良質の胎土
土師器	⑨	砂粒を少量含む
	⑩	砂粒・小石を多量に含む粗悪な胎土

* 胎土記号に付した a・b は、黒色土粒子の含有を示したもので、極めて多量に含むものを a 比較的多く含むものを b とした。

付第 1 表 後山明神 1 号墳出土土器(付第 1 図)

番号	器種	法量 (cm)	成形・調整 切り離し痕	色調胎土	焼成	備考
1	高 坏	口径10.7 底径 9.2 器高12.1	ヨコナデ	⑦ ③	良好	三方透し 坏部外面に 櫛描刺突文
2	甗		胴部下半に回転 ヘラ削り、他は ヨコナデ	④ ②	良	円孔を穿つ
3	平 瓶	口径 6.1 底径 9.2 器高13.2	体部にカキ目、 他はヨコナデ、 肩部に円盤状粘 土貼付 ナデにより切り 離し痕を消去	③ ⑤ b	良	外面の一部 に自然釉付 着
4	提 瓶		体部にカキ目、 他はヨコナデ、 肩部に鉤形で左 右一對の把手を 付す	① ③ a	良	外面の一部 に自然釉付 着
5	高 坏 (土師器)	底径10.7	裾部にヨコナデ 他はハケ目、坏 部内面にヘラ磨 き	⑭ ⑩	やや 不良	内面黒色処 理
6	小型壺 形土器 (土師器)	口径10.1 器高11.0	体部下半にヘラ 削り、他はヘラ 磨き	⑮ ⑨	やや 良	内面に黒斑

付第 2 表 念仏林古墳出土土器(付第 2・3 図)

番号	器種	法量 (cm)	成形・調整 切り離し痕	色調胎土	焼成	備考
1	坏 蓋	口径13.0 器高 4.0	天井部に回転ヘ ラ削り、他はヨ コナデ、内面中 央に同心円叩き 痕	② ④	やや 不良	

番号	器種	法量 (cm)	成形・調整 切り離し痕	色調胎土	焼成	備考
2	坏 蓋	口径12.4 器高 4.3	天井部に回転ヘ ラ削り、他はヨ コナデ	② ②	やや 不良	
3	坏 身	口径11.1 器高 5.1	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ	① ①	不良	
4	坏 身	口径13.5 器高 6.0	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ	外① 断④ ③	不良	
5	坏 身			① ③	不良	
6	坏 蓋	口径15.2 器高 4.2	天井部付近に回 転ヘラ削り、他 はヨコナデ 回転ヘラ削り	③ ③ a	良好	外面に自然 釉付着
7	坏 身	口径13.4 器高 4.1	ヨコナデ 回転ヘラ削り	④ ③	良	
8	坏 蓋	口径15.2 器高 3.9	天井部付近に回 転ヘラ削り、他 はヨコナデ 回転ヘラ削り	③ ③ a	良好	外面に自然 釉付着
9	坏 身	口径13.3 器高 4.7	ヨコナデ 回転ヘラ削り	④ ⑦	良	
10	坏 身	口径13.3 器高 3.5	底部付近に回転 ヘラ削り、他は ヨコナデ 回転ヘラ削り	内④ 外⑨ ③ b	良好	
11	埴 (土師器)	口径13.2 器高 5.4	外面は体部下半 にヘラ削り、内 面はヘラ磨き、 他はヨコナデ ナデにより切り 離し痕を消去	⑮ ⑩	やや 良	

番号	器種	法量 (cm)	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
12	小型瓶	口径 3.7 器高 14.0	体部にカキ目、 他はヨコナデ、 肩部に鉤形で左 右一對の把手を 付す	③ ③ a	良好	外面の一部 に自然釉付 着
13	提瓶	口径 5.6 器高 26.6	体部にカキ目、 他はヨコナデ、 肩部に環状の把 手を付す	⑪ ③	良	外面の一部 に自然釉付 着
14	提瓶		体部にカキ目、 回転ヘラ削り、 他はヨコナデ	④ ⑦	良好	直刀先、小 礫等錆の為 付着

付第3表 菱輪塚古墳出土土器(付第4～6図)

番号	器種	法量 (cm)	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
1	坏蓋	口径14.2 器高 4.7	天井部に回転ヘ ラ削り、他はヨ コナデ	④ ②	良	
2	坏蓋	口径14.2 器高 4.8	天井部に回転ヘ ラ削り、他はヨ コナデ	内③ 外④ ④ a	良	外面の一部 に自然釉付 着
3	坏蓋	口径13.5 器高 5.2	天井部に回転ヘ ラ削り、他はヨ コナデ、内面中 央に同心円叩き 痕	内④ 外⑤ ④	良	
4	坏身	口径12.3 器高 4.5	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に同心円叩き痕	① ⑤ a	良好	外面に自然 釉付着、底 部に砂塊溶 着
5	坏身	口径11.7 器高 4.6	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に仕上げナデ	① ①	やや 不良	
6	坏身	口径11.8 器高 5.4	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に同心円叩き痕	④ ④	良	
7	坏身	口径11.8 器高 5.5	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に同心円叩き痕	③ ②	やや 良	
8	坏身	口径11.7 器高 6.0	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ	内⑩ 外⑩ ①	やや 不良	
9	坏身	口径12.0 器高 5.5	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に同心円叩き痕	② ④	やや 良	
10	坏身	口径12.7 器高 5.6	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ	内⑦ 外⑤ ①	良	
11	坏身	口径13.8 器高 5.1	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ	内③ 外⑤ ④ a	良好	底部に土器 片溶着
12	坏身	口径13.4 器高 5.8	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に同心円叩き痕	内⑨ 外③ ④	良好	外面の一部 に自然釉付 着
13	坏身	口径12.2 器高 5.4	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に仕上げナデ	④ ④	良	

番号	器種	法量 (cm)	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
14	坏身	口径12.2 器高 5.8	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に仕上げナデ	② ④ b	良好	外面の一部 に自然釉付 着
15	坏身	口径11.7 器高 6.1	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に仕上げナデ	内⑦ 外② ① b	良	
16	坏身	口径13.0 器高 5.2	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ	内② 外⑥ ② a	良好	外面に自然 釉付着
17	坏蓋	口径12.9 器高 3.9	天井部に回転ヘ ラ削り、他はヨ コナデ、内面中 央にナデツケ	⑨ ④	良	口縁端部に 刻目文
18	坏身	口径11.3 器高 3.9	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 にナデツケ	⑨ ④	良	
19	坏身	口径12.2 器高 4.8	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ	③ ③ b	良好	内に貝二枚 有り
20	高坏	口径10.1	底部付近にカキ 目、他はヨコナ デ	⑥ ③	良好	底部付近に 篋描刺突文
21	罇	口径14.4 器高 15.1	ヨコナデ	⑨ ①	良好	円孔を穿つ口 縁部・頸部に 波状文・体部 に篋描刺突文
22	蓋	口径10.6 器高 4.5	天井部に回転ヘ ラ削り、他はヨ コナデ	内④ 外⑤ ④	良好	
23	短頸壺	口径 7.8 器高 7.8	底部に回転ヘラ 削り、肩部にか キ目、他はヨコ ナデ	① ①	良	
24	短頸壺	口径 9.6 器高 11.7	体部下半にヘラ 削り、他はヨコ ナデ	⑤ ③ b	良好	内外面に自 然釉付着
25	壺	口径 9.2 器高 16.6	底部に回転ヘラ 削り、外面にか キ目、他はヨコ ナデ	内② 外④ ②	良	
26	壺		底部付近にヘラ 削り、外面にか キ目、他はヨコ ナデにより切り 離し痕を消去	④ ⑦	良	
27	提瓶	口径 8.7 器高 22.6	体部の一部にか キ目、他はナデ 肩部に環状で左 右一對の把手を 付す	② ⑥	良好	内外面の一 部に自然釉 付着

付第4表 矢田借屋8号墳出土土器(付第7図)

番号	器種	法量 (cm)	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
1	坏蓋	口径14.1 器高 4.7	天井部に回転ヘ ラ削り、他はヨ コナデ、内面中 央に仕上げナデ	⑦ ④	良好	
2	坏身	口径12.0 器高 5.7	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ	③ ③	やや 不良	

番号	器種	法量 (cm)	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
3	坏身	口径11.3 器高 5.0	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ	④ ⑥	良好	
4	坏身	口径11.8 器高 5.2	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ	⑧ ④	良好	
5	坏蓋	口径15.8 器高 5.9	天井部に回転ヘ ラ削り、他はヨ コナデ、内面中 心に仕上げナデ	(内① 外⑤ ④a	やや 良	外面の一部 に自然釉付 着
6	坏身	口径13.9 器高 6.1	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に仕上げナデ	(内① 外⑥ ④a	良好	外面の一部 に自然釉付 着
7	坏身	口径14.0 器高 5.9	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 にナデツケ	① ④a	やや 良	外面の一部 に自然釉付 着
8	高坏	底径 9.4	外面にカキ目、 他はヨコナデ	⑨ ③b	良好	三方透し
9	高坏	底径 9.1	外面に櫛状工具 によるナデ、他 はヨコナデ	③ ③	良	三方透し
10	高坏	口径11.7 底径 9.5 器高10.8	脚外面に櫛状工 具によるナデ、 他はヨコナデ	⑨ ③	良	三方透し 坏部外面に 波状文
11	壺 ?	口径 8.3				現物なし

付第5表 矢田借屋7号墳出土土器(付第8図)

番号	器種	法量 (cm)	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
1	高坏	口径11.6 底径 8.4 器高10.7	坏底部付近に回 転ヘラ削り、脚 部・内面中央に カキ目、他はヨ コナデ	⑧ ⑦	良好	三方透し 坏部外面に 波状文
2	甗	口径11.0 器高1.7	肩部～体部中央 にカキ目、体部 下半ヘラ削り、 他はヨコナデ	③ ③	やや 良	円孔を穿つ口 縁部・頸部に 波状文・体部に 篋刺突文
3	坏蓋	口径14.2 器高 4.3	天井部に回転ヘ ラ削り、他はヨ コナデ、内面中 心に仕上げナデ	① ③	やや 良	
4	坏身	口径12.8 器高44.5	ヨコナデ ナデにより切り 離し痕を消去	② ②	やや 良	
5	坏身	口径12.3 器高 5.5	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ	(内① 外④ ⑤	やや 良	
6	坏身	口径12.7 器高 5.5	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に同心円叩き痕	① ③b	不良	
7	坏身	口径12.1 器高 5.5	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に同心円叩き痕	⑨ ②	良好	
8	坏身	口径11.0 器高 5.7	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ	④ ②	良	外面の一部 に自然釉付 着

番号	器種	法量 (cm)	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
9	坏身	口径10.3 器高 4.7	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に同心円叩き	① ⑦	不良	
10	坏身	口径12.1 器高 5.8	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に同心円叩き痕	⑦ ②	良好	外面に自然 釉付着
11	坏身	口径12.4 器高 5.1	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に仕上げナデ	③ ⑦b	良好	外面の一部 に自然釉付 着

付第6表 矢田借屋4号墳出土土器(付第9・10図)

番号	器種	法量 (cm)	成形・調整 切り離し痕	色調 胎土	焼成	備考
1	坏蓋	口径13.8 器高 5.7	天井部に回転ヘ ラ削り、他はヨ コナデ、内面中 心に同心円叩き 痕	② ⑤	良	口縁端部に 篋状工具に よる削り?
2	坏蓋	口径14.1 器高 4.8	天井部に回転ヘ ラ削り、他はヨ コナデ、内面中 心に同心円叩き 痕	④ ⑥	やや 良	
3	坏身	口径12.8 器高 5.3	底部に回転ヘラ 削り、他はヨコ ナデ、内面中央 に同心円叩き痕 後仕上げナデ	③ ⑥	やや 不良	
4	坏蓋	口径13.9 器高 4.6	天井部に回転ヘ ラ削り、他はヨ コナデ	③ ③	良	
5	坏身	口径11.8 器高 4.8	底部に回転ヘラ 削り後ナデ、他 はヨコナデ	④ ⑦b	良好	受部に自然 釉付着及び 蓋重ね焼き の痕跡有り
6	有蓋 高坏	口径 9.8 底径 8.4 器高 7.2	坏底部付近に回 転ヘラ削り、他 はヨコナデ	⑦ ⑦	良好	三方透し 受部に蓋重 ね焼きの痕 跡有り
7	有蓋 高坏	口径10.2 底径 8.2 器高 8.1	坏底部付近～脚 裾部にカキ目、 他はヨコナデ	(外⑧ 断⑩ ⑤b	良好	三方透し 内外面に自 然釉付着
8	甗	口径12.6 器高11.0	ヨコナデ、内面 中央に指圧痕	⑤ ③	良	円孔を穿つ 口縁部・頸 部・体部に 波状文
9	鉢形 土器 (土師器)	口径14.7 器高 4.6	ヘラ磨き	⑭ ⑨	やや 良	内面に黒色 処理
10	鉢形 土器 (土師器)	口径14.9 器高 4.5	ヘラ磨き	⑭ ⑨	やや 良	内面に黒色 処理
11	甗	口径16.0 器高27.1	体部外面平行叩 き後カキ目、内 面同心円叩き後 ナデ、他はヨコ ナデ	⑪ ③	良	
12	提瓶	口径 9.7 器高25.8	体部外面にカキ 目、他はヨコナ デ、肩部に環状 で左右一対の把 手を付す	② ②a	良好	外面の一部 に自然釉及 び坏蓋片付 着



後山古墳群遠景（南から）（石川県立埋蔵文化財センター提供）



後山古墳群遠景（北から）（石川県立埋蔵文化財センター提供）



調査前



調査後



調査中の無常堂古墳（石川県立埋蔵文化財センター提供）



第一主体部



第一主体部（浮いた遺物取り上げ後）



眉庇付冑出土状況



短甲部品出土状況



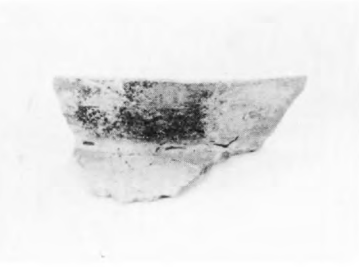
第二主体部



第二主体部礫床



第二主体部礫除去後



1



2



前 面



左側面



後 面



上 面



右側面



内 面



後 面



右側面



前 面

土器・眉庇付冑・短甲



1



2

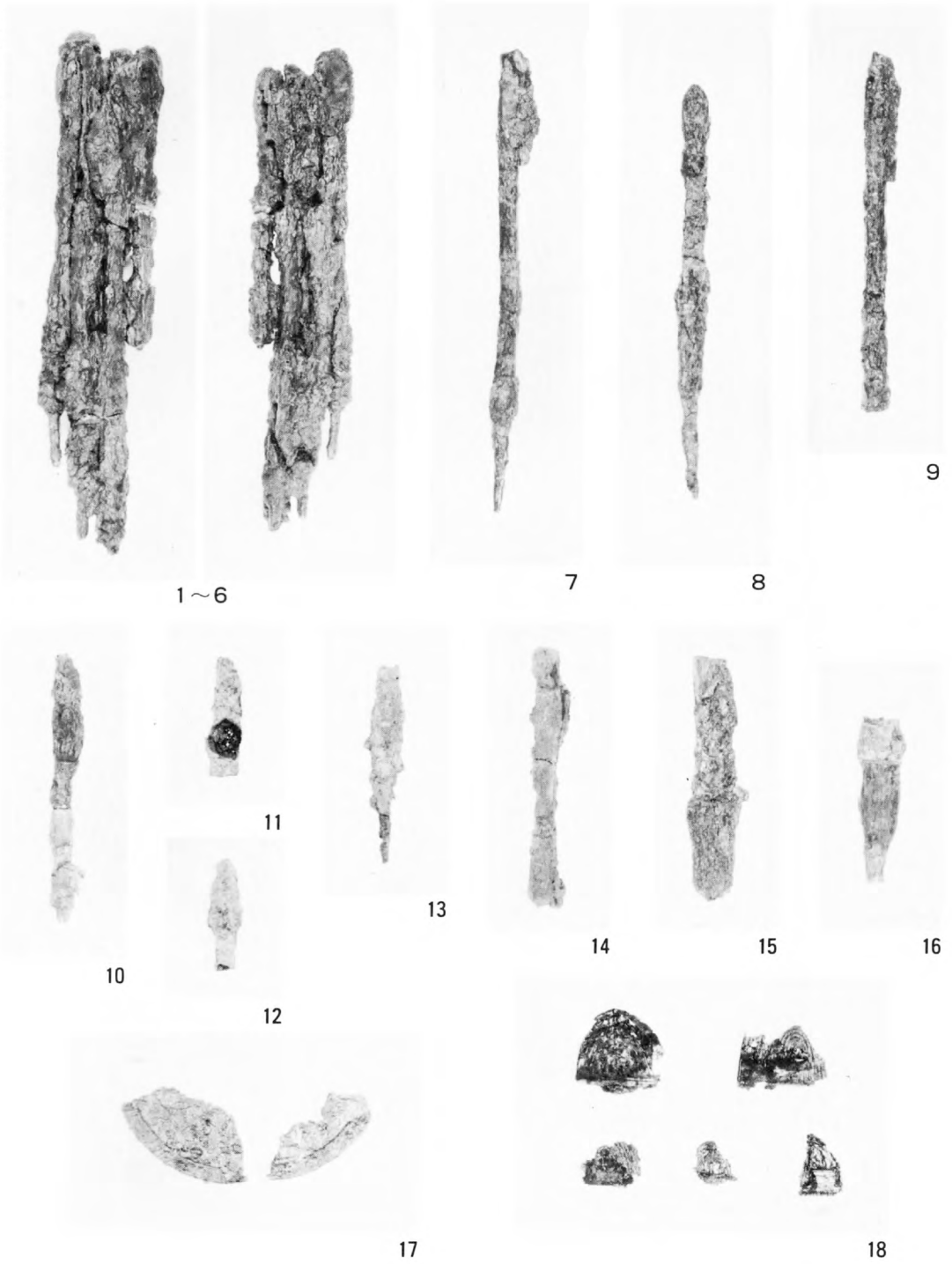


3



4

鉄 劍



鉄器・縦櫛



遺跡近景（発見時）



主体部発見時の状況



周溝調査風景



Bトレンチ周溝土層断面



Eトレンチ周溝土層断面



Fトレンチ周溝土層断面



Gトレンチ周溝土層断面(西壁)



同左(北東壁)



主体部プラン確認状況



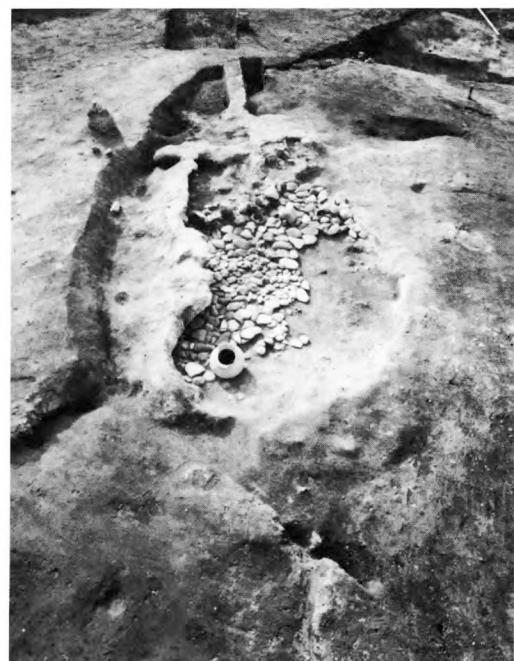
主体部調査風景



主体部土層断面



主体部土層断面



主体部完掘状況



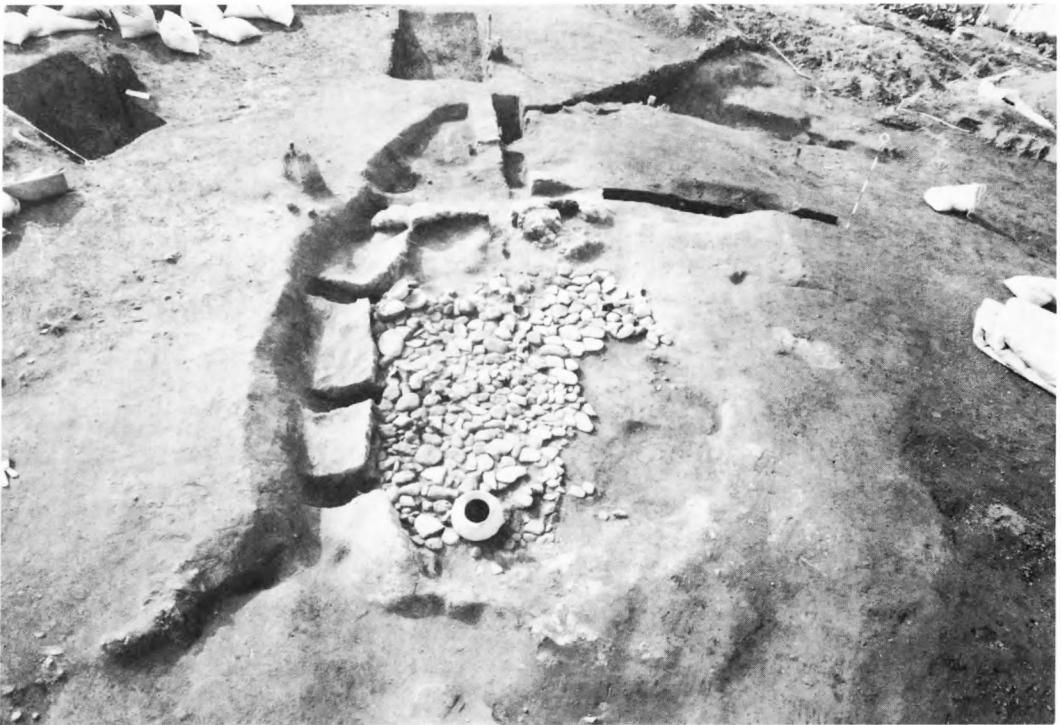
同 左



同 左



主体部と周溝（北東から）



主体部粘土壁取りはずし後



粘土壁断面(D-D'南壁)



南壁タチワリ状況



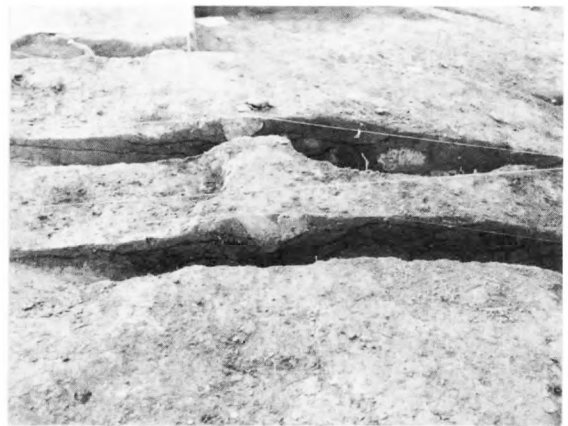
須恵器出土状況



粘土壁断面(C-C'南壁)



床面タチワリ状況
(手前がP-1)



北壁タチワリ状況



主体部タチワリによる1号土坑検出状況



1号土坑(粘土塊と礫集中)



1号土坑礫集中(粘土塊除去後)



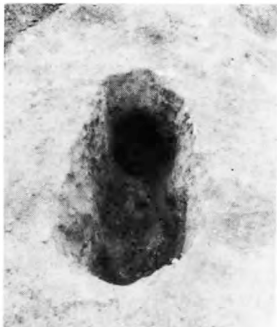
2号土坑



主体部下位遺構完掘状況



主体部木芯痕と主体部範囲



主体部木芯痕(P-1)



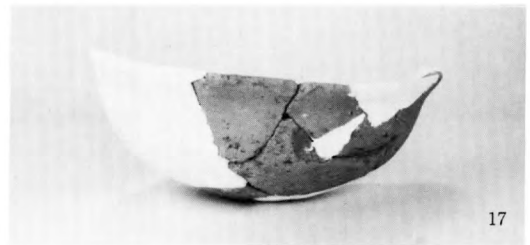
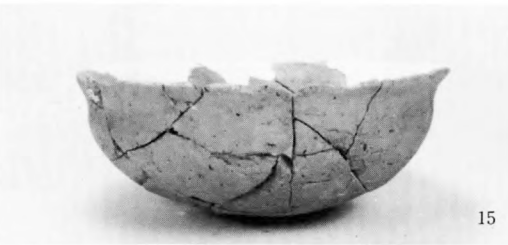
1号溝完掘状況



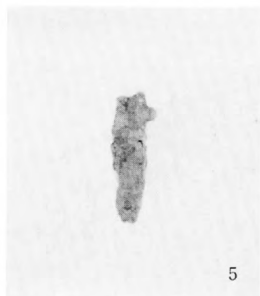
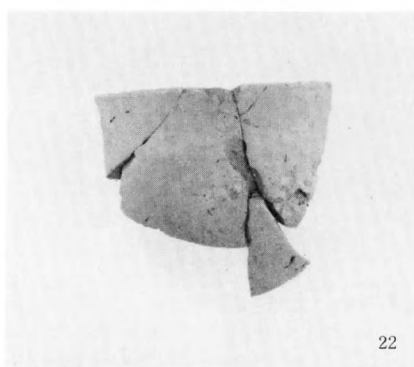
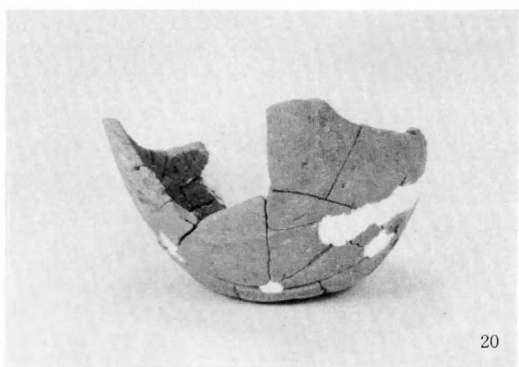
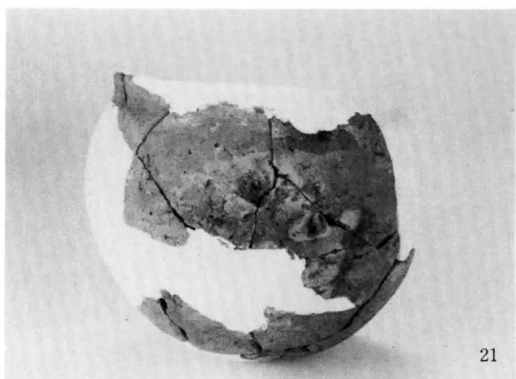
1号溝遺物出土状況



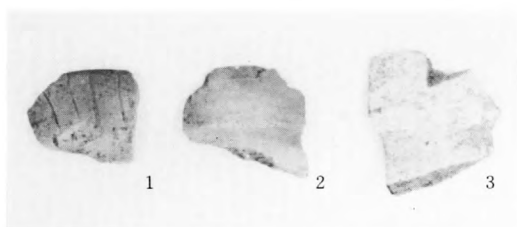
主体部出土須恵器（第29図）



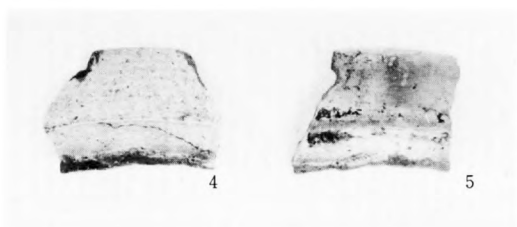
主体部出土須恵器(11~14、第29・30図)・土師器(15~18、第31図)



主体部出土土師器(19~22、第31図)・鉄製品(1~5、第32図)



周溝内出土



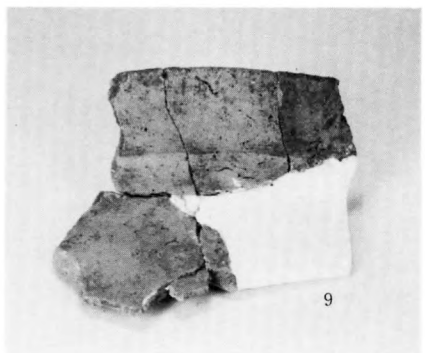
2号土坑出土



主体部出土



1号溝出土



1号溝出土 (8~10)

その他の遺構出土土器(第39・40図)

後山無常堂古墳・後山明神3号墳
発掘調査報告書

発行日 平成元年3月31日

編集 小松市教育委員会
発行者 石川県小松市小馬出町91番地

印刷者 英文堂印刷(株)